

# 劇壇縱橫

第一一年 第二號

## 中村鴈治郎號

鴈治郎の持つ情味	澤 瀧 久 孝	鴈治郎のお三輪	大 村 嘉 代 子
關西の三幅對	高 安 吸 江	回 答 錄	佐 藤 紅 綠 平
ほんごうの藝術家	大 西 利 夫	山蘆江、清水三重三氏	
鴈治郎と伊賀越	鎌 谷 來 水	外數十名	
鴈治郎の情味	服 部 嘉 香	壺屋久兵衛(稽古見たま)	
鴈治郎の偉い處	富 田 泰 彦	伊賀越饅頭娘	松 長 照 夫
成駒家さん	食 滿 南 北	鴈治郎と劇評	山 本 修 二
伊 賀 越		遺して置きたい「鴈治郎	
鴈治郎に寄す	矢 澤 孝 子	映 畫	吉 本 寛 汀
傳統的美	成 瀬 無 極	鴈治郎の肚	大 森 痴 雪
福助の「胸」の「頤」	中 井 浩 水	スケッチ	柴 谷 柴 舟
痛快兇中村魁車	野 村 治 郎 三 郎	中村鴈治郎	馬 場 啼 二
平凡な芝居話	鳥 江 鐵 也	芝居漫畫二題	吉 岡 鳥 平
長坊シミ中坊	新 谷 誠 水	將門の子	笹 山 吟 葉
鴈治郎雜文	山 上 貞 一	原色版畫	吉 川 觀 方
自愛の雀右衛門其他	西 田 眞 三 郎	十一月中座狂言	
衣裳の下繪	吉 川 觀 方	次號豫告	
「合邦」の復活に當つて	京 極 利 行	編輯後記	

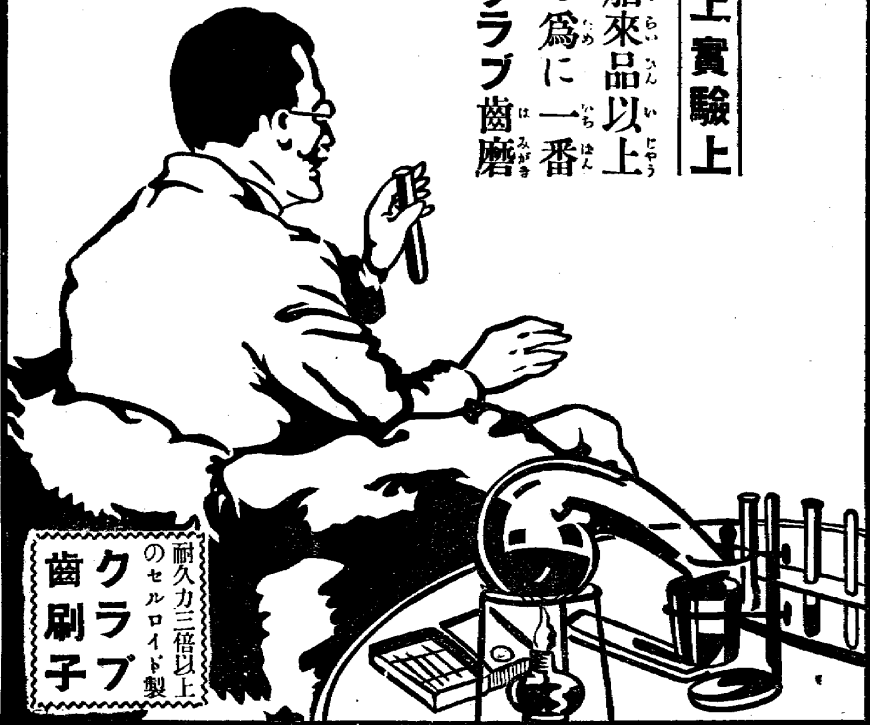
定 價 金 三 十 錢 (送料五厘)

# ブラク 磨菌煉

便利で衛生的なチューブ入りのクラブ煉菌磨

學理上實驗上

効力舶來品以上の齒の爲に一番よいクラブ齒磨



耐久力三倍以上のセルロイド製のクラブ齒刷子

酒 銘



メ ス ム ク フ

大阪市西區立賣堀北通二丁目

花 木 大 阪 支 店

電話新町(六七五番  
二六九番

東京市神田區連雀町十八番地

花 木 東 京 支 店

電話 大手五五七五番

兵庫縣攝津灘西郷町新在家

釀 造 元 花 木 本 家 商 店

電 話 (葦合九九七番  
御影二六〇番  
三一三番

神 戶 市 榮 町 五 丁 目

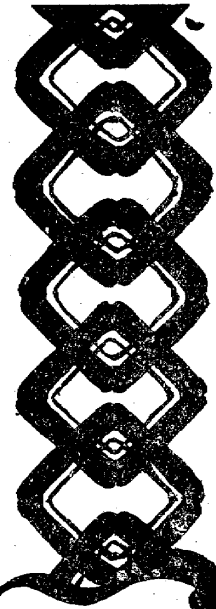
花 木 神 戶 支 店

電話元町(辰一一五七番  
一七六一番

横濱市花咲町四丁目五五

花 木 横 濱 出 張 所

電話二〇三九番



酒自慢  
食道第  
関東南

袖白  
橋原

天狗



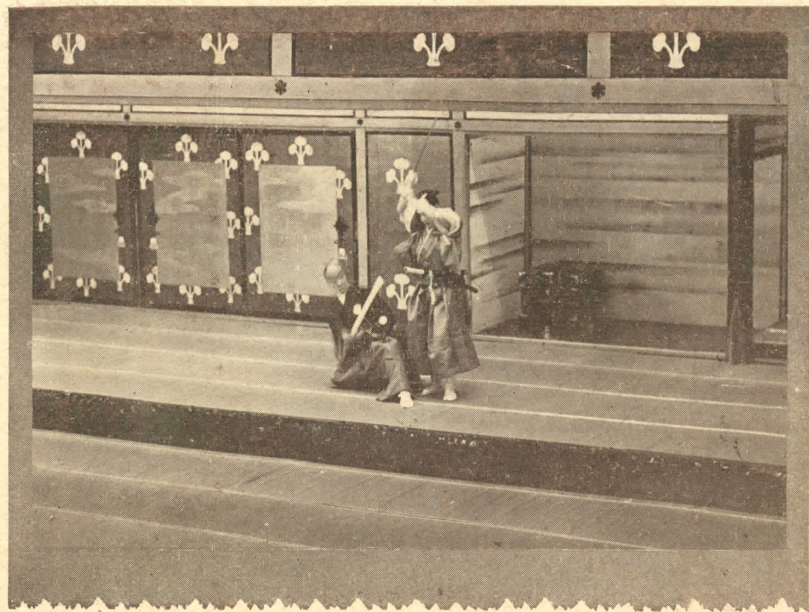
局成電  
四)CO



中村 鷹治 郎  
紙屋 治兵衛  
『島天中心』  
吉川 觀方 書伯 筆



『越 賀 伊』  
門衛右政木唐の郎治鷹村中  
座 中 阪 大



『越 賀 伊』

門衛右政木唐の郎治鷹村中

記内大田響の助福村中

座 中 阪 大

# 劇壇縱橫

十一月號



中村鴈治郎の唐木政右衛門

第一號 第二號





## 鴈治郎の持つ情味

澤 瀉 久 孝

近頃は殆ど芝居を觀ませんし、以前に觀たのは最早印象の朧になりかけた頃なので、たゞ思ひつくまゝに少しばかり述べてみたいと思ひます。

通云はれるほごの人の觀照は別として、私達が鴈治郎の舞臺を觀て一番嬉しく思ふのは、この優の持つてゐる豊かな溢れるやうな情味です。たゞへて申すに『魂、ぬけてさぼん、さ』で花道に出て來る治兵衛、編笠に紙衣姿で吉田屋の格子に立つ伊左衛門の寂しい姿、わけてもその頸から肩へかけての綫、さては、落ちてゆく木藏を悄然と若狭助が柱に凭つて見送る『下邸』の幕切れ等には、たまらない程の魅力を感じます。いやかういふ情味は一つの劇の中でも隨所に感受されます。たゞこゝに遺憾な事は、この鴈治郎の優れた情味が時々劇全體に一貫して保たれずに、所々に惜しい破綻を見せるこ

ミです。そしてこれについては色々な事が考へさせられます。先づ第一にかうした俳優の情味さいつたものはどこから生れるか？ それは勿論その俳優の『柄』が第一の要素だと思ひます。こゝに云ふ『柄』の意味は顔の輪廓や道具立をも含めてゐるのです。次に『柄』については舞臺上の訓練を第二の要素として舉げねばなりません。云ふのは、俳優の科白につれて動く體の綫の流れや、俳優が舞臺でゐる、殊の姿態（型ばかりで、ありませぬ）を構成する體の綫は、舞臺上の訓練によつて洗練されるからです。舞臺上の訓練さういふ言葉は誤解を招きさうですが、こゝではその時にさしあたつての特殊の稽古や工夫を意味してゐるのではなく、平素の訓練の蘊蓄を意味してゐるのです。情味さういふものは作らるべきものではなく、自然に生れ出るべきものだからです。さて、この二

この要素の中では云ふまでもなく『柄』の方が主要です。『柄』あつての訓練だからです。してみるに『柄』に於て多くの優れたものを恵まれてゐる鷹治郎が、多少の訓練によつて豊かな情味を持つことは頗る當然の事です。たゞ前にのべたやうに、この優れた情味が往々局部的で、劇全體に一貫して保たれないのは何故か？ 此は鷹治郎があまりにも凝つた工夫によつて強て情味を出さうと努める事が却て失敗を招く原因となつてゐるのではないでせうか。これも前に申した通り情味は決して作らるべきものではなく、自然に流れ出るべきものだからです。小刀細工が破綻の基になるのです。私達は鷹次郎の過去の舞臺に於てかうした例證の幾つかを數へる事が出来ると思ひます。殊に中日以後の鷹次郎の舞臺が初日頃に比して却つて劣つて見ゆる事が時々あるのは、工夫が益々誤つた方向に凝されてゆくからだと思ひます。

次に考へさせられるのは情味の推移といふことです。情味が『柄』を主要な要素とする以上、そして、『柄』即ち顔の輪廓道具立、肢體の線の硬直柔軟等が俳優の年齢と共に變化する以上、情味もまたそれに應じて推移するのは云ふまでもありません。俳優の情味は、その年齢と共に優艶より枯淡への曲線を描いて移つてゆくのは當然です。然しこの推移期に立つ

た俳優は宛かも青春にわかれをつけるすべての人々が限りなき愛惜を感じるやうに、この失はれゆく優艶の情味に堪へ難きみれんを感じてはこれを恢復しようとする焦慮するやうです。年老た女形が何時までも娘役や若女房役を演りたい欲望を棄てないのはよく聞く話です。然しかうした自然に失はれてゆく情味の恢復といふことは前に申しました情味そのもの性質からみて當然徒勞に終るべきも、ではないでせうか。一昨年京都の顔見世で、鷹治郎の『宵長庚申』の半兵衛の見事な出来栄を見た時この優にも既に此の推移期の到来してゐる事を感じました。鷹治郎が、當然に失はるべき過去の情味に執することなく、來るべき新しい情味に進んで投ずることを希望します。忠臣藏をやつて最早勸半よりも山良之助としての成功を心掛られたい。但しこの優の來るべき情味を活すべき脚本が舊來の歌舞伎脚本にのみ限ることは思はれません。たゞこの優の舞臺上の訓練を考へる時、時代を現代にする事だけはまづ問題にならないと思ひますが、以上若輩のくせにいろ／＼妄言を書つたものゝ鷹治郎の持つ舞臺上の情味は現在東西の劇壇に殆どその類を見ないものであり、勿論私達はその情味を何人にもまして高く評價し深く讚美するものであります。妄言は望望の欲に出たところ當、の鷹治郎氏の寛恕を乞ふ。猶文中の見當違ひは旨の垣覗きとして讀者の宥恕を乞ふ



成  
駒  
屋  
さん

## 關西の三幅對

高安吸江

誰が云ひ始めたか知らないが、鴈治郎と栖鳳、それに先年七十歳で逝いた金剛謹之輔を、關西での三幅對と稱して居つた。恐らくこの三人が有つて居る、技巧の極致について耐ふのであらう。

私はまだ個人としての栖鳳氏を、識る機會を得ないから、是は別として、龜鶴鴈治郎君は年來のちかづきであり、又金剛翁は、その晩年屢病床を見舞ふたのみならず、藝事に關して其相手方を勤めたところもあるから、性行の幾分を親しく知るこゝが出来た。それで此兩人を比較し、果して何

の點まで、共通性を有つて居るかを見やうと思ふ。

故大谷光堅師の追悼諸會が、今橋の灘萬で開かれたことがある。それは丁度金剛翁のなくなる數月前であつたが道成寺の番囃子に句佛上人のシテで、翁はワキを勤むる外大鼓で竹生島の一調をうつ豫定であつた。然るに、其前晚になつて宿痲の瘤腫が破壊して下血した爲め、無論大阪行は中止になつた。處が翁はこれを一方ならず遺憾に思ひ家人の隙を見つけて病床をぬけ出し、秘藏の鼓をさげて室町の自宅から四條烏丸の交叉點まで行つたのを、やつゝ家人が追附つて伴れて戻つたが、それでも玄關先で腦貧血の爲め倒れたと云ふ。

是は句佛上人への御勤めと云ふよりも、寧一調のためであつた。元來大鼓の一調と云ふものが既に皮肉に出來て居る上に、竹生島の様な平凡な曲だけに一層皮肉で、重い澁いものである。故石井一齊直傳以來、まだ其眞髓を傳へ得なかつたのであつたから、是非やつて見たいと、兼ねてから此日を樂にして居つたのであつた。即謹之輔翁は秘曲を世に残したいために、自己の身命を忘れて居たのである。

鴈治郎君は先年東京で、合方のイキが拙かつた爲に、部屋へ呼びつけて大眼玉を喰はし、翌日から是非改めるやうに命じたところがあつたが、それは丁度樂の日であつた。藝事の前には簪日もない。恙う云ふ類は大阪でもチヨイ

あり、私も時々目撃した。

鴈君が世話物に於て獨特の情愛を描き出して、好劇家の溜飲を下げさして居る様に、金剛翁は下掛りの太い線のうちに巧緻な軟味をあらはすことに得意である。月並能の演題を決める際よく幹事から重い老人物を當て、來るのに尠からず不平で、常に艶麗な鬘物を望んで居つた。

生理的に若い人々に比して、更に／＼若々しく活氣を有つて居る鴈君は、決して空拳でこの自然の恩恵を得たのではない。如何にすれば若やぎ得るかの問題は常に彼の念頭を去ることなく、平素浴が如く服用する、仙話的に種々雑多な藥品は皆此目的のためである。私がいつも受ける健康相談は、唯この元氣の充溢に關するもののみである。渾々としてつきぬ泉の如く、藝談にふけるのは兩人同様であるが、化石の如き能三・熔岩に似た劇三分其趣を異にするやうに、近い演能に使用すべき裝束萬端が、取揃へて列べられた衣桁を前に、諄々として自己多年の蘊蓄を傾盡し、可成多くそれを後人に傳へ置きたい、希望に充ちて居た謹翁に對して、鴈君は絶えず新智識を他から得やうとする欲求を有つて居る。それが根本の思想に關してではなく、多く末節の技巧に止まることは云へ、常に何か新しいものへ三三小心翼々、研究に研究を重ねつゝ精進努力する有様は眞に敬服すべきである。

本年二月中座で宵庚申をやつた時、私はある機會から其

出演前後の血壓を測つたところがある。初日はさもなく、日を経るに従ひ差異が殆ど無くなるのが普通であるのに、數回検査の結果、五日目でも十五日目でも同様で閉暮直後には同程度の壓力昂騰を示した。即ちこれは君が日々同じ緊張味を以て演じて居る、傍證も云ふべきである。丁度金剛翁が、岩の如く腫れ上つた肝臟を、一斗位の腹水をもちながら、景清を勤めた後、病床へ歸れば氣息奄々、脈は百二十以上に上つたが、舞臺では健康時さかはらぬ堂々たる調子で同様の緊張振を見せて居たのに似て居る。

兩者の對比についてはまだ書くところもあるが今回は是位にして置く。私は鴈君を説くよりも寧ろ謹翁に偏したやうだ。併し翁はもう故人である。君はまだ若い。いつまでも若い君は、將來愈々多く語るべき材料を提供するであらうから、又の機會を待つことにしやう。

## ほんとうの藝術家

大西利夫

◇私の知つてゐる人々の中で、ほんとうの藝術家といへばそれは中村鴈治郎だと思つてゐる。彼の非常識、彼の横暴ぶりは誰もよくいふ事だが、私はさうしてもそれを憎む氣持になれない。彼の非常識といふのは月並な理智の物尺

であてはめる事の出来ない非常識で、まるで子供のような天真爛漫な非常識である。彼の横暴は非難される所以もそこから出るのです、決してそんな憎気のある暴君ではない。彼はよく嘘をつく、謂ゆる八方の出たらめお世辭をいふ。最初は腹が立つだん／＼、そいつを喰つてゐる。今度は獨りで嘔き出して来る。最初のしかめつ面がだん／＼ほざけて来て、いくら眞面目な顔をしやうと思つても耐らなくなつてさう／＼横腹をかゝへて笑ひ出す。いふやうな氣持である。彼はほん／＼にトクな男だと思ふ。然しこれは全く彼の人格の力である。

◇無邪氣といふ三字で彼の人格のすべてが説明出来る。六十幾つになつてあんな子供みたいな無邪氣さをもつた人はほん／＼に少いと思ふ。

◇その人が舞臺に立つて全く別人のやうになる。全く人のいふ通り彼は暴君に等しい行をやる。盛に昂奮する、ドナリつける、肝癪を立てる、親子の見さかひさへつかなくなる。まして他人の見さかひなきつきせうもない、まるで狂人の沙汰である。それ程彼は自分の藝術といふものに全生命を打ち込んでゐるのである。彼の一舉一動には彼の魂が踊つてゐる。私は、彼こそほん／＼の藝術家といふものだらうと思つてゐる。

◇それ程の藝術家だが、そこがまた彼の大きな短所もなつてゐる。彼は無邪氣な、天真に似合はずあまりに工夫す

きである。しなくともいゝ工夫をやつてぶちこはしをやる考へなくともいゝ事を考へて臺なしをやる。あれをやめたらと思ふがその工夫落や考落ちをやらすには氣がすまないのも彼のいゝ所である。彼は藝に生命をうち込んでゐるが、そのために彼の天真にない生眞面目な分別を加へて餘計な苦勞をして餘計なやり損ひをやる。二ついゝ事はないものである。

◇忌憚なくいへば、彼は天才といふやうな役者ではない。彼の藝術は自然の中から出たまゝの金玉の藝ではなく、薄汚い樹木や菊石の石や、泥水や、そんなものを工夫し布置を整理して、自然の景色に仕立てた庭園のやうな藝術である。一見美しいが仔細に見ればあまりに纏り過ぎあまりに整理しすぎてある。これが普通の役者の藝ならば極めていや味な生氣のない型の如き藝として終るべき種類のものであるが、喜ぶべき事には彼の藝術には彼の生命が打ち込まれてあるばかりに型の如く終らず生たものになつてゐる。

◇私が彼の藝術からうける感銘は、彼のその打ち込んだ魂から受けるものである。決して彼の技巧には魅せられないのである。ところで、彼自身はさうは思つてゐないかも知れない。もし私が彼の藝に魅せられたといつたら恐らくそれは彼自身の技巧に感心したと思つてゐるかも知れない。彼はさうした非常識な無邪氣な人のいゝ感

がひをする好々爺である。

◇所詮は彼は下手な役者である。さうして偉大なる藝術家である。

## 『鴈治郎と伊賀越』

鎌谷 來水

◆鴈治郎が慎重なる態度を採り、久し振りで中座に現はれた。今度の呼物は亦『伊賀越』である。鴈治郎が依然として半二或は出雲なごの作品にのみ、去來してゐることは全く氣の毒であるが、あれだけの華やかな外面的天分を持つた俳優に對し、此頃のやうな内的にコツコツ掘下げて行く小規模な心理描寫の脚本では、逆も追つかず色彩に負けて了ふ洵に扱ひにくい役者だ。

◆夫れでは人情大瀾みで詩的な場面を狙ふに、得てして竹本劇なごのおつかふせになり易いから作者も氣が差して二の足を踏む始末で、矢張り竹本劇に終生喰ひ附いて居るより他はあるまい、未だ竹本劇が歌舞伎の中樞である丈けが幸福にしても昔の半二や出雲に生命を托して、今日の作家に眞の知己を見出さないこゝは、此優許りでなく關西の劇壇にしても大なる不幸だ。

◆大體に鴈治郎は役者が大き過ぎて角力にならぬ、近頃の

やうな骨つほしの弱い作者では一寸てこに合ひ兼ねる變に取組んであべこべに振り廻はされてゐる。大きい丈けに厄介だ、誰か鴈治郎をつまみ上げる程の剛の者は居ないのかなア、それには流行の寫實でヒタ押しにする正攻法より低徊趣味の技巧が肝心、イヤ端んだお説教で抹香臭くなつたから方向轉換

◆鴈治郎が仁左衛門と共に『伊賀越』の献立で本膳に沼津二の膳が『岡崎』で御馳走をした後で、この饅頭娘の三の膳が先きの料理に比して旨いかが問題だ。併しこの人の軟らかい世話味を偉丈夫らしい貫録を併用して行くには手頃の芝居で、茶屋場の由良之助で晝行燈に成り難くい程の賢さも、こゝでは餘り邪魔にもなりはしないだらうから全くいゝに違ひない。

◆奉書試合になるに尙安心であるが、此饅頭娘が中心狂言だまするに、本膳一の膳にくらべて喰ひ足りない。總體二段目物はドツシリ來ないからなア、他の脚本を選ばないところ些か苦しい興行策、これも材料不足の故だらうが、見物は多少營養不良になるかも知れない。

## 鴈治郎の情味

服部 嘉香

鴈治郎は味の役者である。幸四郎の力、歌右衛行の品、

松助の鑄、菊五郎の才、羽左衛行の線なきに對して何人にも追隨を許さない獨自の藝風を持つてゐる。

鴈治郎が六十を越した老齡でありながら、舞臺の上では猛烈に若くなることに驚く人が多い。見てゐて實際氣持のいゝものだが、これは鴈治郎を偉大ならしめる要素ではない。俳優は、あらゆる階級のあらゆる老若に粉して、それになりきるのが當然で、うまく出来たといつて隨喜するのは間違つてゐる。また鴈治郎の、小手器用に感心したり、逆にそれを貶したりする人も多いが、これは鴈治郎の藝風の一面であつて、それを以て彼そのもの、價値判斷の唯一もしくは全部的對象とすることは不可である。

鴈治郎は、元祿情調俳優として、現代の唯一人であるの光榮を擔つていゝ。常に工夫をする人、動きを派手にしたがる人であるが、それは自分の持つ情味を見物に感じさせようとする合圖のやうなものである。見物が案外低級な見方をするから、殊に大阪の見物が花見遊山の氣分で飲み食ひをしながらざわ／＼して見物するから、その注意を捉へるために小手器用を見せびらかすのだ。わたくしは解釋する。靜かに舞臺の上に漂はさうとする元祿情調を靜かにじつくり味はつてくれる見物ばかりだつたら彼の持ち味は、もつ／＼落ちついたところから出て來るのではないか。鴈治郎をいら／＼させたのは、大阪の見物が悪いのではないか、それがいつの間にか彼の藝風の一つの

特色になつて、理解ある東京の見物に對しても、そのマンナリズムのまゝに見せてしまふのではないか。

薩摩淨雲が大阪で失敗して江戸に下り、その門から出た櫻井丹波、二代目泉太夫のいはゆる金平物が江戸向に出來上つたのが、初代團十郎の荒事の手本になつたといふ現在でも東京の歌舞伎にはこの氣分が傳へられてゐる。やはり淨雲の門から出た虎屋源太夫の孫弟子、竹本義太夫が近松の世話物によつて一境地を開拓し、道頓堀で大阪向の人形芝居を完成した名残が、傳統的に關西の劇壇を支配して、現代の鴈治郎に於いてそれが新しく發揮されてゐるのは面白い。元祿情調は勿論大阪を中心としての當時の生活から生まれてゐる。大阪に於ける鴈治郎が、元祿情調俳優として唯一人になつたのは、當然のことだらう。

最負意識でなく、かなり厚意を以てか、もしくは寧ろ虚心に、鴈治郎の世話物の舞臺を見てゐるに、かなり元祿時代の生活氣分を出してゐるに、解る。見物してから後に、じつ／＼眼を瞑つて回顧してみるに、彼の小手器用なんかの印象は却つて消えてしまつて、ぼつ／＼した一種の情味に包まれたやうな感じを起す。彼が胴體を振り動かして驚色の羽織をゆさ／＼左右に揺がすのすが、一種の情味として、舌に嘗めてみたいやうな誘惑を感じさせる。

勿論それには相手の福助がいるからだとも言へる。しかし、わたくしは、一般の批評家の盲信するやうに、鴈福

# 鴈治郎の偉い處

富田泰彦

二人の取合せを理想的なものだとは思はない。福助の藝風には百舌鳥の啼き聲のやうな、鋭いものが包まれてゐる元祿女性の特色である。甘い可憐味に乏しい。雀右衛門新升でも駄目。この點では鴈治郎は淋しく思つてゐるのではないか。

たゞ一つ、そして元はかなり大きなことだが、鴈治郎の缺點を見るべきものは、世話物のさの役を演じて、常にそれが鴈治郎であり過ぎることだ。例へば、治兵衛を見ても二百年も前のおさん、小春も鴈治郎が同時に生きてゐるやうに思はれることだ。鴈治郎の治兵衛でなく、鴈治郎の鴈治郎である。治兵衛になり切つてしまつた上になほ突破して鴈治郎そのものになる。舞臺的に個性があり過ぎるのである。

但し、これは、だから鴈治郎が元祿情調俳優として唯一人であるゆゑんだといふことになるのかも知れない。鴈治郎が二百年前の浪花の地に生きてゐたなら、治兵衛や伊左衛門や忠兵衛や徳兵衛を打つて一丸とした、一個の元祿男性として、一つの大きな『生活』を生活してゐたかも知れない。

鴈治郎の盛綱は評判だけ聞いてゐて、見たことはないし中座で幸四郎を向ふに廻しての富樫は見たが、一流俳優だけのことはあると思つただけで、感心したものではなかつた。その方面の鴈治郎については何等語る材料がない。

精を出すといふは、れても覺めても、仕内を工夫し稽古にあくまで、精を出して、扱て舞臺へ出ては、やすらかにすべし、稽古に力一つばい精出したるは、やすらかにしても少しも間はめげぬものなり、稽古工夫には心をつくさず、舞臺にてばかり精を出せば、きたなく、いやしく成つて見ざめをする事うたがひなし。(舞臺百箇條)

或藝者曰く、下手役者の藝を見ても、心あらん人には修行になる也、其故に下手を見てゐるき所をよく覺えて我はせぬ也、(耳塵集)

『不世出の名優中村鴈治郎』に就て語るべきものが餘りに多過ぎる。私はその取捨に惑はざるを得ない。其處で私は最近、鴈治郎氏に就て、感激された言行の二三を録することにした。

『藝人の一世は修業である』とは誰しも云ふ。こゝに抄録した『舞臺百箇條』や『耳塵集』の一項を持ち出すまでもない。大凡藝術家としての不斷の研鑽と精進とがなくしてはさうしやう——だが、それは云ふべくして事實に於て中々容易に行はれ難いものである。



鴈治郎氏は此間井上正夫の舞臺を始めて、角座で見ても嘆いたのみでなく、その巧まざる技巧も、眞摯、熱烈、迫眞の演出態度に牽きつけられたとを、私に卒直に話された『遺に一方の座長と目される人だけに違つた處がおます。』

私は彼のイキに學ぶ處が多うおました』と附け加へられた斯うした言葉は、お世辭でなくては、ちよつと第三者の地位にある私達に、漏らされぬ言葉だと思はれた。他人を嘲罵する云ふとは易いが、他人を激賞する云ふとは難い。大低の場合それはお茶雜に聞えるだけに、ちよつと褒めにくい。これだけに腹では敬服しながらも口へ出すとは誰しも躊躇する。

相手を褒める云ふとは、要するに無條件で屈服したことになる。屈服するとは誰しも潔しませない。それにも拘らず鴈治郎氏は平氣で屈服し、而も虚心坦懐私にそれを表白した。

——が、それは鴈治郎氏としては井上の藝術に頭が下つたのであるから衷心に些の耻づべき處がない筈だつた。

『耳塵集』に曰く、下手役者の藝を見て、心あらん人には修行になる也と、況して井上の演出の、饒舌であるよりも寡黙である舞臺の表現意識に共鳴した處が、遺に不世出の名優たる鴈治郎氏の慧眼こそその寛心大度さが俾げれる。

さうしてそれが、單に口先だけのものではなく、現に今度の中座十一月興行の二番目『壺屋久兵衛』の三年坂の場で

井上に依つて感激せる舞臺意識に、優一流の技巧を加へた交響的な演出を見せて、所謂鴈治郎の藝の一轉期とも目すべき收穫を立派に擧げてゐる。

もう一つは、今度の片岡仁左衛門氏が、松竹脱退を憂慮するよりも、寧ろ松島八千代座出演云ふ點に愛惜の情の禁ぜざるものがあつたとである。

當年歌右衛門問湖で、相敬視し、犬猿等ならぬ仲さへ世間に喧傳されてゐる鴈治郎が、仁左衛門氏の藝術を尊重する意味に於て、隔意なき情誼を示してゐる云ふとである『名将名將を知る』云ふ意氣は、藝術家としても一つの矜持として是非持つてゐなければならぬのである。

鴈治郎氏の今日猶衰えざる聲望のある所以は、蓋し斯うした一端から觀察しても、當然すぎる位に誰彼に判かる筈だ。一四、一〇、三〇)

## 成駒家さん

食満南北

私が成駒さんを描く言ふ事は、非常に容易なやうで容易でない。一體役者衆の舞臺を観る言ふ事は其人の平日を識らないで、心易くもなく全く舞臺より外に會ふた事のない人のを観なければ、觀てゐるうちに家庭の其人

が出て来たり、かつての日の酒席を思ひ出されたり、そんないろ／＼の邪念(よこしま)に舞臺のイルージョンを打消されるやうに思はれてならない。其上に於て私は成駒家さんの舞臺を評する資格がない。私がかういふ題目を置いたのは、舞臺上の成駒家さんよりは、外の方面の成駒家さんのお話をして見たいと思ふたからである。外の方面も言つても成駒家さんは殆ど舞臺の外には、あの努力も、あの藝も看出す事の出来ない人であるだけに、其話が自然舞臺上の事になるかもしれない。

成駒家さんは頗る明るい一面も、又非常に暗い一面をもつてゐる。誰でもさうであらうが、それが舞臺上の成駒家さんと同じやうに、頗るカツキリとした両面なので人をそらさず丸で子供のやうに、無邪氣にキヤツ／＼と笑つてゐる時、誰が来ても言葉一つかけずにそれこそ闇障様にセンブリといふ譬のやうな顔をしてゐる時、この二つが成駒家さんの舞臺の一番目と二番目をよく現はしてゐるのではなからうかと思はれる。非常に舞臺で花やかな人——よしそれが大悲劇を演じてゐても——とそれから非常に舞臺の暗い人——よしそれが喜劇を演じてゐても——との二つがある例をひくき、澤田さんとか河合さんとかはこの花やかな方の人で、喜多村さんとか井上さんとかいふのはこの暗い方の人である。まゝこの暗い方の人の藝風は少數の見物者や通人に喜ばれて、花やかな方の

人は一般に受けられるやうになつてゐる。しかし成駒家さんは表面花やかで、其中に暗さをふくまれてゐるさういふのであるから舞臺上の人としては、全くこれ以上の強味を持つた人は無からうと思ふ。さうも世の中の人は妙に少數黨が皮肉だといふ風に曲解されて、先代津太夫を褒めて大椽の花やかな語口を熱罵する人がある。故園藏に喝仰して、五代目菊五郎に反對する人がある。本結城の澁味を着て、お召の色氣を捨ててゐる人がある。しかし私はお召を着る人が本結城を着なければ通でない。菊五郎を識つて園藏を観る人でなければならぬ。大椽の語口に心酔する人によつて初めて、津太夫の味が解るのであるまいかと思ふ。鮒ずしや鰻ばかり喰つてゐたんぢやアまだ通の通であるやうになるまでにはやはり眼すいや、鰻に舌鼓に打つた事を忘れてはならない。

成駒家さんは全く努力の人である。熱の人である。修養の人である。家庭の成駒家さんがもつてゐる味がカツキリ舞臺に現はれて来る人である。舞臺より外の生命を持つてゐる人である。治兵衛の何處かが成駒家さんの平常である。土屋主税のある一面が家庭の成駒家さんのある一面である。其處に藝術の尊さがあるのでなからうか。個性といふ事をよくやかましく言はれるが、ちよつと見には個性が出てゐないやうにも見える、成駒家さんは極

度に個性を發揮してゐる成駒家さんではなからうか。

私はたゞ『何かなしに』といふ言葉がすきである、つまり無條件で賛成するといふ事が一番藝術的だと思ふ。それは盲目的服従ではない。貝柱が旨いといつていつまでも噛んでゐては全く味も甘味も抜けてしまふやうに……成駒家さんの平常もその舞臺もこの『何かなし』に喝仰

したいと思ふ。

私はテクニクをしらない。文章を描く事が下手である。ために私の言ひたいだけの事を、この一文につくしてゐないかもしれない。しかしもし讀まれる方があつたらば『何かなしに』私の言ひたかつた事をよく受入れて貰ひたいと思ふ。

## 伊賀越

一、伊賀上野の仇討 因州池

田の家中渡邊鞆負が同家中河合又五郎に殺害されたのは寛永九年正月で、その子數馬が姉婚の荒木又右衛門の助太刀で、諸國を仇の跡を尋ね巡り遂に伊賀上野で首尾よく本望を遂げたのは同十一年十一月の事で、此等は『殺報轉輪記』、『水月記』、『武將感狀記』等によつたものである。

二、伊賀越乗掛合羽 この仇

討が初めて歌舞伎に脚色されたのは安永六年正月で、

大阪中の芝居に『伊賀越乗掛合羽』として上演された作者は奈河龜助、がこの時は公儀に對する遠慮から時代を足利にまつた。其の時の役々は中山文七の唐木政右衛門、中山來助の譽田大内記及佐々木丹右衛門、中村歌七の澤井城五郎、淺尾爲十郎の澤井股五郎等だつた。之は大阪ばかりでなく京都でも同時に早雲座で『傾城宿直櫻』として儀右衛

門の政右衛門、七三郎の志津馬で上演されてゐる。

三、伊賀越道中双六 この狂言は當時大好評を博し、そのまゝ操り淨瑠璃として、その年の三月には大阪豊竹座へ上演された、後近松半二がこれによつて『伊賀越道中双六』といふ操り淨瑠璃を書いた。現在よく上演されるのはこの『道中双六』の方である。

四、奉書 試合 柳生但馬守と荒木又右衛門の奉書試合の有名な語草は、既に

西澤一鳳が脚色の腹案を有つて居たが果さず、後勝彦藏がこれを繼いで増補し更に之を黙阿彌が一幕ものに纏めて、明治二十二年十月

『柳生荒木與奉書』とした。之は菊五郎の柳生、左團治の荒木で初演された。

五、日本時伊賀仇討 作者は黙阿彌で、明治十三年三月新富座に、團十郎の政右衛門、菊五郎の又五郎、半四郎のお谷、仲藏の鞆負、宗十郎の譽田等で、上演された。



『越 賀 伊』

門衛右政木唐の郎治鶴村中  
記内大田譽の助福村中



# 鴈治郎に寄す

矢澤孝子

たわらはの頃より耳に親しきは

成駒やてふその名なりけり

うつし身に年は経れどもはしきやし

鴈治郎の名はここ岩にして

奥山のこごしき岩根ふみさくみ

不老の薬を得けむひもかも

いつ見ても錦繪のごき美しき

浪華わざをぎなほおころへず



なりこまや鴈次郎の名は咲けば散る

花樹をよそにさかり久しも

春の日のさくらのごこく浪華のや

道頓堀の王者わざをぎ

口わるの評者のこゑに耳かして

浪華名優老ゆるこみなかれ

しかすがに君しあらずば浪華なる

梨の園生はさびしけむかも

浪華江の芦生の新芽いつもかも

みづくしかれ年は老ゆきも

成駒のたづなゆるめすゆきくて

めぐまれし身の幸なおこしそ



壇 評

## 傳統的美

### 成瀬 無極

繪から抜け出たやうな、傳統的歌舞役者の典型も云ふべきものを求めれば、關西ではどうしてもこの優を擧げなければならぬ。おし出しから如何にも堂々として座頭の貫目を十分に備へ、氣品もあり艶もあり、滋味もある。音聲と抑揚とは『江戸』を標準にするに濁つた粘つた感じを與へるが、『大阪』のリズムと音色に親む、あれがその代表的のものであることが分かる。要するに上方役者としては恐ら

く延若と共に純粹な傳統の最後を飾るものであらう。

栗山大膳型と紙治型と二つとも渾然たる完成品である。道義と忠節を一方に置き、遊蕩と情緒を他方に置いてみるに、互に矛盾するやうであつて實はさうでない。二つともこの優の本質から生れ出たもので、論理的概念が根底になつてゐる。茶屋場の由良之助に於て、それが微妙な交錯と融合を示してゐる。

この兩つの型から脱け出して、新しいものを創造しようとするときこの優は失敗する。自己の世界が論理的にも藝術的にも餘りに固定してゐるからである。その様式は飽迄彫塑的。古典的で、音樂的浪漫的ではない。歌舞伎の持つ傳統的美の一體現としてこの優の藝術を鑑賞するとき、たゞひ深い感激は得られなくても、或程度まで恍惚の境地に入るこゝが出来る。

## 福助の『胸』と『頤』

中井 浩水

◇高砂家の舞臺姿を想ふ時、先づ私の目に浮ぶのは『胸』である、着驕れる西洋婦人の如く、瓜哇のワヤンの如く胸を突出するのが我が福助の癖である、胸に次いで異彩を放つてゐるのはセリフをいふ度に前後へ伸縮する『頤』である

◇大阪俳優の『頤』の大家には實川延若あり、夙に頤を以つて鳴る、然れども唯、頤が長いといふだけ、舞臺では受け頤を見せるのみで福助の如く頤が活躍しない、獨り延若の頤に名を成さしめてゐるのを定めて福助の頤は不平であらうと思はれる。

◇この『胸』と『頤』を活躍させる舞臺の福助の藝を随分久しい年月拜見してゐる、政治郎時代の雲烟漂渺から今日の押しも押されもしない女形、實事兼任、一方の雄なるまで福助の藝道の歩みはすべてソツと忍び足であつた。

◇云ひかへれば地味である、朧ろな石塊がいつの間にもやら透き徹つたあの美しい紅水晶になるまでの行程は永く且つ堅實だが淋しかつた。その永い間主人の身體につき添うて働いたあの『胸』あの『頤』も久しい忠義者である。

◇功成り名遂げて身退くのは昔から老臣の取つた途である。福助も好い加減で『胸』や『頤』の勞をねぎらつて休ませてやれば好いものを近年ます／＼この二忠臣を虐使してゐるやうに見受けられる、忠義者も年を取るゝ氣が短くなるゝ見えて『ヤケだ暴れてやれ』も無暗に活動する、線が硬くなり姿に膩氣ぬりきがうすれて藝が冷たく分別臭くなつて來た。

◇褒めや云へば蘭の花のやうな氣品のあるさうして底力もあり上方役者らしい粘り強い藝を持つてゐる福助は大事の役者である、悪く云へば理智的で感觸が何さなく冷たい、淋びしい情熱に乏しい、まして近年の女形はいよ／＼淋びしく、冷たい、立役をしても類型

的で味がうすれて來た。

◇私は褒貶のさちらにも同感する。浮氣な次第だがさちらの説を承つても、『御尤』も云ひ度い、福助もこの褒を有難く甘受し貶をも御尤もミ拜聽して置く方が好からう、さうして考へるがよい、この人はもミ／＼陰性である、利口過ぎる、だから變に考へ込むミ却つて硬直し胸が飛出し頤が動き出す、だから氣開陽發、ハンナリミ考へ込んで欲しい。

◇まだ老ひ朽ちる年ではなし、昔ならばまだ若手、納るにはまだ／＼早い、大阪の所謂若手は不思議に近頃沈澱の競争をやつてゐるやうだ。右團次、我童なミ皆々然りである。なぜかう遠慮深いのだらう、皆さんこの人達の爲めに何ミか考へてやつて下さい。ミ云つた處が勝手にしろミ叱られるかも知れぬからマア私一人で考へて置くことにしこませう。

◇一説あり、福助の藝に一種の内訌——おどきのやうだが——の兆ありミ診

斷せしむるに到つたのは大阪出來の新作を續けさまに背負込ませた罪ではあるまいか『福助の新演出』ミか何んミかいふ宣傳で諸大家のお手製哲學澤山の呑込み澤山の獨合點澤山の、お道樂澤山の、變妙な新作を與へては工風しろ／＼ミ責め立てる。福助も何だか烟にまかれ氣味で腦髓を絞る、ソレ陰に閉ぢていよ／＼、胸が出る願が出る、左なきだに派手ならず花やかならざる藝風が遂に煮凍らんミするに至つたのだ——成程烏渡面白い一説である(畢)

## 痛快兒中村魁車

——成太郎の往時と私達の文士劇の思ひ出——

### 野村治郎二郎

魁車が中村成太郎ミ呼んだ往時……私が新聞記者ミなつて何年目かの事、その頃は新派劇の勃興時代ミて、何ミなうそれを敵視ミ云ふのは大仰だが、



兎に角もその反動として、舊芝居では一層慎愼踏襲をやかましく云つてゐる矢先に、この成太郎が超然として所謂新劇なる物に手をつけ、驚異の眼を見張らしめたことがある。

◆ 當時大阪の日刊新聞愛讀者……つまり投書家であつて文藝に興味を持つた若い人達が組織した交詢會の集りに、餘興として文士劇が演ぜられて以來、文士芝居なる物が頭を擡げて、其處でも此處でも行はれ、中に最も大掛りであつたのは、烏有に歸した吉野の如意輪堂再建基金募集のために道頓堀の角座で三日間、京阪合同の文士劇といふのが開かれ、文士俳優としては松崎天民、高尾楓蔭、久松一聲、井手蕉雨、小田春宵の諸氏に、今は故人の山田桂華氏や林翠浪氏、それに私も友人である三木木勢、磯部音助、三浦敏男（現在は守田勘彌の門弟阪東彌三郎）の諸君を率ゐて参加し、かしこくも村雲尼公の御臨場があるなき大騒ぎしたところ

がある。

◆ 成太郎の新劇なる物はこれ以前後に起つた、これも角座に於て、故長田秋濤氏が情婦である。彼の有名な紅葉館のお絹を東京から呼び寄せ、秋浪子と名乗らせ同じ座で舞踊を公演する折柄であつたから、最も心血をそそいで書いたのだといふ『戀か情か』と題する翻譯物を初めて上演した、役者がこんな……頗るもつて新しがつた翻譯物を舞臺にかけるといふこと、成太郎がその時分には、めづらしく而も素破らしい洋装の女形に扮するといふことがそれは、大なる呼び物となつたものである。

◆ その對手役に廻つたのが實川延若の延二郎であつて、何でも未だ嘗て見ないといふ大道具の洋館の、玄關先かなんかで、大きな圓柱を背後にして、成太郎と延二郎の兩優がからみ合ふ格好が、よいさか悪いさかわい／＼云つて

新聞の劇評を賑はし、肝腎の新劇その物に對しては、皆目論評されなかつたといふ滑稽もあつた。

◆ そしてこれが爲に、めづらしく而も素らしい洋装をしなかつた延二郎は、さんご評判には上らなかつたが、めづらしく而も素破らしい洋装をした成太郎はやれ劇界の覺醒者だ、やれ舊芝居の革命を叫ぶ勇者だとか、いやもう文士劇の人々なぎからうんご擦ぎあげられて激賞一方ならず大いに將來を嚆望されたものである。あの時代に於て、あの思ひ切つた行り方は確に痛快であつた。

◆ 實は斯く申す私も、すつかり成太郎崇拜者となつて随喜渴仰し、以來同優の出演する芝居へは缺かさずに、然も再三の見物をしたものである、その後の事、大正二年か三年の春に思ふ、當時流行の名前が之にかぶれて成太郎も亦改名を敢てした、その名を中村魁車と

呼ぶ、何でも哲名學から割り出して、魁はさきがけで梅を意味し、車はそれから引いた好適の字割である云ふ。

處でその名を師匠からは貰はずに、自ら選んで附けたのも痛快なら、今日でこそ云ひ馴れて何ともなければ、その時分はさきがけ車は帳場のやうだとして物笑ひになつたのを平氣ですまし新駒家と呼ぶ屋號までも新調に及んだのも亦以て痛快である。

魁車を改めてよりの技藝の進歩は蓋し著しいものであつた、殊に最近に至つては舞臺に熱中の餘り、芝居をやらではやかましく云ふ師匠を差しおいて懸命な車輪な演出に吾を忘れるのもこれまた痛快を謂へやう、そしてあの柔和な氣質、溫和な態度、それでもつてなかくの慷慨悲憤家であつて、時に意氣軒昂たるがあり、對手の誰れ彼れを問はず、皮肉を並べ、不平を囁らすも痛快である。

痛快兒中村魁車、幸ひに自重せよ云ふ。

## 平凡な芝居話

鳥江 鐵也

『芝居を觀に行く御婦人方のお尻、來たらこてもデツカイものだが、われわれの馬鹿話を聴きにゐらつしやる方のお尻は極く小さくて、優しくて、たをやかで……』

ミよくシカ連が寄席の商店でやる、そのわれわれもさきでこてもお尻の小さい、オツミそんな失禮なこは申上げずに、本當におやさしい柳腰でゐらつしやる、御婦人方がお驚きになつても肩の凝らぬお芝居のお噂を致しませう、いや致しやせうミキザニに云換えて。

所は浪華の下まんなか。道頓堀つてえ賑やかな巷を知らない人はどんな田舎へ行つてもない。また外國人も知つてゐる、フランスは巴里のブーランルージュ（洋行をするこちよいここんなこがこひたくなる。但し洋行も書物の上）や日本は大阪の道頓堀、こいつあ世界での芝居街として有數のうちに出るこが出来るでせう。ミトテモ道頓堀を持上げておいて。さてその五つの櫓、オツミ松竹座の映畫の殿堂やらが入つて六つの櫓だ、その六大劇場で掛ける出し物、従つて客を呼ばなきやならないこいふ興行者の苦心、そんなものが毎月の陣立の上にある現はれてゐます。

十一月のお芝居を見るのに。巴里を引合に出すかと思ふミイヤに話が先にの事に變つて來た。大概頭の無いわれわれ、共の話ですから、どんな風に吹き廻して話のネタが變つて行くかも判らない、さて元の話題 十一月のお

芝居を見るのに、中座の鴈治郎大一座は何も云つても常月の白眉、イヤ火仲ぢやねエ、白眉だよ、出し物はツてえこ一番目が『將門の子』ツてえ新作物、

何しろ久しい間此種の一番組の史劇風のものをやらなかつた福助魁軍が、大いに新人振ろうこいふんだから凄まじい、近頃『ラシヤメンの父』『大尉の娘』『女親』『息子』等々よく流行るそんなんぢやアまだ血が濃いツてんで極いになるこ『カインの末裔』だこさ

□

中幕が『饅頭娘』『奉書仕合』で『伊賀越』鴈治郎の唐木政右衛門は『岡崎』で御承知の天下一品、近年になつてから東西通じて『伊賀越』のお芝居が一等よく出てゐる。その狂言の出る度に想ふこはア、ア近松半二が存命ならばさぞかし上演料で藏が建つたらうなアこ。貧乏人はすぐ金のこを考へたがる。二番目は幸田露伴先生の原作を食満南先生が脚色なされた『霊屋久兵衛』霊久は椀久もさきに鴈治郎、福

助の松山太夫、魁車の蝶々の長八、長三郎の彌三郎、延女の妙順、卯三郎の陶器師清兵衛、市歳の青山幸右衛門、巖笑の金森宗和、扇雀の門主こいふこても大變な顔揃ひ青蓮院へおさめる霊久自作の錦上の陶器を親を助ける爲めに狂人の眞似をして木ツ葉みぢんに割る黄金を撒くのが椀久、霊を割るのが霊久、『ドンQ』は鞭を打つさこいつあ活動寫眞の事。

□

切狂言は『明烏』、清元梅吉家内太夫喜久太夫社中の出語り、雀右衛門が久し振りに本役らしい後で浦里をやる福助の時次郎こもく、清元のこの狂言には初役、何はこもあれ久しぶりの大歌舞伎、大入満員、益々好評、これ以上褒めるさおサトが判るから……。

さて成美園こいふ新派のお噂に移りませう、喜多村縁郎を客分に小織桂一郎、福井茂兵衛、木下吉之助、岡本五郎等の古猛者連、それに都築文男、英太郎、野澤美一、武村新、高田亘なん

こ若干のチャキ印をズラリこ並べた一座は角座に出演、チト時代過ぎるが想夫憐こいふ新派大悲劇、小島孤舟先生の新脚色、近頃一向に新作物に腕を振はなくなつた小島先生に、少し勿體ぶらずに腕を振つて下さいよこいふこ先生すかさず『サウフレン!』

□

『取出しましたる……』こも何こも振替なしで三年越しに辨天座に取出されてこもこ『歸朝興行』の天勝、芝居こしては米國土産だこかいふ寸劇を上演してゐる、何でも歸朝談によるこ向ふの劇場には長時間の芝居はないこの事ですツて、精々二分か三分のお芝居が流行つてるんださうで。そんなものゝ流行つてる所へ大いにさわり、か何かドツサリある淨瑠璃物の芝居を持つて行くのもおもしろうがさねエ……。この天勝のあこが五月信子こ高橋義信の近代座が来るさうで、奴さうこやりましたよ、さかうエラさうに云ふ様ですが友達甲斐にさう思つてお

ます、それが高橋の近信に曰く「友鳥江君、近く道頓堀へ行く、頼む、頼む頼む……」といふのが来た、さすがは高橋式の手紙、一體何をそんなに頼んでゐるのか判らない所が先生の身上でせう

先づ彼が来たらウシミ頼まれたこの次第を尋ねて見ませうよ、浪花座は「赤尾の林蔵」新聲劇の立廻り、劍劇の雄こやら。ヤレ中田ツ！山口ッ！

文樂座は問題の「合邦」で人氣湧き返る盛況、前狂言は「太功記」中狂言は「小坂部館」さてその次が「合邦」それに「廓文章」の掛合、先月中座の普及興行

でグツミ大奮發の津太夫、土佐太夫、古靱太夫の三頭目以下の活躍ぶりはめざましいもので。千日前は樂天地、國精劇の立廻り、舞臺のメバリの破れる

◇…衣裳の下繪 (松山太夫)…吉川觀方壽伯筆…◇



ツイ、加減な嘘をつくな花柳は里壽いふのこ近く結婚するんぢやねエか、それに男同志何のケツコンだも異議申立は待給へ、つまり新しく舞臺上の夫婦になつたから斯く云つた迄それに

こゝ日に何回たるや判明せずこいふ大アレ、すごい近代社會の一現象かなこわれ／＼共うたゝチャンバラ劇の隆盛にあきれるの外ありやせんテ。

新人壽三郎、新人花柳の結婚、アイ

木泉三郎先生作)その次は手前味噌作らわれ、先生作小猿七之助御守殿お

加るに大吉橋三郎 狂藏、延藏、福太郎、當之助、藝村秀夫、藤山秋美、常盤操子も並べも並べた花形や腕利き、神戸は松竹劇場で新劇團第一回の旗擧げ、狂言はヒル「坂崎出羽守」(山本有三先生作)「夜の窓」(中井泰老先生作)ヨル「虚無僧」岡本綺堂先生作)「谷底」(鈴木

瀧「深川染」いふ三幕の新世話劇、  
やがて此一座は大阪に来るこのみちヨ  
ツミ口をすべらせておきませう……。

東京には丸山耕君の『日本演藝通信』  
桑野桃華君の『東京演藝通信』が日刊  
である様に、劇壇縦横にや二平凡な話』  
で商店もぎきの阿呆口を月に一度でよ  
ござんすから叩かして下さいよ、ヘイ  
御退くつさま——。

## 長坊ンと中坊ン

自然の恵と蝶  
花の恵の相違

### 新谷 誠水

長坊ンが生れた時ヨ、中坊ンが生れ  
た時、玉屋町の一門は、何れ歡喜にぎ  
よめいたに相違はない、一は林家の長  
子ヨ生れ、一は乙子である、けれども  
知り度いのは、其頃の成駒家のボツボ  
である、未だ天下を取らぬ頃の御曹子

を、既に林家の礎を充分築ぎ上げた後  
の喜びヨ。

私は思ふ、その頃の成駒家には長三  
郎出生に對して、成駒家は蝶花のいつ  
くしみをするに、餘りに劇壇は多事であ  
つたかも知れない、それとも賢明な  
成駒家は子に對する甘さを、未來の名  
優の爲めに忍んだかも知れない、然し

長三郎が、子ヨ生れて、決して虐待を  
受けたのではない、要するに自然の親の  
愛を受け、雨露の恵を受けてゐる、然  
らば藝の修養も自然だ。萬事粗野に出  
來上つて、今を時めく鷹治郎のお曹子  
としての甘さが無い、反するに扇雀は  
その出生が、既に林家の台所が、餘程  
大きくなつてからの、いさゞ恵まれた  
育を受けてゐる、お乳母日傘、いやし  
くも外氣に觸れる事を許されなかつた  
年長じても男女の區別さへ分らぬ程の  
ほんさうの貴族育ちだつた、我が周圍  
に集まる人には、總てをぢ、こ呼んで  
ゐた、乳母の御鹿は、乳の出る爺、ち

爺、呼ぶ程、世間見ずに育つこ同時

に名なり功遂げた成駒家は、この乙子  
に對して、人形的な愛ヨ甘さを随分に  
與へた、されば、何處までも小鷹治郎  
である、善惡兩方鷹治郎の臭ひがのか  
ない、名人鷹治郎二世を扇雀に依つ  
て作り出さうとしてゐる事は争えない  
人も又紙治を喜び、引窓を喜ぶ形があ  
る。

もし長三郎が、藝術家としての素質  
がなかつたら、この人は一生大根で終  
つたかも知れない、現に往年この人に  
は大根の掛聲が喧ましく、扇雀を天才  
呼りをしたは遠い昔でない、然し今日  
の長三郎何處が大根であらふ、何處が  
役者としての天分に缺けてゐるであら  
うか。長三郎は第二の鷹治郎たらすこ  
も、此人獨特の境地を開拓して大成の  
驍は其處に見えてゐる。

扇雀は第二の成駒家なるが故に、常  
に悲哀がある。思ふまゝに進み得ない  
所がある、この點の幸は長三郎が恵ま  
れてゐる様に思ふ。

もし大成駒家没後、松竹が劇界から

葬られたとするに、一番に反感の矢表に立ねばならぬは扇雀である、この惱は扇雀自身も考へつゝある問題であるこの二人の子供を育て、行く鷹治郎其處には又此人のエラサがある、一旦鷹治郎型にはめ込んだ扇雀を、この頃では一本立に放任をしてゐる、そして平民主義である長三郎を、漸く貴族的な生活になづませて、常に手許を離さない事である。さりながら長三郎は飽くまで長三郎式に、其子敏雄も、自分と同じ境遇の育て方に腐心の傾がある、私は長三郎を讚美して止まない。あの細野な骨太い處に、他日何か大きなものが生れる事を期してゐる。

## 鷹治郎雜文

山上貞一

▽中村鷹治郎は六十有餘歳であるに聞く。六十一歳で死んだ僕の親と同じ歳であつたそうだが、その五年祭を今年

行つた。するに鷹治郎は正に六十六歳である譯だ。さうかあの人の歳ばかりは此の十呂盤が桁違ひであつて欲しい▽さういふのは鷹治郎は當代でのやつしの名人である。「紙治」を演じ「忠兵衛」に紛し「伊左衛門」を演つて、實に美しい舞臺姿であつて観客を惱殺する。花道の七三で網笠をそつこぬぐみあの美しい顔が白く浮く。ほのぼの陽炎がもつれるは正にあの瞬間の感じだ。

▽然し鷹治郎をよりよく知つた人達はこの白く塗つたやつし型のあの人よりも、黒田騒動の「大膳」を稱揚し、忠臣藏の「由良之助」を推賞する。その由良之助も七段目よりは四段目の駈つけから明渡しのあの赭顔に黒紋服の由良之助である。この意味で鷹治郎の政右衛門もよし。

▽「紙治」と「由良之助」といづれを探るべきか。いやあの人にはまだ金ピカもの「石切梶原」や「盛綱」や陣屋の「熊谷」がある。概別して此の種に入れ

るべきのに「土屋主税」がある。△しかし、僕は更にあの人の感動した舞臺さして沼津の「重兵衛」を挙げたい。

▽もの腰はあの人性格から来るのだらうが常に軟らかだ。この事は武士よりも町人にして成功する。昔は町人だつたが今は武士さいつたものが適切だそれに引窓の「十次兵衛」がある。又昔は武士だつたが今は町人になつたさいつた場合にも此のものの腰がいかにもなめらかに現はれる。それに背庚申の「半兵衛」がある。

▽斯う數えて見るに決して鷹治郎の藝もその範圍が狭くではない。それなのにあの人のお出し物さういへば、直感的に「またか」思はれるのはさうしたところだらう。饅頭娘の「政右衛門」またかさうも此の「またか」が解らない。

▽處で此の「またか」は大坂では獨り鷹治郎の上のみ冠せられる「またか」ではあるが、東京では随分に多いらしい。羽左衛門の文治店、左團次の修善

寺物語、菊五郎の棒しぼり、歌右衛門の淀君、仁左衛門の柿右衛門、いづれもまたかならざるはない。そこで僕がほつとした。

▽名優だからといつて百、二百の長壽を與えられてゐるものではない。『またか』と言はれる程のものは必ず彼の常り藝に相違ない。此の磨かれた藝術をまたかと思ふ程觀賞し得る機会があることは寧ろ歡ばしい。ミよにもまたかと思ふ程當り藝に更に苦心することとは決して悪いことではない。斯くて歌舞伎劇の精粹は幾人かの名優に依つて練磨されて來た根強さを、また當代の一人が幾度か練磨することは藝術の完成といふ意味から言つていゝことだと思ふ。

▽斯の點からも鴈治郎に新作の演出は望まない方がよい。『藤十郎の戀』はよいが、他の多くの新作に於けるあの人は何ミ姓名こそかわつてゐるが、やがては紙治であり忠兵衛であり伊左衛門になつて夫ふ。

▽勝手の違つた支那服なんか被つて林玉ゴウクワンなんて名乗られるよりも、イ菱の黒紋服で中村鴈治郎ミ名乗つて欲しいやうに、もうそれなれば新作よりも、

あの人が天下に許す一品ものゝ紙治であり梅忠である方が僕はよいと思ふ。

▽然し、鴈治郎に若し新作の演出を望むミすればそれは艶物でなく時代物でありたいと思ふ。二番目ものゝ爲めか今までの新作ものは主に艶物であつたやうだ。それで僕らはぎのやうに演出上鴈治郎が苦心をしてゐても濡れ場となるゝ如上のやうな記憶を蘇がへらしたが、時代物、しかも大時代物の新作にあの人が現はれたなら、きつミ由良之助に見る味や、十次兵衛に見る物腰に變つた意味での成駒屋讚美が出来ることゝ思ふ。

▽いつか鴈治郎が鬼界ヶ島の『俊寛』を演つたところがあるが、いくらあの人が老人になつたからと言つて老け役はしない方がよさそうだ。人間は氣は心でいつまでも澄冽たる意氣でゐて欲しい

若くして老け役の人もある。老人でやつしの名人もある。それは夫々の天分である。

▽終りに希望することは、鴈治郎の芝居が面白くない。それは言ひたいこと仕たいことこの總てを鴈治郎獨りが言つたり仕たりするから、綜合藝術としての劇の價値が随分薄らぐことだ。自分獨りをよく見せたいミする努力は最もだが、自分獨りでは芝居にならない。あの人の如き名優は他のより以下の俳優達にうむミ芝居をさせて、頂門の一針ミでも言ふべき處に、名優の名演出を見せればそれでよいのだ。

## 自愛の雀右衛門 と其の他

西田眞三郎

この間北陽の温習會で『春信幻想曲』ミ云ふ舞踊を見ました。兎角の批評はありましたが、私はその舞踊のボウズ

を非常に美しいものだと思ひました。  
笠森おせんご菊之丞に似た男ご云ふのが床几に凭る姿、落葉の中の立姿、さうした稍長き瞬間の静止した形に限りなく美しい線ご色ご気分ごがありま

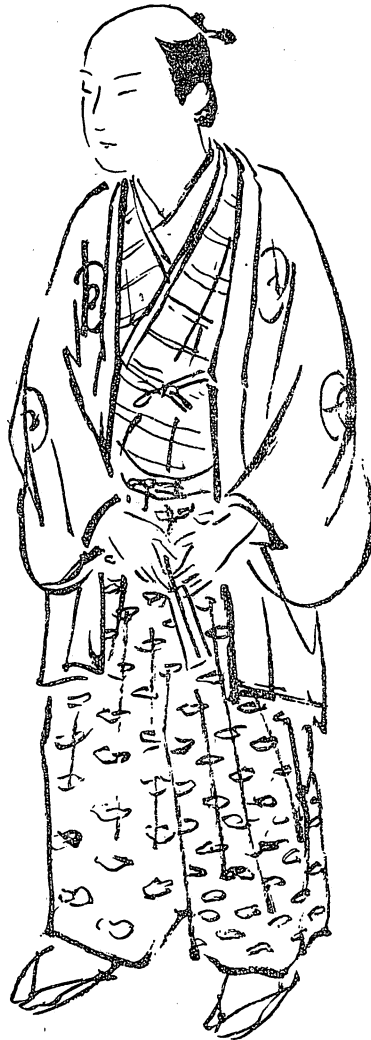
た。舞踊の持つ繪畫美  
ごでも言ふ  
のでせう。

それは歌舞伎劇にも見出し得るものですが、私は文樂の人形に形體美繪畫美をより多く見

ます。私がいつも雀右衛門を想ふ時雀右衛門は一つの繪姿ごなつて浮んで來ます。例へば二十四孝の八重垣姫が勝頼の繪像を拜んでゐる後姿、或ひは「紙治」の小春の浮かぬ顔つき等です。主

す色氣があるご言ふのでしやうか、何ごなしに潤ひのある温い感じを受けま

す。福助にも魁<sup>せう</sup>早にも見出せない特異な情調を雀右門は持つてゐます。人形の振りご、人ごしての美しい動きごが



◇…衣裳の下繪（畫屋久兵衛）吉川觀方畫伯筆…◇

雀右衛門に就いて、私は今更茲にその藝風なごを云々する事は駄足であるご思ひます。完成された藝術品ごして飽く迄も鑑賞して行き度いものです。

◇ 雀右衛門が先年病氣のため起つ事が出來ないご傳えられた時、私は非常に驚きました。もう雀右衛門を舞臺に見ることが出來ないのかご想ふた時私は悲嘆しな

い迄も、得がたい物を失ふたやうに想ひました。同時に雀右衛門がそれほごまでに強く私の胸に烙きつけられてゐたのかご思はずにゐられませんでした當時醇化された雀右衛門の藝に對する思慕を再燃せられた人も少くはなかつ



たらうと思ひます。その後私は京都から歸る汽車の中で、久し振りで京家の健康さうな姿を見ました。秘かに意を強らした譯です。斯くて本年の二月の中座に「栗山大膳」に草香の一役で出る事になつて、全く久し振りにその姿を舞臺に發見するこゝが出来たのですがまだ少し舌の縄れがほゞけてはゐないやうでした。魁車、福助其他の友人達が芝居をしてゐるのを、ぢつと見てゐなければならぬ。つた事を雀右衛門は口惜しさうに語りました。けれご骨の折れない役にでも出ては……ご白井さんから勧められ、高安博士に相談して出来るだけの自重をして出演する程、雀右衛門が自分の健康状態に細心の注意を拂つた事は當然な事ながら感心です。更に旅興行に行くこゝも、宿の御馳走が何より身の毒だと言つて断然あきらめたと言つてましたが、斯うした心持が雀右衛門の藝にも現はれてはゐないかと思ひます。

去る九月の浪花座で「帯屋」の半齋に出てゐた多見藏の姿を見た時、私は實に悲痛な感に打たれました。舞臺の直ぐ裏の部屋への出入にも男衆二人の腕に凭りかゝつても尙且つ倒れやうとする多見藏をも見ました。云つて多見藏の病軀に敢て鞭打つ譯ではありませんが、今までの多見藏の面影はその舞臺からも消え失せて了つておました病軀を押し勤めなければならぬ事情もあつたでしやうが、私はあの半齋が舞臺に在る間「悲痛」「慘酷」言つた言葉が胸に迫つて來ました。その時にも胸に浮んだのは雀右衛門の事でした。切に優の自愛を祈らずにはゐられません。今月中座では「明烏」の浦里其他を聞きました。既に殆んど舊の健康に返つた雀右衛門のものとして且つ初役であるがために大いに期待してゐます。

### 仁左衛門の一件

仁左衛門が歌舞伎座の十一月興行の

演し物の事から松竹を切つて八千代座に出演することになつた事は、近頃の面白い事だと思ひます。事ここに至る迄には種々の事情があつたらうと思像しますが、仁左衛門は「私は六十九になるが今まで演じ物に就いて不足を云つたさて、休んで呉れなご云はれた例がない」を非常に憤慨してゐた「老の一徹」でも言はゞ言へますが、仁左衛門が興行を云ふ立場にも立つて自分の演たい狂言を主張した事は認めてもいゝと思ひます。相互に兩立しない物を持ち合つてゐる者が、利害關係に於て融合するには、互譲を必要とします。勞資間に起る争闘に似たものが仁左衛門の松竹脱退の事情にも含まれてはゐますまいか。演り度い物はあるが無理が通らないために、サツパリと諦めて了つて「ごうせ藝人だから何んでも演つておればよいのです」言つてゐる俳優があります。ところが仁左衛門の氣性としては、さう綺麗サツパリと悟り切れないらしい。「無理を聞い

ても藝を折つて演つてゐる奴がある」  
と言つてゐました。兎に角、今度の事は仁左衛門の言ふ所や傳えられた松竹の態度なきから見れば、仕打則が俳優を餘りに道且扱ひにし過ぎてゐる事が察し得られます。資本家の持てる通弊です。鴈治郎の大歌舞伎なきでも鴈治郎を働かせるために當り狂言の反復がひゞいやうです。また「紙治」かと言つた風なこごがあります。白井氏と成駒家の親密な間柄ですから、仁左對大谷氏とのやうな問題は起りさうな筈はありません。殊に鴈治郎にあつては何の役でもいゝ悪いは別として、何處までも研究もし、工夫もして熱心に努めるのですから、そこに仕打側の不平があらう筈はありませんが、藝術家としての俳優が自己の藝術表現の意志が、壓迫された場合に起る惱み云ふものを白井氏及び大谷氏のやうな地位にある人が理解する必要はあります。斯う言つては悪いが、若し大谷氏なりそれを取巻く幹部の人達が、老松島家の抱

く「惱み」を察するだけの雅量があつたら、假へ一時的の事として、今度の事件は起らなかつたらうと、敢て松島家の肩を持つて置きます。

## 文樂に合邦が復 活上演されるに 當つて

### 京極 利行

鴈治郎號に、わざ／＼合邦の話でもないこは考へますが、十一月の文樂座に久し振で府保安課から許されてこの語り物が出る筈ですから、小生の考へついた儘を書くこごにします。

普通に合邦云はれて居る、『攝州合邦辻』合邦の内の段では、合邦と玉手御前が重要な人物です、玉手御前は繼子俊徳丸に道ならぬ戀をして居ります、尤もこの道ならぬ戀は或る手段の爲になされて居る（それが手段であ

る云ふ事を知つて居るのが本人の玉手一人である爲にこの一場の悲劇が起るのでもありませんが）のです。勿論玉手の兩親である合邦夫婦はこの娘の戀が手段から出た戀である事は知りません。であるが故にこの娘の不義に對して、きりわけ合邦は大きい怒りを抱いで居ります。と同時に玉手の夫である高安通俊たかやすとくに俊徳丸の實父に對しては娘のさうした不義の爲めに湧く大きい心苦しさを義理を感じて居ります。この義理からして合邦は、玉手を見つげ次第其の場で玉手を殺しもかねまいまでの心持を抱いて居る程です。

さて此處で我々が考へねばならぬのはこの一段に於いては玉手の戀、それも母親が繼子に仕向けた不義の戀である云ふ點、即ち不義云ふ事がこの一段を効果強く聴く者に感じさせる原動力として大きい役目を持つて居ることです。

これだけ先づ頭に入れておいて、こ

の淨瑠璃では、合邦の家に偶然にも玉手が逃れて來ます、此處に於いて玉手の戀を一途に不義な戀ミ考へて居る合邦は高安通俊への義理から、たゞ玉手が自分の家の鬪を踏むだけでさへ心苦しく思はずには居られないのです、所が、兎も角も座敷にあらせてから後の玉手の言葉なり、動作なり、その總べては玉手の不義の戀が疑ひもなくこの女の本心からの事であるやうに合邦はじめ一座の人全部に考へさせずにおかぬやうな事ばかりです。

斯くして合邦のこの娘の不義な心を憎む心ミ通俊に對する義理の心苦しさはますます高潮に――進むで行きそのクライマックスに於いてさうく合邦は娘を我手にかけて一突き胸をえぐつてしまひます、この瞬間の合邦の心持を彼自身が後から追想しての言葉『憎みと思ふた張合なりやこそ、切りも突きもなつたもの……』にも了解出来る通りこの際の合邦はたゞ娘憎い

くの心で腹一つばいだつたので、しかもこの憎む心を憎長させたものは不義の戀ミ云ふけがらわしい娘の所行なのです。

父親は合邦に一突きえぐられてから玉手は所謂モドリになつて、改めてこの女の不義の戀が玉手自身の本心なのではなく、四方八方を丸く納めたいばかりにこの女が自分の胸一つの秘めてたくらむだ一種の手段トトリツクであつた事を物語ります。この物語によつて次ぎから次ぎ玉手の本心が合邦始め一般聽衆にも了解されるにつれて合邦の、娘憎いで張りつめた心が漸減的に、憎い心が薄いで娘可愛いの心に移つて行きます。

以上の如くであつてみれば、この合邦の家一段を語る場合には、合邦の漸層的に進むで行く不義の娘憎いの心、（これは前述の如く、玉手を手にかけた際にクライマックスに達します）このクライマックスを境に漸減的に消へて行く娘憎いの心ミ、漸層的に深くなつて來る娘可愛い心、この二様の前半の憎いミ後半の可愛いミ、この二つの心のそれへの推移を細かく、又明瞭に深刻に語れば語る程、この一段の重要人物である合邦その人が、はつきり語り活かされる結果ミなり又従つてこの一段が面白く語り活かされる結果ミもなります、さうして二つの心の内、前者である娘憎いの心を、云ひかへれば娘に對する怒りミ憎みを強く語り活かして、その心持を聽衆に感じさせておけばおく程に、後者である娘可愛い心ミ早く云へば二つの心の變化は反動的に強く活きて來る結果ミなります。

これ程に、この一段を語り活かす爲

に重要な役目にある、この合邦の娘憎いの心持、それを合邦に抱かせる原動力なるものが、即ち玉手の不義な戀繼母が繼子に仕向ける不義な戀、早く云へば不義云ふ心持です。

次に、この一段での、合邦以外のモ一人の重要人物である玉手御前を完全に又興味深く語り活かす爲にも、さうしても前半において、よしそれが手段であるにしても不義の戀を仕向けてその爲に亂れて居ることをハッキリさせておかねばなりません、合邦の場合と同様に此の前半がハッキリして居るだけ後半の物語が衰れに引き立つて見物の同情も呼び、又この玉手云ふ人物が完全に語り活かされる結果もありません、この玉手のほうからしても玉手を語り活かす原動力として重要なのは不義云ふ心持です。

斯くして、合邦玉手が充分に語り活かされたすればこの一段は二人以外の、物に於いて多少の缺點が伴つ

たとしても、満點近く語りこなされたものせねばなりません。

然るに、合邦に於いても玉手に於いてもこの二人をハッキリ語り活かさんが爲の根本の原動力なるのは不義云ふ心持で、それは幾度も書く如く繼母が繼子に仕向けた人道上では許すべからざる戀がもたらす不義なのです、然し、それが人道上さうあらふこともこの一段を語り活かす原動力として重大なものである點では少しの反對すべき餘地もありません。

話は一轉しますが、行政官が社會の保安の爲に最もいふものゝ内に、此記のやうな不義の奨勵もなる、又それに近い効果のある劇や映畫、音楽が加へられては勿論です。この合邦の家一段も、斯うした立場にある行政官から見ても、一見社會風教上許すべからざる語物であり芝居であることされるのは當然であるだけの内容を備へて居ります、その内容の一つが前述の如

き不義の心持であり他の一つは寅の年月日癩病の迷信が取り扱はれて居る點であります、(内容の内の後者に就いては他日に書きたいと考へます) 此處に於いて、

この一段をますゝ完全に語り活かさんすれば、一段の原動力なる不義云ふ心持をハッキリさせねばならずそれをハッキリさせれば行政上の保安問題に觸れる云ふ、大きく云へば藝術家爲政者、この二つの異つた立場に居る人が等しくこの合邦を取扱つた際にその解釋上に大きいギャップが生ずる事になつて居ります。

合邦上演禁止問題が數年前大阪に起つて以來劇界の問題それがなつて居りましたが、その上演禁止の原因の一つとしてはこのギャップも大きい原因であるを考ふべきではないでせうか。

さて、我々が考ふべきは、この合邦の家一段の語物に盛り込まれた不義の心持は、それが最後まで不義の心持

で終らないで、結果に於いては不義の心持は一種の手段であつた事が聴衆に會得出来るやうに一段の構想が運ばれて居る事です。そしてこの事を考へる度に望むだのはこの構想上のトリックである不義の戀をモ少し寛大な眼で見、行政者がこの合邦上演を一日も早く許可して呉れて欲しむの事です。

上演許可の時は終ひに來ました、これ一つ一つの望みは達つしたわけですが、然しこれに續いて起る一つの不安があります、それは行政者の立場としては無理からぬ考慮からして、この一段を興味深いものにすする原動力として大半の位置を占めて居る不義の心持に就いて、點までその効果を弱める手加減が加へられて居りはせぬかとの心配です、その心配を抱くのは昨年か天満八千代座で珍しく上演された合邦が無慘にも改題されて不義云ふ心持が骨抜きにされその爲にこの一段が舞臺効果の薄い芝居になつた目前の事實を經驗

して居るからです。

行政者がこの合邦上演を許した理解ある態度に尙ほ不義の心持に手加減せなかつたまままでの廣い心を加へて今度の許可を與へたであらふ云ふ事を確信しながら、その確信に希望を繋いでこの筆をおきます。

(一四、一〇、一八)

## 鷹治郎のお三輪

大村嘉代子

鷹治郎といへば、すぐ梅忠が紙治とかいふ舞臺姿が目目に浮びさうなものです、私には不思議に鷹治郎のお三輪が目目に浮びます。何年前になりましたか、随分古い時の事で、外國に立つ人を送つて神戸まで行つた時、その家の近くの芝居に行つた事がありました。妹背山の御殿が出て居て、お三輪を鷹治郎がしました。大柄な、昔の女形に見える古典的美しさを、今でも思ひ出します。その時館屋も出て居て、鷹治

郎はいがみの權太をしました、それよりもお三輪の古典的な顔と姿とが、不思議に私の記憶に残つて居ます。

### 懐糸帳

現在の中村鷹治郎は初代で俳名を龜鶴と云ひ、定紋はイ菱本名林玉太郎、萬延元年三月六日大阪新町の青樓扇屋に生れた。父は中村翫雀で、先代實川延若の門に入り明治六年五月大阪道頓堀戎座に實川鷹二郎と名乗つて初舞臺を踏んだ。同十一年三月中村鷹治郎と改名し『西南夢物語』に三役を勤め大好評を博した。舞踊は山村友五郎に學び、主として艶物に獨自の演技を持つ事は今更云ふ迄もないとして、就中「紙治」「伊左衛門」「梅忠」は得意中の得意物で、その他「大膳」「盛綱」「石切梶原」「引窓」「土屋主税」等も定評ある當り藝である。



一 中村鴈治郎の舞台上に就いて、御希望も御寸感？  
 二 あなたが鴈治郎の舞台も見て番御感動になつた役？

到着順

作家 二畑 耕一

一、大近松の心中物を優によつて全部今の芝居好きに見せて置いて貰ひたいと思ひます

優が舞臺の上の大近松研究者の第一者たる芝躰を演劇史に残したいのです。

二、やはり紙治、忠兵衛が眼に残つてゐます。吃又ミ源藏もすきです。

作家 邦枝 完二

一、芝居のために芝居をして貰ひたく、鴈治郎氏自身のた

めにする芝居は避けて貰ひ度

と思ふ。

作家 久保田金徳

一、成駒屋に對する希望は二番目もの。しかも純上方風の二枚目ものが優の柄に適合してゐる以上、その狂言が最もよいと思ひます、時々時代ものなき演ぜらるゝは甚だ面白からず、如何にすれば、優の顔のこしらへ、せりふの調子なき頗る、當てはまらざるものを見出す所謂也。

作家 食満 南北

一、國寶的に二枚目をくりかへして貰ひたい、もうあんな舞臺は見られないと思ふから。

作家 小生 夢坊

一、鴈治郎は如何にも歌舞伎役者らしい役者です。いづれ

の舞臺に於ても氣品を見せてゐるこいふ事。即ち資本主義的氣質があふれ出て貧乏人にはもつたないお方の様な氣がする。所詮鴈治郎はブルジョアの代表的色彩である。

二、歌舞伎の貰目をくすさないところに向面白がある。そこにゆくミ若いだけに扇雀はうつかりした繪の氣が出ない

一、中年者が老け役に新しい境地をひらいては如何？

二、子供の時見た由良之助。

作家 藤田草之助

一、中村 吉藏

二、子

三、

四、

五、

六、

七、

八、

九、

十、

十一、

十二、

一、やはり近松物を飽まで原作に忠實にやるに限る。

二、いつも大きな俳優に思ひますが、たゞ腹が足りない

美術家 黒田重太郎

一、云ふ迄もなくアクトールとしての天分が豊富なからでもありませうが一方後天的な

修練が極致に達して殆ど人巧天巧を喜ぶ云つた様な境地に入つてゐます。これはあのころせきを聞いても、聲そのものにしてはさしてよくない

のみならず、むしろ悪聲云つていゝのが鍛練の果たしかに、美感を感じさせるだけの

力をもつてゐる事でも立證されまゝ、その他の點に就ても

同じ様な事が云へます。但しこの修練なり鍛練なりは「歌舞伎」云ふ一つのせまい意味での傳統藝術の範圍で行は

れてゐると思ひます。それで斯う云ふ意味での素質を有してゐる氏に對しては所謂「新しい試み」は望みたくありません、むしろすてゝおけば追々衰滅に歸して行く歌舞伎劇を能のやうな意味で永久に保存して貰ふ爲に努力して貰ひたいものです。

二、物心がついてから今まで随分鷹治郎氏の芝居は見て來ました。それで一々あげて云ふ事は出来ませんが、こゝ十四五年前までは梅忠や紙治や八郎兵衛なぎ、ぬれ事師役が一番感動させた様です。併し最近では同じ様なものをやつて居られるが年は争はれないもの、少々理智的な冷たさが目立て來たやうです。この頃では實盛や盛綱や、さう云つた役所がいゝやうです。それから形の立派さで見せる「天

下茶屋」の當麻三郎右衛門などは無類だと思ひます。あれは大分前でしたが、いまだに目に残つてゐます。

大阪新日報 田中芳哉園

一、あの人をワキに立たせてあの人が結局中心人物になるやうな作物を見たい。將來はこれがあの人への生命でならう。

二、あの人は一息に演出せうに努力して居るところがゑらゐ。他の優、は息を吐いて居てもあの方は息を吐かない、舞臺の緊張する所以である。

作家 藤井 眞澄

一、近松物を原作によつて新演出されては如何？

二、私が中學生時代、今から二十三年も前の事です。岡

山の朝日座でよく丈の芝居を見ました、當時から私は丈の崇拜者、特に桃井若狭之助が未だに私の頃の中に残つてゐます。

作家 小寺 融吉

一、近松の淨るりを然るべき確かな人に脚色してもらひ、その脚本に忠實に、舞臺監督に縦順に上演されたき事、及び古い時代物、世話物を復活されたき事。

二、鷹治郎を見て感心する次ぎの刹那には嫌味を感ず、こゝに優の長所短所あり。

作家 津村 京村

一、輪廓の大きな美しさ、それが鷹治郎の持つ藝術的價値の一切だと言つていゝだらう私はそれを更に何處までも伸ばしてくれる事を切望するも

のだ新しい脚本を選ぶ場合にもさういふ點に顧慮する事が同優のためには必要ではないかと思ふ。

□

大阪萬朝報 家門櫻籙

一、京阪神での開演毎に、東京側の大立物を一枚は是非とも招いて、顔を合はさせて欲しく、病多見病雀らの在る今日の關西側のみ舞臺は、いさゝか内容の不充實を思はせられる。

二、河庄の治兵衛

□

大阪朝報 八木 柳緑

一、(イ)自信のある役をドン／＼演つて見る事 (ロ)技術の巧い人だと思ひます。

二、河庄の治兵衛、但し冒頭から臺詞に掛るまで。

□

歌人 矢澤 孝子

一、日まはりの花に薫のしほらしさを誰が求め得ませう。

爛熳たる櫻に松の立姿を望むのは無理云ふものです、中村鴈治郎に今更何を要求しませう、大阪人に多年謳歌されて來た鴈治郎は鴈治郎そのもので特色があるのです。私は今更畑に蛤を求むる愚々喋々したくありません。

二、特に取立て、感動された役も見ませんでしたがつやもの、主人公は何時見ても美しいそれだけでよいと思ひます

□

作家 水生 竹紫

一、私は何よりも鴈治郎氏の舞臺の明るさ爽かさを愛します。

ロマンローランの云ひ草ぢやありませんが「明るさ爽かさ」は民衆藝術たる劇に取つて本質的の條件です。

これをしつかり掴んでる鴈治郎氏が、今日までの名聲は決して偶然ではありません。

所が、昨今聞く所によりまして、大阪方面では何んだか

近代劇ぶり(もう實は古くなつてる)の暗さ深酷さ、自然主義時代の遺物たる理詰な嚴肅云々の様なものゝ要求が若い評家たちに出て來たこの事、以ての外に存じます。

懺悔すれば、實の處、私も十二三年前には、從來の

紋切型の芝居にあきたらずして、折から流行つて來た近代劇(イブセン。ストリンドベルと流の)風の演き方に憧憬して、無暗に暗い深酷さ、乃至は要領を得ない人間味なきを主張して見たものでしたが、矢張年を取つて劇藝術の獨個性、乃至劇社會、その他の關係が見えて來るにつけお負

に最近の劇藝術が自然主義的傾向より非自然主義的な様式的な傾向に移るにつけ、尙更その昔の主張が冷汗物となつて來た譯です。

かう云ふ譯ですから、鴈治郎氏なきも折角本質的に握んで居る「明るさ美しさ爽かさ」の藝術を捨てることなく(つまり他の批評なきに迷ふことなく)ごきごきまでもその本領を發揮されん事を希望する次第で御座います。

要するに今更、老大家たる鴈治郎氏に新しい様式の藝術を創造せよなんごゝ無理は申しませんが、今までの藝は非常に結構なものですから、それを捨て、改良?なんかしない様に御勧めするのです。

何だか消極的な意見の様ですが、歌舞伎の既成大家に向つて云ふ事はいつもこれで、



實際から云ふ事が親切でもありまた眞實でもあるに存じます。

二、月並な云草かも知れませんが、矢張り例の紙治でせう。氏の紙治には前に申した「明るさ爽かさ」があつて、それがまた堪らなく嬉しいのです。自然主義一流の解釋では勲彌君の方が人間らしいかも知れませんが、舞臺藝術としての價値はさうしても鴈治郎氏の玉藻を推さねばなりません。

作家 佐竹守一郎  
一、久しく見ないから、近頃このこは分りかねます。  
二、矢張り治兵衛忠兵衛なごが見ひ出されます。

作家 金子 文洋  
一、鴈治郎の舞臺をみのたは

一度きりです。焼けた新富座で「藤十郎の戀」をやつた時です、だから私は何も言ふ資格のない人間です。これはごんな俳優に對しても言ひたいことです、新らしいものに手をかけなければ自身の藝はあがらないし、社會的な人氣もなくなる言ふことで、これ以外のこはしつかりした人のついてゐることで、うから私なご何も言ふこはないでせう。

東京新聞 平山 蘆江  
一、無遠慮にいへば鴈治郎氏の舞臺の一本調子なのが、さうしてあれだけの人氣を呼ぶか不思議に存じ居候。  
二、こはいふものゝ河庄の紙治の花道の出ぎ格子先ごは忘れられぬ味はひを感じ申。

作家 若月 保治  
一、別にありません。  
二、紙治。

美術家 梶原緋佐子  
一、格別それ以上に希望する點にては御座いません、近松劇中の人物としてあれだけのいゝ形を見せてくれる優に感謝する次第で御座います。  
二、やはり紙治、ここに河庄の場の花道のかたちは長く眼に残されて居ります。

作家 大村嘉代子  
一、忠兵衛や紙治なら幾度でも見たいと思ひます。  
二、神戸で見た妹脊山のお三輪ご、船屋のいがみの權太。初めて見たせいかさちらもよいと思ひました。随分前の事で船屋では今の雀右衛門が芝雀の頃でお里をしてゐました

美術家 西澤 留畝  
一、成駒屋の舞臺を澤山に見る機會をもたない私は特に御答へする程の希望もありません、唯自然のもつあの「こなし」の柔らかな味、それだけは忘れようとして忘れられない一つです。

二、私の見た内では藤十郎を面白く見ました、殊に二幕の主演を。

美術家 久保田米齊  
一、毎度感じるこは舞臺の上の熱誠であります、さうかするに關西の俳優はさかく舞臺の上からギョロ／＼棧敷を眺める事がありますが此優は決してそれをしないが嬉しい希望は別にありません、矢張り世話を専門としてほしいの、大阪へ行く機會が少いの

で多く知りません。東京では矢張り専賣物の紙治や忠兵衛でありました。

美術家 小早川秋聲

一、別に大して希望はないが強ひて云へばあの人の色ミ形から藝風を通じて云へばあいの者の質ミ量——特に女性を充分選ばないミ切角のものがまけたり勝すぎたりせないかと思ふ、其れから之は少々無理な注文だがあの耳障りは角のあるシヤガレ聲が艶物なミには特にイヤな気分をそゝる。

二、一番のれミ云ふ役を見出さないが其中で強ひて擧げらなら先づ忠兵衛であらふか、治兵衛でも半七でも又は良雄に大勝——勿論悪い事はないが——。

東京朝日新聞 水谷幻花

一、興行政策の出し物ばかりをさせてゐては行詰る、併し鷹治郎にそんな慮れはないかも知れないが、考ふべきことであらうと思ふ。

二、矢張り紙治ミ云つた様な柔かいもの。

美術家 清水三重三

一、同氏の舞臺を數多く見て居ない事故、かんべんして頂きます。

二、やつぱり治兵衛のやうな役が私は好きです。

作家 川村 花菱

二、河庄の治兵衛。

作家 山崎 紫紅

一、上方狂言の復活、早い話が左團次の南北ものに於ける態度にてまた例を引けば鷹治

郎が「引窓」のやうにも云へる

二、うき出したやうな顔。

作家 坪井 正直

一、舞臺上にもあの人の年齢が見えて來ました。で、もう三枚目を止めなければなりません、そして千變一律の心中物も捨てる時です、これからは中年以後老役まで手を出してあの人でなければならぬものを見せる事です、その立派なものを兒せるためには、

例の癖、例の好みを全然放棄しなければ駄目です。

二、感動ミ云つてありませんが、良いミ思つたのでは、あの場の栗山大膳、大石内藏助二番目では番頭等です。そして良いミ思つた時は何日もの癖嗜好みを忘れてゐる時でした。

作家 田島 淳

一、しばらく見ませんから彼は云えませんが、學者側によい相談相手を見つけて近松をもつて研究して、其演出を見せてくれることを希望します、勿論東京にも其上演を切望します。

二、近松ものは東京の役者には折合えないだけに鷹治郎の近松劇はそれを見ても動かされません。

十日會幹事 中馬 貞一

私は藝術には至つて縁遠き無釋者にて、御たづねの件につき御答へ致すだけの資格無之候へ共折ふしの觀劇には、さすが當今の名優といつても感服致し居り候、右の次第にてまことに要領を得ざる御返事何卒あしからず。

醫學博士 高安 六郎

一、◇いつもの偽善的な理窟  
ヌキに心の眞底を其まゝさら  
け出す様な役柄を選ぶ事。◇  
あの洗練された技巧を今一層  
内へすれば愈々其光は大きく  
なることゝ思ひます。

二、近頃では伊賀越の重兵衛

作家 仲木 貞一

一、寫實から象徴に入つて欲  
しいこと。一度見て面白く、  
二度見て技巧のみが目につき  
三度見て厭になるのはその爲  
めなり常識的に申せばデテ  
ィルスを省略する事。

二、紙治（技巧的に出来てゐ  
る心中物故、優の技巧澤山の  
演出が然う邪魔にならぬ故）

作家 高安 月効

一、持前の情味を愈々深く、  
寫實的でなく直覺的に、外形

より内部から溢れ出す様望ま  
しい。

二、矢張紙治、しかし今後は  
もつゝ複雑な心の悩みを表は  
す役。

美術家 大國 貞藏

一、此人の役どころは、武張  
つたものと和事の二に大別出  
来る。名人中村宗十郎と先代  
延若の感化を多分に享けて成  
人したと聞くが、一に氏の天  
分と研究心が今日をなしたと  
云へる。實際氏の舞臺より感  
ずる事はあの年齢に於いて猶  
細心に研究せんとする純な情  
熱に充ちて居る事である。

今日迄に氏を大きくせしめ  
た事はそのをしだしがよいこ  
か柄の整つた立派さ云ふ外  
的條件以外に氏の私世話の雰  
圍氣と氏の性格を想ひ綜合す  
るに意志の人ではなく情の人

であつて、それが舞臺上にも  
私事に於いて詩的光彩を放つ  
要素になつてゐるのではある  
まいか。又武張つた方面に於  
いても細かく働く感情の表現  
は時代味を帯びた人間味であ  
つて、淨瑠璃の持味を生かし  
てゐる事である。

感情を基調に於いて舞臺及び  
私の生活經驗より寧ろ本能的  
にぶつかつて行つてゐる時こ  
そ氏の生命が躍動を見る時こ  
思ふ。

めくらの額十郎（實川）先代  
尾上多見藏、又は中村宗十郎  
先代嵐璃寛、先代實川延若或  
は氏と對比して興味を持たれ  
たこと云ふ菊二郎の實川延三郎  
その他名優の相競ひし昔は知  
らざるも、先代橘三郎、齊入  
梅玉等の逝き先代霞仙の夭折  
仁左衛門の東都へ去つた後、  
浪花劇壇に純歌舞伎味に重心  
となつて活動する氏と華やか  
なりし道頓堀の昔を想ふ時、  
最後に残つた錦繪情趣の人で  
あらうを思ひ氏の健在を祝福  
する。

二、過去の印象をたぎるので  
忘れてゐるものもあるが今頭に  
浮かんだ當り藝は新作もので

「土屋主税」の土屋主税。「藤十郎の戀」の坂田藤十郎。古くのでは「つばれの錦」の春藤治郎右衛門。「寺子屋」の武部源藏。「先陣館」の盛綱。沼津の重兵衛。「岡崎」の政右衛門。今度の中座の（まんじゆ娘）の政右衛門。（前帝劇で見た）なぎで「太十」の重治郎も若い頃には本役と思ふ。和事では「戀飛脚」の忠兵衛。「夕霧伊左衛門」の伊左衛門。「紙治」の治兵衛なぎで「對面の會我」の十郎。「忠臣藏」の由良之助なぎも佳作である。

美術家 花岡 百樹

一、丈の、もしゆつたりとした藝を見せて貰ひたいと思ひます。  
二、丈の和事はむしろ當然過ぎて左程に感じませんでした  
が、往生院の瀧に時頼と「伊

達鏡伊勢物語」の紀有常で文字摺小よしと物語をするアノ氣の變り目でした。

作家 伊藤 松雄

中村鷹治郎さんは幼い頃に見た記憶しかもつてゐませんので、さうも感動されたこと云つた風なお役にはぶつかつてゐません。従つて希望も寸感も申上かれます、あしからず思召下さい。

能樂家 大江 竹雪

一、忠臣藏城渡の場、由良之助。  
二、土屋主税。

俳人 島道 素石

一、鷹氏は性に因てゝもあらふが、總てに派手に立振な質です、今少し動かぬ方がよいと思ます、そして新らしいも

のよりは手に入つた役を工夫して見せた方がよいと思ます鷹氏を以て此種の芝居は終りだらふと感じます。

二、大石内藏之助を擧げます技巧は兎に角是に扮するもの、他に乏しきを痛感する次第です。

東京報知新聞 本山秋舟

一、希望は今更いつても仕方がないか知れませんが、本統の意味の近松研究でもできないでせうか、感じは何といつても當代の坂田藤十郎でせう今後ちよいと出ますまう。

二、「河庄」の治兵衛が最後の別れに、小春の脇をつかんだ時の目、うらみさ、悲みさ、なつかしさ、未練さのこもつた——。

東京日々新聞 高澤初風

一、鷹治郎氏が稀に上京して我々に見せてくれたものは矢張り同氏の得意とする上方情調の細かな世話狂言で、是が

又東京俳優には求められない柔かな味ひであります、併し其時代物に於ける「盛綱」の如きは今度の羽衣や會ての吉右衛門なぎのを見た時にも、

あの「聞き分けてたべ」や其他の隨所に鷹治郎氏の妙味を追想せずにはゐられませんでした元來同氏の時代物は一口に申すに外形美に捉はれ過ぎるやうに思はれますが、突轉しの妙味に至つては近代俳優中殆ど其比を見ない人であらうと思ひます、此意味に於て未だ同氏の若々しさ艶さの失はれない今日上方狂言のうちその他に求められない新狂言をやつて欲しいと思ひます。

二、東京で上場されたもので

は紙治や、梅忠や、藤十郎や

政右衛門や、大晏寺堤や、椀

久や、盛綱や、菅相丞や、伊

左衛門や、其他數種あります

がそれ等のうちで私共の一番

印象を残してゐますのは、矢

張り此紙治や、梅忠や、藤十

郎や、盛綱などであります。

さうして此人の感心さゝれる

事は二度目の上演には注意し

て見るこ或箇所を替へる

こか、趣きを替へるこか兎も

角も必ず多少なりこも新工夫

を見せるこ云ふ研究的態度を

持つてゐる事です。

作家 佐藤 紅緑

一、三百年間「上方」が洗練し

た至純な藝風を私達に見せて

くれる事は此人だけだ。江戸

にはない役者、無論今日東京

で流行やる新らしがりの食パン

役者こ比べて論するまでも

ない。

二、紙治。

川柳家 麻生 路郎

一、門外漢の小生にこりては

舞臺上に就ての希望更に無之

候、完成藝術品こいふ感を深

うするのみに候、小生が若し

鷹治郎なりせば、そして事情

がゆるすならば、従來の立場

を去つて端役に生きて見るべ

く候へども、そは實際問題こ

しては容れらるべきものに非

らずこ存候。

二、あかねや半七の如き町人

遊蕩兒の表現は、この人獨自

のものこして感嘆の外これな

く候。

美術家 村上 華岳

同優の舞臺につき數多く見

てをらす茲にかく資格があり

ませぬので——。

東京二六新聞 江澤春霞

一、藝の誇張的なのを難じる

人がありますが一向差ない事

です。優の顔の立派なのが既

に誇張的な藝術的生命のあらし

める舞臺なら何でも結構です

唯優は舞臺でうしろ向きにな

るこいやな氣がします。力め

て此のいやな感じをさせて下

さらないやうに望みます。

二、九つ位の子供の時に、丁

度優が初めて東上して、歌舞

伎座こ新富座を駈持をした

時の、新富座の大切「成綱陣

屋」の盛綱、近年では「藤十

郎の戀」の廣間に坐つてゐる

時の藤十郎。

寄稿家 山本 柳葉

一、繪に見るやうな役者がな

くなつて來ました、鷹治郎は

其なくなつて行く錦繪に見る

やうな役者の第一人者です。

あの顔から、あの舞臺から得

る感銘は是からの役者には多

く求められない尊いものです

其尊さを生かすやう自分を守

つて行つて下さい、夫れで好

いこ思ひます。

二、河庄の治兵衛です。

みどり會代表林 千代子

一、此度の私の希望は世界的

の名優で御座います故、やは

り今迄のやうに「心中もの」よ

りも藝術的の力を見せる役を

あそばした方がそんなに床し

いかこ存じます、艶なるせり

ふでは誠に「おしいこ存じ

ます、もつここ「古代な武士

道的の役をして今迄以上いよ

く「世界的第一の藝術を見せ

て頂き度こ存じます。

二、お尋ねの儀今迄に感じた

役はまあ「忠臣蔵の由良之助」か三存じます、是は此優で無くては外に出来る人は無いかと思ひます、おそく日本一と思ひます、何ミなれば他の優では役は出来ても實目は無くて只お人形式に活動して居ります、鴈治郎は由良之助其人が實物にあらわれて眞の忠臣蔵の態度は自然に出或一種の感にうたれます、世界的の名優です。

□

#### 四方田欽一

一、ごんな役をやらせても自然に引きつけられて行く鴈治郎の巧さ、おしもおされぬ大阪芝居の大統領——怒りも出る嬉びも出る。人情も出る唯望むは役者本位の芝居から離れて、熱き藝に満ちた演劇の開拓、私は鴈治郎の研究的努力を疑がはない。

二、多い中にも近江源氏首實験の盛綱、おちつき拂つた當世一代の篋り役。

□

#### 美術家 正宗得三郎

一、私は鴈治郎の藝はすぎですがまだ充分味ふ程見ておません、従つて御尋ねに對してこれ丈しか書けません。

□

#### 大阪都 聞 富田 泰彦

一、兎角マンネリズムに陥りがちな、新作劇なごに憂き身をやつすよりも、矢張洗練された、型物を見せて欲しい。中絶された古劇の復興なごも

鴈治郎氏ほごの立派な容姿ミ卓越せる技巧ミを持つ人の當然負はねばならぬ義務であり否天職ミ心得て頂き度い。  
二、如何なる役でも、抛げるミ云ふごこの絶對にない、その舞臺の眞摯な態度ミ、持役

に對する忠實さには感心させられます。もう一つは上演の都度何か新しい工夫を見せねば氣が濟まぬミ云つた風のものです。

一、あなたは文樂座から

何を得られましたか？

二、如何にして今後の

文樂座を保存すべきでせうか？

#### 歌舞伎 中村雀右衛門

一、魂の無い人形が、淨瑠璃ミ調和した立派な藝術の力でむしろ人間でも現はし得ない妙味を見せて居るのを感じる度に少しでもその長所をさり入れて演じて見様ミ思つて居ます。

二、生意氣な様ですが、願はくば今後も出来るかぎり古典的に新らしい空氣を入れたいで保存されたいと思ひます。

□

#### 喜劇 曾我廼家五九郎

一、今日の生活ミはかけ離れてゐるが、古き繪草紙を見せられた感じですが、うつみりした氣分になれます。

二、古きものを愛護する氣持

作家 林 和

ちは日本人の趣味にしても悪い事でありませぬ、新らしがらばかりが能でありませぬ。私は文樂座を經營する松竹會社に敬意を表するものです。「文樂座のために株を募つて見るのも面白いと思つてゐます政府が唯一つの傳統藝術のために保護の金を出してもいいと思ひます。

新派 松本要次郎

一、藝術的參考になつた事多  
くあります。  
二、營利的でなく藝術的に願  
ひ度く思ひます。

喜劇 曾我廼家蝶六

一、見物する毎に私共は得る  
處充分でありますして眞に結構  
と思ひます、我國古代からの  
藝術としては何處までも保存  
して欲しいと思ひます。

二、いさゝか愚見を申上ます

此頃の文樂は昔にくらべて餘  
り小さくなつたかと思はれま  
す、それは狂言としては昔の  
様な、五天竺とか玉藻前とか  
言ふ様な太夫さんも人形遣も  
活躍する、ケバ／＼しい狂言  
が少くない事、次に門閥もござ  
りますが、もつゝ若手を用ひ  
る事、観客としてはもつゝ一  
般の人を呼んではいかゞと思  
ひます、今までは上流の人ば  
かりで其の他の人で文樂を知  
らない人もあります、要する  
に入場料が高過ぎるので思  
ひます。一般公衆の爲めの文  
樂座にして欲しいものです。

新派 梅島 昇

一、來て居る客が古雅な、純  
日本的な藝術に酔はされて居  
るのを見てほんまうに日本人  
の行く劇場だなき思ひました

こんな新智識の方でもやつぱ

り泣いて笑つていらつしやい  
ます、吾々の演る新派だつて  
あれを替へて行くより道はな  
いと思ひました。

二、文樂を愛好する人達は人  
形淨瑠璃を愛好するんです  
から、あくまで新らしがるこ  
か新しい事を避けて（勿論樂  
屋の組織も演し物にも）古典  
的な現在の味を失はせたくは  
ないで存じます、文樂に新ら  
しい風が吹き荒んだらお仕舞  
です。

歌舞伎 中村 芝鶴

一、物體の成す型は思はぬ  
型と人間の及ばぬ型を。

二、松 合名社によつて！

美術家 村上 華岳

一、私は文樂藝術が大變好き  
です。神秘的であり、象徴的

でもある立派なものです。

二この藝術を向後どうすれば  
いかいふことは一口でいへ  
ませぬがやり方によつて、非  
常に有望です一面に大ひに技  
術者作者、を新教育するがよ  
ろしい舊いものゝ外に新しい  
ものを加へなさい。回答まで

新聲劇 中田 正造

一、ナチュラリズム、ソシア  
リズム、描寫主義——それが  
藝術だと思ふ人々に見せてや  
るべし、そんなものでなくて  
文樂座には嚴然たる藝術のあ  
る事に驚ろくでせう。

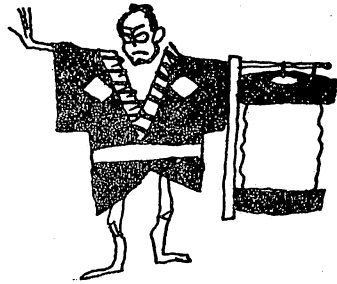
二、營利といふ事を土臺に、  
存在はむつかしいでせう。大  
松竹ですもの一つ位は營利を  
度外視して永遠の日本の藝術  
の爲めに財團法人でも造つて  
保存したらいいでせう。

（前號未載の分）



◇……郎治鴈村中……衛兵久屋壺……◇





稽古見たまゝ

# 壺屋久兵衛

中座十一月狂言

【一】

中座の三階にても素敵な大根の軸がかゝつてゐる。三階の稻荷町にも中々意氣な男がゐるさ兒ゐる。

正面から右のはしに春慶塗の机をひかへて御大鴈治郎さんが賞太郎さんの書いたそれは／＼はつきりした臺本を書抜き、この前の時の書抜き、甘いお菓子ミを處せまく並べ立て、それでも眼鏡だけはかけてゐる。左側には中村福助さんは真四角に坐つてゐる。其前は大してひきちらかしてはゐない。次に中村魁車さんが折から西陽の當る窓を氣にしながらひかへてゐる。其次には大處の旦那のやうな市川市藏さんが

これも亦少しは茶の心得が御座ります云ふ風に巖然とひかへて御座る。次に壺屋久兵衛の幕には出ぬ吉三郎さんの席が明いてゐる。其次に尾上卯三郎さんがやはり眼鏡をかけてこまかく假名のふつた書抜きをひろげてゐる。一つ置いて市川菟女さんがこれも女形らしくない大きな眼鏡をかけて書抜きを手にしてゐる。作者の賞太郎さんは丁度吉三郎の空席に向ひあはせてひかへてゐる。其上に脚色者の鶴南北さんが何ミ思ふてか紺の前かけで横尻をしてゐる。其處からは例の素脚のぞいてゐる。この上には松竹の御大白井松次郎氏がフロツクコートで四角に窮屈さうに坐つて御座る。本台の下にははやしのかしら、其下に長三郎さん、新升さん、權三郎さん

ん、成太郎さん眞ん中に詔の川島萬次郎さん、うしろには狂言方の桂二さんや、成助さんや、箱登羅さんや齋五郎さんやいろ／＼の顔が見ゆる。

「ハイ幕が明きます」

賞太郎さんが一言かける。これで幸田露伴先生原作、鶴屋南北氏脚色『壺屋久兵衛』の幕は明くのである。

「杜子美山谷李太白にも酒をのむなご詩の候か」

「唄がありました助左衛門成太郎さん、庄左衛門權三郎さん板附です」

「ハイ」

二人は書抜きをひろげる。

「エ、トコレ助左」

ミロの中でよみはじめ。何でも二人は仁清の弟子であるさうして師匠清兵衛ミ壺屋久兵衛二人が唐津の錦手に似たものを焼かうミ苦心してゐるが、それが中々旨く行かない。しかも元結がはぢけたきて金一つくれぬではなしミ愚痴をこぼしてゐる。

「ハイ小村屋さんお出です」

「ハイ〜」

大人嵐巖笑君は書抜きを遠い處へ放してよみかけるミ傍

から成駒家が

「小村家若がらすミ眼鏡をかけたらさうや」

ミ揶揄一番ワツミ皆が笑ふ。

「これでも一應若い氣だすせ」

ミそろ／＼ミ小村家はよみはじめ。

「エ、ミ京の名物の時雨もあがつたミ見ゆるな」

舞臺へ來ますミ本臺がいふ

「ハイ〜」

これは又清兵衛に早く赤繪が出來上がるやうに青蓮門院の

意を傳へに來たのである。

やがて小村家の金森宗和こいふ役が歸りかける、おはやし

は唄にかゝる

「ハイお出です」

成駒家はちよつミ居住居をなほして

「チア小村家のんわたしが出るまでちよつミ陰の方へよつて

貰ひますさ。花道へかゝつたら來さくはなれ」

「ハイ〜」

魁車さんが向ふの方から

「お大盡／＼三年阪清兵衛様のお宅で御座りますぜ」

ミ聲をかける。

『オットよし〜』

成駒屋さんははじめて臺詞らしい事をいふ  
唄になる。

『ひよろ〜ミするさかひ、岩本——魁車さんの名——お前  
がオットおあむないこいふてや』

『ハイ。オットおあむない』

成笑さんが何かいふ、市藏さんが何かいふ、成三郎さんも  
何かいふ一切小さい聲で聞えない。

『再び迎ひに参るべし』

成駒屋さんの久兵衛がいふので魁車さんの長八も、成笑  
さん達の花車も口に手を當て、舞臺でするやうな格好をして  
向ふへ行つてしまふ。

魁車さんはまだ其の後にゐて男衆がもつて來た東吳のまむ  
しを向ふむいてたべはじめ

『成太郎お前のせりふやがな』

成太郎も權三郎の弟子はびつくりして臺詞にかゝる。成駒  
屋さんは中々八方に眼をくばつていそがしい。

權三郎さん、成太郎さんは久兵衛から小判を貰つて外へ行  
くらしい。

久兵衛は仕事場の方へ來ます。

『オイ清兵衛』

こいふて卯三郎さんの方へ

『ボンミ肩をたくきますさかいそれで氣のつ、やうにしにく  
なはれ』

『ハイよろしおます』

ミ眼鏡ごしに書抜きを見て

『オツ久兵衛殿また島原で御座りますか、そらもう錦手が思  
ふやうに焼ぬによつてクワツミ胸のひらく酒飲まうと夜毎の  
島原通ひ無理ミは思ひませぬ……』

長い事いふ

『清兵衛何をいふぞ……』

二人は丸で口のうちに何かいふ、

『成太郎さん出です』

ミ呼ばれて成太郎さんはアタフタミ其處へ坐る

『もし若旦那ミ佐渡屋でのもんでゐましたらお袋様が弟後の  
彌二郎様ミ御一緒に今此處へお出で、御座ります』

『オツそれでは此處にお出でなされては悪い』

ミ清兵衛の注意に久兵衛は上手の仕事場へ行く。

姪女さんが書抜きをひろげる母の妙願の役である、長三郎  
さんが風呂敷をひろげる弟彌二郎の役である

「清兵衛様お内で御座りますか」

長三郎さんは聲をかける

「オツこれは、河原町の若旦那ようこそお出でなされまし

た」

卯三郎さんが例の眼

鏡ごしていふ

「母様清兵衛様はおう

ちでござります」

「この時賞太郎さん

は

「助左衛門は茶をもつ

て来て自分の飲んでお

た酒道具をびつくりし

て上手の障子家臺の中

へ入れて下さい久兵衛

が之れで酒をのむのだ

ツさか」

「ご注意する

「へい解りました」

「三萬年筆で自分の書抜きへ其棒書を書入れる。

「ナア新やん」

成駒家さんは囃子のかしらを呼ぶ

「へい」



□…(助福村中)……夫太山松の「衛兵久屋壺」…□

新三郎さんは向ふの

方で返辭をする

「時雨の音な、團扇に

せんこ小豆をポツ／＼

こ落してんか、ごうも

團扇やご時雨より夕立

のやうやさかいな」

「細かい注意をする

「へいよろしおます」

芝居はすゝむ。

妙順の姪女さん三長

三郎さんの彌二郎ごは

清兵衛から久兵衛は此

處にゐない云はれて

くれんも久兵衛の身の上をたので歸りかけるのである。

「母様久兵衛はさつきから此處に居ります」

成駒家さんは聲をかけて

「ハツ」

蓮女さんは丸で舞臺のやうに女になり切つてびつくりする  
「何ぢや母様も弟もよう店の鼻でツベコベミしやべられた  
事ぢや、廊で聞くぬめり節のゆつくりした節まはしミ違ふて  
ゴツ／＼いおいて下さりませ」

「ゴツ／＼いふて悪くば言ひますまい」

蓮女さんは成駒家さんの顔を見ながら順々にいふ。芝居は  
大分面白くなつて行く。

久兵衛は壺屋の跡取として先久兵衛の妾であつた妙順と共に  
子のない壺屋へ這入つたが、其時本妻のお道に俗氣兒が出  
來たそれが弟の彌二郎である。さうした込入つた事情から  
久兵衛は母から無理に勘當を受けて、自分の理想である赤繪の  
皿を焼く爲に腐心しやうさいふ大芝居なのである。久兵衛は  
心にもなく涙を吞んで母を罵る。母は又

「さうか、妾が悪くばあやまります」

ミ子に對しての慈愛に中々腹を立てない。

タマブツ／＼ミ子のうちによみ合せてゐるのだが其處にち  
やんこ成駒屋さんの久兵衛ミ蓮女さんの母親ミ長三郎さんの  
弟、さうして其中にハラ／＼する清兵衛の姿が眼に見わた  
來。

「エ、モおいて下さりませ」

成駒家さん御腹でしまふらしい、

「ナア高島家」

「ハイ」

「其處で次の臺詞を言ふてんか」

「ハイ」蓮女さんは書抜きを探がす。

「これですな、解りました、エ、今迄やかましようしやべつ  
てゐたがもうちやん寝たミ見ゆる、エ、モ妾は心を定めま  
した久兵衛は勘當します」

清兵衛も彌二郎もびつくりした。妙順はかまはず、

一親を親ミ思はぬからは妾も子ミは思ひませぬ、清兵衛様

いかいいな事はかりお聞かせ申しました」

「ナア長三郎」

「シツ」

「其處で入かはつてお母さんが平舞臺へ下りたら傘を渡すの  
や」

「傘をもつて出ますか」

「一本だけでもつて出ていな」

「ハイ」

桂二さんは

「傘が入りますか」

「ミ、うしろの向になつて吉川観方備伯と相談する、備伯は

「宗和が黒い傘さすさかい、彌二郎の方は黄色のにませう

「そんならもう一本傘をいな

「はいよろしおます」

「小裂屋は帳面につける。

二人は歸つて行く。

「蓮女はんは次の幕に用事がないのでサツサミ自分の部屋へ

行く、長三郎さんは權三郎さんの袴姿に成太郎さんの上下對

の着附を被て並んでゐるのを見て、

「輕口屋見たいなあア」

「ミ洒落れる、其處にゐた一同はドツツ笑ふ。

舞臺の方は清兵衛が

「親御に勘當受けさつしやつてはあなた不孝になりませう

が」

「成駒家の久兵衛に突込む、久兵衛は

「こなたの眼にも不孝に見ゆるか」

「何をかくさうこの久兵衛は壺屋にミつてはかけの身、弟

彌二郎に家をつがさねば先久兵衛殿に義理が立たぬ」

初めて本心を語る

「ナア音羽屋、こゝで入れかはるわ、ツカくミ花道の方へ

行つて揚幕を拜むさかいあんた上手の方からさがしてぬぬ

でわたしの傍へ来てんか顔見合してチョンヤ」

「あの時雨の音はさあツミきますか？」

新三郎さんが聲をかける

「やつて」

狂言方の成助さんがチョンミ木を入れる、チリ、ハ、ンミ

聞こえてくる

詠歌ははやしの一同によつて唄はれる。

「また」

「三賞太郎さんが大きな聲でいふ。さばたん、ミひきしきり

騒がしくなる。

これで序幕は済む。

【二】

「大夫さん」

「ミ呼ぶ次の幕に出る友太郎さんミ榮大夫が来て坐る。

扇さんや、鷹之助さんや、冠之助さんが来る、箱登羅さん

が前へ出る、もうさつきからまむしを喰ふてしまふた魁車さ

んがまつてゐる。おはやはキツカケをまつてゐる。

『ハイ開けます』

『われふりすてし一聲ばかり……』

鷹之助さん冠之助さんは何かいふて向ふへ行つてしまふ

『ハイ長八の出です』

『さうか、あの唄をのこしいてんか』

『ハイ』と又

『いづくへ行くぞエ、山ほこゝぎす』

と唄ふ

『のれん口から出てくるのやなよしく』

と魁車さんは書抜きを見て

『ハイ、イヤモウツン承

知、承知の半兵衛、承知名山

秋の月へイグツト呑み込み吞

み込み眼の八平が』

『扇さん』

と聲をかけられて、扇さん

は前へ出る

『コレ長八さん河内のお大盡

と又東山へおはこびぢやなサ

ア、今家をあけてあげるぞ

へ』

『イヤまつてくれ、年中歸らぬのうちは蜘蛛の巣のはりほ

うだい……』

扇さん何かいふ魁車さんは

『怨敵退散、あの扇さんを追ふて這入つて私が長八の一

張羅ちよつと走り行かねばならぬ、通ひは何處へ北野の

時鳥あれ一聲が、かう言ふたらチヨボになるのだつせ』

『ハイ』

と友太郎ははでな三味線を弾出す、榮は聲をしぼつて

『榮華の春の花さへもきのふの夢さ

まはて、身より寒氣に鳥原のくる

わの夕北風をいこふもかたき薄衣に

勘當の身ミならの葉や……』

と語る

『此間に扇さんもう一通出て旦那と

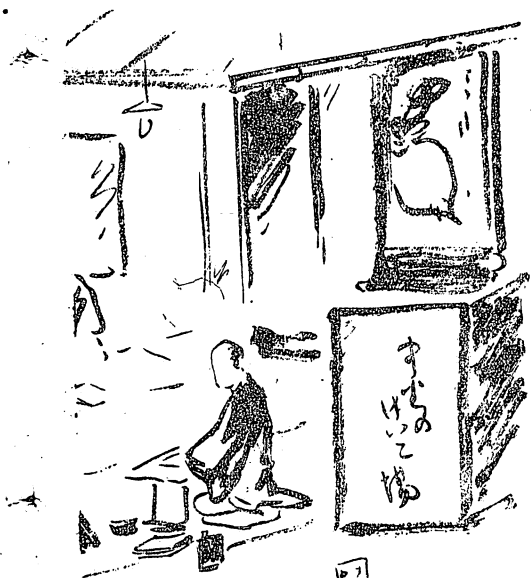
行きすぎるのやで』

『ハイ』

『齋五郎さんの淨勢も市昇さんのた

場いこ持も行すぎるのですよ』

と南北さんが聲をかける、皆承知



して引下がる

『この台詞言わへんさかい、  
すぐ次の淨瑠璃やつて見てわ  
な』成駒家さんが聲をかける

『へい』

友太郎さんはすぐに

何と師走の鴛鴦の夢揚屋  
の軒にたどづめば出合がしら  
に長八が

魁車さんは成駒家さんの息  
ばかり見てゐる

『これは眞平御免』

『あいさつミたん見かはす顔  
ミチヨボが語る

『ヤツこれは〜』

『ア其處でこつちから言ふは』

成駒家さんが聲をかける

『オツ長公か』

『よろしいそれを聞いてから言ひます、イヨーこれは矢車の



食  
お大盡様もし長八めで御座り  
満  
南ます』

北  
『オツ久しく逢はんんだな』

氏  
長八はちよつミ涙聲になる

筆  
『イヤモウお久しい段か、お

なつかしう御座ります』

◇……

『世にある時はさして目もか  
けぬそなた今この姿の久兵衛

を』

『オツト皆までおつしやりま

すな矢車のお大盡様の御落着

の席聞き出してくれたなら絹

云はうミおこひもきのふも日々毎日おつしやつてど御座り

ます、ハテさうころんでもたどはおきぬ太鼓の皮、厚うはつ

て御座ります、申さばこれも慾の皮で御座ります』

魁車さんは大分に言ひ廻しをつけて云ふ

『ム、眞實太夫が、あの太夫がまここ…… ナア岩本こゝで

何遍も聞いて仕舞ひにお前の手をジツミ振つて、眞實太夫は

さういふたか…… ミキツパリいふたらあミ云ふてんか』





「通ひくろわの寛潤も人目しのぶの忍ぶすり其文字すりの目關笠、戀の合圖か手拍子に揚屋の藤は立ち出で、」

「ハイ新升さん」

呼ばれて新升さんは下座の方から

「オツおやくそくたがへずよう来てあげて下さりました。松山太夫もなみたいていのお待兼では御座りませぬきのふの涙まだかわかず、縁あればこそ身は受けられ、けふは手に手を出口の柳再び廓の水のむまい、嬉しい、今泣いた鳥がもう笑ひ顔サア、早う顔見せてあげて下さりませ」

書抜きを放してスラ、こいふ

「よう覺ててやはりまんな」

こ後から誰やらがいふ、

「手ををりかねのかね事に打つき奥の奥深う一人のかけはさらば垣ハツミ久兵衛せいたる顔」

こ語る、市藏さんは考へてゐる

そない長いチヨボがあつたら何ぞせんならんな新升はん刀を抜いて渡しまつさ」

「ハイよろしおます」

「これでもまだあまるやろか」

こいふてゐるうちツン、進む、

「ヤツパリ太夫も尾のある狐……」

「エ、さうしてくりやうこのれん口行いつ戻りつみつかはミまる蝶々が軒先に」

こ太夫は車輪に語る、魁車さんがチヨボの切れをまつて

「ま大盡何處へ御座ります」

「長八わしはもう清水へかへります」

「これは又滅相な下されもの、御役も矢車めぐりぐてお召になるこも人は怪しく思ひますまい」

「その伊達をつくり逢ほうと思ふ松山の心はさうから變つてゐる色さへみんさめてゐるわい」

「何々一度も手を通さねば御覽なされませ頂いたばかりの色艶一」

「フムそれでは色は變つてぬこいふのか」

「ハイ此通りで御座ります」

魁車さんは見せる手真似をする

「いつそ踏み込恨みのたけを」

「其ゆきたけもおめし頃」

「ナア」

成駒家さんは南北さんの傍へ来た、

「此跡で刀を抜くのは曾我の家になるさかい、やつぱり此處

で抜く事にするわ』

『その方がよろしおまつしやろ』

南北さんは異議を申し立てない、

狂言方は

『ごこで木を入れまひよ』

『ウン』

成駒家さんは考へて

『あした何ミかするわ』

『ハイ返し』

ミ大きな聲でいふ。

【三】

さつきから市藏さんは臺詞書をひろげてゐる、福助さんミ新升さんミ別の連中が何かいふ。

事件は市藏さんの幸右衛門ミいふのミ福助さんの松山太夫ミは十七年振に名乗りあふたのである。其處へ男ミ間違へて久兵衛が長八をつれておさ入り込む幸右衛門ミしれて久兵衛は幸右衛門から唐津焼の秘法を聞くミこころで幕になる。

『ヘイ大話』ミいふミ川島萬次郎さんは謠の本をあける、それは熊野である。

権三郎さんミ成太郎さんは又二人並んでゐる、誰やらがクツツミ笑ふ、卯三郎さんが何かいふ高雄太夫は重吉さんの三味線で

『頃は明暦三つのこし……………』

ミ語り出す、

川島さんは

『鶯の間おしき春なれや……………』

ミ諺出す、

大分事件は後雜らしい

つまりは久兵衛の母妙順ミ彌二郎、幸右衛門ミ松山は忍ぶ久兵衛ミ清兵衛ミはけふ燒上ミ錦欄手を青蓮院の門主ミ金森宗和に見せるらしい

『一の位も庭づたひ』

ミいふチヨボで扇雀さんは、

『何處から出ます』

『あの下手の奥からだす』

『ヘイ』

ミ書拔をひろげて

『皿一枚鉢一つ……………』

ミ大分むつかしい事を言ひまはしをつけてゆるくいふ

「見事、四郎太が瀬戸、藤四郎の破風、唐津の根ぬけにまされし名作」

なんて大分テクニクを用ひる、だんぐに事件は進展する、

幸右衛門は秘法を漏らしたこいふので鰻十郎さんの侍が捕へにくる、久兵衛は發狂して

「謀つたはく……………」

「気が狂ひ出す、其時さうしたのか出て来た鰻十郎さんの手が市藏さんに當る」

「當つたわく」

「早速に眞似をする」

當つたこいふ延藏で白升さんはニツコリする。

稽古場はこんな風に進んで行くさうして可なりの大仕掛な可なり充實した、可なり眞面目なものである。時々の洒落で

もなかつたならそれは専門學校の教室のやうになるかもしれない。

芝居一つこしらへるにもさまざまの苦心のゐるものである  
こんな臺詞をたしか青蓮院の門主がいふてゐられた。

◆……………言狂月一十阪中阪大……………◆

第一 將門の子 二幕

相馬太郎良門……………中村福助

瀧夜叉姫……………中村魁車

第二 伊賀越 二幕

唐木政右衛門……………中村鴈治郎

宇佐美五右衛門……………尾上卯三郎

お谷……………中村魁車

譽田大内記……………中村福助

第三 壺屋久兵衛 三幕

壺屋久兵衛……………中村鴈治郎

陶器師清兵衛……………尾上卯三郎

蝶々の長八……………中村魁車

松山太夫……………中村福助

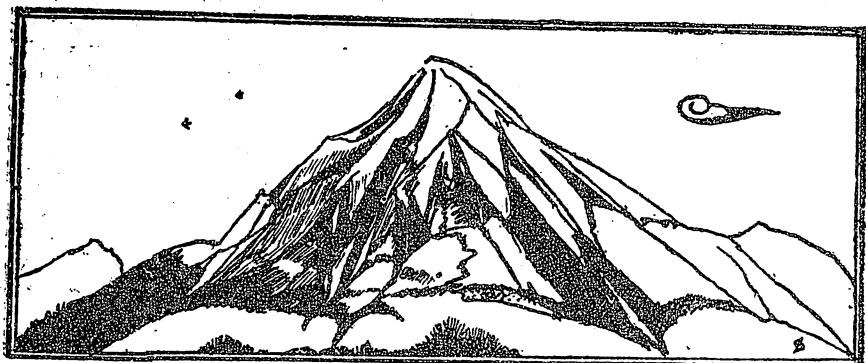
金森宗和……………嵐巖笑

第四 明烏夢泡雲 一幕

春日屋時次郎……………中村福助

山名屋浦里……………中村雀右衛門

遣り手おかや……………尾上卯三郎



伊賀越道中双六

饅頭娘

松長照夫

上唐木邸の場

郡山藩の劍道指南役をして五百石知行を貰つてゐる唐木政右衛門は、今日突然城主譽田甲斐守大内記から呼出しを受けて出頭した。その留守邸の玄關先が幕開きになつてゐる。

政右衛門は何故か四五日前に、家中でも評判のよい自分の妻に離縁を申渡して實家宇佐美五右衛門方へ歸らせた。のみならず、今宵は新に花嫁を迎ゆるさいふ段取になつてゐた。留守邸では若黨の武助といふ忠僕の指揮で、二三の仲間が竹箆でそこらを掃除してゐる。口さがない仲間等は、奥様が何故に實家へ歸つたのか、又今宵の來客は誰であらうなぞと、勝手な憶測をしてゐたが、やがて掃除をすませ、一同奥へ入つてしまつた。ミ、そこへ離縁された妻のお谷が屋敷女房の拵へ、頭巾を眞深に人目を忍びながら出て來た。ソツミ家内の様子を窺つてゐたが、入り難いこなしで躊躇してゐるミ、奥から若黨武助が出て來た。

お谷は理由のない離縁を申渡されたものゝ、實家方宇佐美五右衛門は假の親、離縁をされましたミは云へず、杖柱ミも頼む夫に捨てられる位なら死んだ方がまし、

死ぬなら一生を誓つて嫁いだ我が家で死にたいと、耻を忍んで戻つて来た。恰度武助が出て来たを幸、武助に頼んで、も一度夫にわが言したいと思つたので、お谷は聲を忍ばせて武助をよんだ。

武助はお谷の心持に同情して、追つ付け旦那様がお歸り、よいやうにお取返し致しますから、御窮屈でも人目に立たぬ女中部屋でお待ちなされませと云つて、お谷を伴れて奥へ入つた。

で、舞臺が廻るに政右衛門の奥座敷、見つけは史紗形の襖上手は一間床、一行もの、軸がかけてあつて季節の花が活つてゐる。本箱、鎧櫃など、いかにも武藝家の居間らしい。

旦那のお歸り——こいふ觸れ込みで、政右衛門は微醺を帯びた體で歸つて来た。武助が出て社符や袴を脱ぐ世話をする『そちも豫て知る通り、此達より御辭退する櫻田林左衛門と武藝の試合、明朝正卯刻、御前に於て立ち合へし押つけ御家老の云ひ渡し、今晚妻を迎へる婚禮の一兩日お延ばし下されと斷つて願ふもいつかなお聞入れがなく、女房迎へるは私事、明日はさうしても延ばされぬと、はてもう心ない家老共よの、此方は宅へ氣が急ぐ、漸々のこゝで只今歸宅、いやもうさつぱりミしたはいく……ミしたが申し附けたる祝

言の拵へ、用意萬端調ひあるか』

爾ういふ舌のもつれぐあひ、よほご過醉の體だつた。

『仰せの通り調ひましたが、旦那様にはあの……』

『ハテ、知行取りにも飽果てた。嫁の来るまで、され休息致さうか、女ども枕をもて』

『はアア』

お谷は次の間から怖るく枕を持つて出て来た。

『こりや武助、この女は何者ぢや』

『へい、あのそれは、おうそれく今日お目見得に参つた新参の女中……にござります。いやさ新参の女中衆、それ何事も辛棒して勤めるか……へい旦那様、さうぞおめかけられて下さりませ』

『む、奉公人ぢやの、みかけから愚鈍さうな女子なれど、ま、使ふて見てくれうわい。こりや女今夜は身共が女房を迎への祝言、その祝言の給仕を申し附けたぞ』

お谷はまさかと思つてゐた噂の祝言が事實で、而も孟の給仕に云はれては思はず息込んだ。武助はそれ胸中を察して眼顔でお谷を抑へる。そして武助は孟の用意をしに奥へ行く。そこへ實家の宇佐美が威い權幕でやつて来たミ下女が知らせに、お谷は怖り、政右衛門は下女にお通し申せと云ひ

お谷が背後から着せかける羽織を自ら取つて、差出女あちらへ行けと邪見に云つた。お谷は惜々ミ上手へ入る。入れ違ひに五右衛門、白髪かつら大小社袴でつか／＼出て来た。

「これは／＼五右衛門殿にはようこそ、御入來、まづ／＼」  
「お、挨拶なくとも罷り通るわい」

五右衛門は荒々しく上手へムツミ坐つた。

「して五右衛門殿には何用あつてお越しなされましたか、今日はちミのがれぬ用事がござつた」

「さや／＼皆まで

云はれな、今晚具許に嫁入があるミ承はりし故、その御祝儀を申しに参つた。さ、老人の寸志いざ御覽下され」

五右衛門は政右衛門の前に紙包を置いた。それは祝儀の目録でなくて一通の果し状だつた。政右衛門は意恨をうける覺はないミいふ。五右衛門は覺わなミいふは云はせぬ、科なき女



▼——「伊賀越」の女房お谷（中村魁車）——▲

房をなげ去つたミ詰め寄る。

「はアて、拙者が女房を拙者が去るに、おてまへ様が何故の御立腹」

「やア云ふな／＼」

お谷の實の親いふは上杉の家中和田靱負、嘗て政右衛門が和田の家へ厄介になつてゐた時、お谷ミ通じ出奔して郡山へ来た。當坐浪々の身を不惑に思ひ且政右衛門の人物に見込みがあるミ見た五右衛門、主君に政

右衛門を紹介して指南番に仕立てあげ、勘當の身のお谷を五右衛門の娘分として改めて政右衛門ミ結婚させた。假しお谷にどんな態度があるかしらぬが、五右衛門に一言の挨拶もなく離縁して他から嫁を貰ふミいふのは、五右衛門をあまり踏つけにした仕打である、お谷の落度はどんな落度であるか、

それを聞かう。返答次第ではその場を立たさぬといふのが五右衛門の云ひ分だつた。

だが政右衛門は他愛がなかつた。唯女房に飾が来たから離縁したまで云つた。五右衛門は堪忍の緒が切れて、一刀に手をかけた。

一拙者を打果されては、殿へ不忠こなりませう。なぜこ仰われ、今日御上意にて明朝御前に於いて櫻田に勝負致す政右衛門、明日の勝負検分の役目仰せつけらるゝ其許が、その立ちを致さぬうち拙者を切つてお仕舞たされては、殿へは何も云ひわけぬ。さ、まづそれまでは拙者の命、御宥免のほど願ひまする』

これには五右衛門も話つてしまつた。こ、そこへ嫁御寮來着こいふ知らせ。坐敷には燭臺を持つて来る。鳥臺銚子をはこぶ、やがて介添女房が入つて来た。

『嫁御様の介添としておせしけ横口に申す不束者、幾久しくお目かけられて下さりませ』

五右衛門は苦り切つて顔をそむけてゐるこ、政右衛門は次の間に聲をかけて、新參の女に着き菓子をもて云つた。五右衛門はお谷の顔を見てびつくり、さうして此處へ来たかこたづねる。

『あゝいや宇佐美氏、あれは今日新參に召抱へし下女、今宵給仕の役申つけし者でござる』

『ななんこ云はッしやる。そんならお谷に今宵の祝言の給仕……………』

『さア〜早く女房共の顔が見たいぞ』

政右衛門は五右衛門の立腹なごには目もくれず、花嫁の来るを待ち遠がつた。襖をあけるこ遠見の玄關、長持、挾箱、銀乗物なごが見ゆる。乗物の戸をあけるこ、中から綿帽子を被つた花嫁が出て来た。扮装はまさに嫁御寮だが、歳は六七歳、頑はない子であつた。五右衛門にお谷は呆氣に取られた態。

『これが拙者の戀女房、何ごちよツくり何處へ置いても邪魔にならぬ、よい女房でござらうがな』

『これ乳母、もう行のう』

乳母横口は持參の玩具市松人形や風車を出して並べたてたするこ、又次ぎの間から思ひもかけぬ和田靱負の妻柴垣が三寶を持つて出て来たので、五右衛門お谷は再度悔り、柴垣は政右衛門に對つて徐かに坐つた。

『頑はない此娘を女房に持つて下さる上は、即ち掣引出の目録、主人上杉宇内より忤志津摩に下されし敵討御免の書、い



よく、助太刀なされて下さるお心ぢやなア』

『お訊ねに及ばず承知致して罷りある。こりや新参の女もよつく聞け、この政右衛門には谷のいふ先妻あつたなれど、親の許さぬ密通して靱負殿の勘當の娘、女夫の悲しさは表立つて靱負殿いふこゝ協はず既に此間その靱負殿には河合又五郎の爲に致ない最後』

『わッ—』

お谷はのけぞるほびに驚いた。

『敵は名にあふ武術の達人、悴志津摩が瘦腕には心合なく思へども、現在郡山の扶持を戴くこの政右衛門』

よしみもない他人の助太刀はできず、この花嫁のお俊は靱負の忘れ形見、志津摩の妹に相違ないからは、お俊に祝言すれば舅の敵、即ち小舅の助太刀をするに主君へ願ふ所存の政右衛門であつた。

政右衛門の本心を聞いたお谷はよく去つてくれた喜び、五右衛門はよい年をして面目ないさあやまる。一同はじめに晴れやかな顔になつたが、お俊だけは何じやら濟まぬ顔で、あれが欲しいッ、ミ乳母にねだつた。

『でもさてもさもしい嫁御寮ではあるわいな』

『あいや道理、可愛い女房に何惜からう。したが一個は

過ぎる。半分は身があづかる。これが夫婦の固めぞよ』

政右衛門は菓子臺の上の饅頭を取つて半分をお俊に與へる花嫁はにこくしながら口へ持つて行つた

お俊は柴垣の實子、然しお谷は柴垣はなさぬ仲の親子だつた。柴垣はそれを氣にして、お谷とお俊を見かへさしたと思つてくれるな、母親から靱政右衛門に悪い性根をつけたと思つてくれるなと云つた。お谷は微塵そんな心は起さなかつた。縁が切れるは父への不孝の云ひわけになるし、政右衛門がいつまでもお俊に添つてくれるのは家の爲志津摩のため、それを思へば死ぬまで去られてゐてもかまはなかつた。

政右衛門は五右衛門に對つて改まつて願ひがあるに云つたそれは餘でもない、五右衛門の知行を自分にくれいふ願ひだつた。五右衛門はその不思議な願ひの筋がわからなかつた。

明六ツ刻に試合をする對手櫻田林左衛門は、こても政右衛門の技量には敵はぬ者だつた。然し弱敵を負かせば主君の覺は益々めでたい。御意に協へばお暇頂戴は協はぬこゝになる。依つて明日の試合は林左衛門に故意に勝を譲り、それを落度知行を返上、浪人の身になつて助太刀をしたいといふが政右衛門の肚だつた。隨つて爾うなれば、政右衛門も主君

に推擧した責任上、五右衛門も責任を感じないではおられない。そこで五右衛門の知行をくれと云ひ出したのだつた。

五右衛門もさより政右衛門の申し出に對して否やはない。政右衛門が義のために妻を去り知行を捨てるも武士と生れた甲斐、自分でも義に感じて知行を捨てる位は何の考慮もなかつた。が、唯一つ残念なのは、平素から高慢無禮の林左衛門に、今度こそは恥面搔かせやうと待ちかまへてゐたのに、反對に此方が耻面をかゝねばならぬ仕儀となつたこと、が、それも政右衛門が本望を遂げれば、耻を雪ぐこともあらうと、一時の無念を忍ぶことにした。

## 下郡山城中の場

舞臺は郡山藩主櫻田大内記奥殿、正面は九尺の床の間、天照皇太神宮、春日大明神、正八幡武神の三幅、三寶、奉書紙の神酒のくち違ひ棚、文臺などが置いてある。家にが麻社禊大小のこしらへで上下に居流れてゐる。

佐舞利流の達人櫻田林左衛門と唐木政右衛門との試合は家臣の面々も非常の興味を以てゐた。いよゝそれが今日こなつた。家臣共は林左衛門の方が強いといひ、政右衛門の方が強いといひ、互に議論をしてゐるころへ、櫻田大内記が正

面の襖をひらかせて出て來た。太刀をもつ小姓の後には宇佐美五右衛門が随つてゐる。

「申つけし支度調ひたるや」

「ハツ、雙方疾に出仕仕てござりまする」

「これへよび出せ」

家臣は上手下手に向つて櫻田唐木の名をよぶ。上下の襖からは兩人が徐かに立ち出た。

「檢分の役はこの五右衛門、さりながら勝負は時の運に申せば、必ずさもに以後意恨なごはさまぬやう」

林左衛門はたんぼ附の槍、政右衛門は木劍、雙方主君に一體してキツミ左右にわかれて身構へた。もさより政右衛門の身體には隙がない、林左衛門も一流の達人だから隙のない身體には打込み難い、政右衛門は、これでは果てしがなないと思つたから誘ひの隙を見せるさ、林左衛門は得たりと突いて來たそれを外して置いて、その途端に落したやうな態に見せて木劍を落した。そしてハツミ平伏した。

林左衛門は得意の面。五右衛門は主君の面前で切腹する覺悟、すでに肩衣外しかけたが、大内記はそれをさしこめた。

「待て、此場は切腹は相協はぬぞ、誰ぞある、五右衛門を引つ立てし」

五右衛門は家臣二名に引つ立てられて奥へ入つた。内記は林左衛門外家臣一同を従へ、奥で酒宴を催す云つて引込む。政右衛門は心にもなき試合を、主君三右衛門にわびて、四邊に人もないを幸、すごん立ち去らうとした。

「政右衛門殿、おまちなされ、御前でござるぞ、御前のお召でござるぞ」

ハツミ氣がついて見るに、政右衛門の前には主君大内記が縛がけで槍を持つての立身。

「や、御前のそのお姿は」

「お、武道にあるまじき卑怯の致し方、古参にへつらふ鈍武士はあつて益なし、その仕置には懇田大内記、今此所にて成敗せん」

大内記は云ふより早く突いてかゝつた。政右衛門は無手で雙方に拂ひのけ、床の間にあつた神酒の口を取つてピタリと構へた。くるりと捲いた奉書の紙は秋水三尺の劔にもひさしく、政右衛門の身體は奉書のかげにかくれてしまつた。大内記は右を突き左を突く、上段下段に突いてかゝるを、政右衛門は傳授の心で極りくの氣合を呑み込ませる體。

「篤く御會得」

「わ」

「下さりませふ」

政右衛門は氣合をぬいて平伏した。

「天晴流石の政右衛門云はずして我への傳授神がけの奥儀、大内記満足に思ふぞよ」

「ハツ」

「今こそ許すそちの暇、首尾よく本懐さげさせよ」

「すりや御前には仇討を」

「お、疾より予は存じてをるぞ、此間聞きし報負の横死、殊に今日の試合の様子、仔細あらんこゝろ、わが手練をかしくして林左衛門に勝を譲り、身の暇を取つて助太刃せん望み」

然し大内記は神流の奥儀を知りたかつた。政右衛門の願ひはすぐにも聞き届けたいが、その前に奥儀の傳授を受けたかつた。その希も協つた今、暇をやるは無論のこゝろ、傳授の禮によいものを取らせる云つた。

次の間からよび出されて出て來たのは、意外にも渡邊志津摩であつた。

志津摩は政右衛門を訪ねるべく郡山までやつて來た。こゝろが城下で大勢の惡侍に出逢ひ、難題をもちかけられて困つたが、身は仇を持つもの、つまらぬこゝろに掛り合つてはな

らぬと思ひ、深く慎んで對手にならなかつた。こころへ歸城の途中を通り掛つた大内記、仔細があらうと連れ歸つた。そこで始めて政右衛門の胸中も解り、今日の試合も、實は大内記が仕組んだことだつた。

「斯かる名君の許にありながら、御奉公致すことも協はず、やむを得ずして不忠のお暇」

「差し古したれど不動國行、今日の餞別に取りらずであらう」

「はッ、こは恐れ入つたる賜り物不動の文字は動かす動ぜずこれにて首尾よく本望達すでござりませう。君にもますます御健勝」

「そちも堅固で、よい吉左右を相まちをるぞよ」

政右衛門は拜領の太刀を押し載いた。首尾よく仇を討つた上は再び歸參の見込はなかつた。大内記もそれを知つてゐた。だからこれが主従の見納めと思ふ念が、主従の胸に脈々し傳はつた。

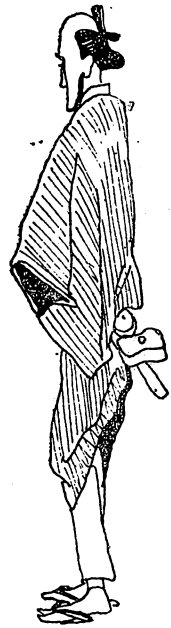
かたみに見かはす顔が橋の頭、時計の音、時の太鼓で幕がしまる。

## ◇ 告 豫 號 次 ◇

### 京南座「顔見世號」

本誌が創刊號以來の目醒ましい活躍振りはその内容の上で御批評を願ふとして、來る十二月發行第三號は、更に陣容を整へ京南座に残るたつた一つの芝居行事としての顔見世を中心に、東西斯界の人名士の執筆になる原稿を以て益々御期待に沿ふべく目下鋭意準備中でありませう。尙右の外特別記事として「十二月道頓堀興行總まくり」を併せて掲載興行戦の内幕を最も忌憚なく如實に諸兄の前に御覽に入れる筈です。御刮目下さい。

### 十二月道頓堀興行界總まくり



## 鴈治郎と劇評

山本 修 一

鴈治郎くらゐ有名で、そのくせ世の中に紹介されてゐるこの少い役者はあるまい。福助、魁車、延若、多見藏、その他關西の一流俳優は、いづれも然るべき劇評家によつて、正常な評價を與へられてゐる。鴈治郎に至つては、いつか霞亭氏が演藝畫報に連載した『僕の鴈治郎観』があるのみで、しかも余りヒイキの引倒しがひびきすぎて、私のやうにかなり鴈治郎に好意を寄せてゐる人間にも、少し反感が起るやうなものだつた。これは鴈治郎の人間の中に、あんなものを書いて貰つて、ホク／＼喜んで讀んでゐるお人の好きがあるためかも知れないが、こにかくあればビドかつた。

試みに東都の演藝雜誌を開いて、「鴈治郎」といふ字が正しくかける劇評家が幾人あるか驗べて見給へ。その多くは雁治郎でなければ、雁次郎だ。小團治三左團次三

の文字の使ひ別けには、馬鹿に得意な彼等も、鴈治郎なんかさうでもないのだ。この點で一度も誤つたことのない劇評家はただ一人あるのみで、それは實に岡鬼太郎氏だ。名優鴈治郎が、かういふ風に劇評家から無視されてゐるのは、鴈治郎自身に「劇評」を喜ばない傾向が、多分にあるためらしい、これはあらゆる藝術家に特有な傾向で、敢へて不思議にするに足りないが、ただ記憶しておかねばならないのは、鴈治郎の藝術が、世にも果敢ない「俳優藝術」であることだ。三千年前の希臘の悲劇詩人の作には今尙ほ接するこゝが出来る私達にも、その時の名優がどんなものであつたかはまるで想像すること出来ないのである。俳優は自分の藝術の知己を後代に俟つこゝが出来ない。彼の藝術史上の地位は、彼と同時に生きてゐた劇評家の評價に、全然支配されるのだ。もしも鴈治郎の藝術の中に少しでも永遠性が宿つてゐるなら、その永遠性を永久に傳へる劇評家のゐないことは、誰しも寂しく感ずるに違ひない。

こ云つて私にそれが出来るかといへば、それは私にも不可能である。誰かそんなことをしてくれる人がないかミかう言掛けるのみである。が、鴈治郎のいゝところは誰にも一見解るやうに、その本當にいゝところは仲々解るものでない。ミこれだけは斷言が出来るのである。

誰か彼の藝術を本當に味得して、その永遠性を不朽に傳へる劇評家はないか。ヒイキの引倒しでは駄いだ。悪いところはハツキリ悪い言切つて、そのくせいゝところは本當に好い言切れるやうなそんな批評家はゐないのか。それが出なければ關西劇壇は絶望だ。

## 遺して置きたい

### 『鴈治郎映畫』

吉本 寛汀

白井氏が松竹キネマ會社の社長であり、鴈治郎が白井氏に握手してゐる今の機會に是非とも鴈治郎を活動寫眞のカメラの前へ立たせる事は必要であらうといふ。鴈治郎は「わたしがキネマへ出へなりまへんのか」を嫌な顔をするかも知れないが、誤解してはいけない、關西劇壇の第一人者としての誇を傷けるやうな意味でそれを懲悪するのではない。

歌舞伎役者や新派乃至新劇の俳優で、舞臺劇に行詰つた結果キネマに轉じたものは随分多い、現今一流のキネマ俳優として、賣出してゐる某々々の如き、いづれも實演で喰へなくなつた揚句、新しい活路を得て或意味の成功を

したのであるが、勿論鴈治郎映畫作製の理由を此種のものに混同して貰つては困る。

要は明治大正の名優の型を千古に遺して置きたいからである、歌舞伎劇といふものゝ命脈が將來されだけ續くかは疑問で、いつかは滅びる時代が来るかも知れないが、そうなれば猶更古典藝術の活ける歴史として珍重されるであらうし、また今の隆昌が繼續されるにすれば後代の俳優が演出上の參考資料として、されだけ裨益されるか分らない。亡き團菊共演の「紅葉狩」の寫眞が撮影技術も幼稚でありフィルムも疵だらけであり乍ら國寶的映畫として遺されてゐるが、もつこいろくの團菊等の演技がフィルムの上へ現象されてゐたなら、今の若手俳優たちの好參考ともなり、吾等の懐古的欲求を潤す上にも充分のものがあつたであらうと思ふ。

これと同じ意味で鴈治郎の「紙治」「吉田屋」又は「盛綱」いふやうな天下一品折紙付のものは立派な撮影監督や技師の手で映畫中のものにして置く事を望まし。

だが、一步退いて考へれば動作と臺辭とチヨボミの呼吸がピッタリ合致し、大劇場の零團氣の裡に渾然と融和して初めて至上境に達する歌舞伎劇を、單に動作のみ引離して畸形的に之を遺すことは考へものでもある。若し歌舞伎劇を映畫化するならば、如上の缺陷を補ふ可き何者かを撮

影技巧の上に求めなければならぬ、この邊の事は實際に當る撮影監督の頭惱の働き一つがその映畫なり演技者なりの死活の分岐點なるのである。

歌舞伎劇の型ミ名優のおもかけの映畫保存、この希望は當に鴈治郎のみでなく他の俳優——假令は幸四郎の「勸進帳」ミか、歌右衛門の「淀君」ミか——に對しても容れて貰ひたいのであるが、茲に鴈治郎に對して特に望むのはその演技上の特長が、若さを主要條件の一つとする二枚目にあるからである、老優中村鴈治郎翁ミいふのが至當な年配であつても、さうもそうした感じに受取れない處に鴈治郎の若さがある、その若さを今にしてフィルムに止めて置けば鴈治郎は永劫に若く美しく、水の滴るやうな治兵衛や伊左衛門がスクリーンの上になつても輝くであらう。

## 鴈治郎の肚

大森 痴雪

大阪の歌舞伎役者の中で、鴈治郎ほゞはつきりミ自分の缺點を知つてゐるものは、るまい。鴈治郎は有名なお世辭上手であるだけ、それだけ多くのお世辭上手が彼の許に集つて御返禮ミいつたかたちで盛んに讚辭を浴せかける、それを彼はいつでも嬉しうに受けて、更にうまいこを云つてお世辭の御返禮の御返禮をする、だがその肚の中で

は決して喜んでゐるのぢない、『俺の缺點を見てゐながらあんな嬉しがらせを……』ミ苦しく思ひでゐるのだ。

私は長い間の交りのうちに、幾度かさうした『鴈治郎の肚』に觸れる機會にでつくはした、實際成駒家は自分の個性、體格、容貌、音調、さういつたものを、非常に緻密に解剖的に知り盡してゐる、ミ同時にその個性なり體格なり容貌なり音調なりの爲めに却つてさうすることも出来ぬ破綻を生ずることがある、即ちその缺點をも十分に知つてゐる、『あすこは最ミかうしてかうすればいいのだらうが……』ミいふやうな歎聲を漏らすことは、私達の耳には珍らしいことではない、私はよくさう思つた、成駒家は舞臺に立ちながら、まるでスクリーンに映つて行く映畫を批判するやうな態度で自分自身の藝を見て居るのだなミ。そんな風だから彼の藝には一定の型ミいふものがなく、天下一品ミゆるされた紙治でさへ演じる度毎に變つてゐる、畢竟それは自分の認むる缺點を補はうミする努力の表はれに外ならぬのだ。

然しながら人の天分は無限ではない、それミに定められた領域があつて、その範圍から踏出せないことは、どんな大天才でも免かれぬ運命で、成駒家が自分の缺點の短所を知りつゝ、さうすることも出来ないのはそれが爲めである、然も彼はさうすることも出来ないミ知りつゝ、尚煩悶もし努力もしてゐる、これを何等の自省もなく漫然ミ舞臺にゴロついてゐる役者達に比べる時、私は成駒家に對して心から尊敬を拂はずにはゐられない。

黄公

松三

スケッチ手帖から  
鴈治郎の印象

柴谷柴舟

富樫

源藏

盛綱

治兵衛

治兵衛

治兵衛

柴舟







中村 鴈治郎 馬場 啼 二

眼 千 兩 顔 千 兩 の 鴈 治 郎  
中 ぼ ん へ 云 ふ 事 が あ る 鴈 治 郎  
鴈 治 郎 つ き あ い で 出 て 喜 ば せ  
兄 弟 ミ 言 ふ 顔 で 出 る 鴈 治 郎  
白 粉 を 落 せ ば 林 玉 太 郎  
鴈 治 郎 ヒ イ キ 先 で は 歳 を くり  
頬 冠 り が 尙 鴈 治 郎 若 く 見 せ  
鴈 治 郎 キ ャ ツ ミ し ぞ い た 博 多 帶  
今 も 眼 に 見 る や う に 言 ふ 鴈 治 郎  
忠 兵 衛 も イ 菱 治 兵 衛 も イ 菱 な り  
鴈 治 郎 そ の 劇 評 に か く は ら ず  
鴈 治 郎 七 三 迄 は 何 氣 な し  
姑 も 嫁 も 見 惚 れ る 鴈 治 郎  
只 立 つ て 居 て 鴈 治 郎 喜 ば れ



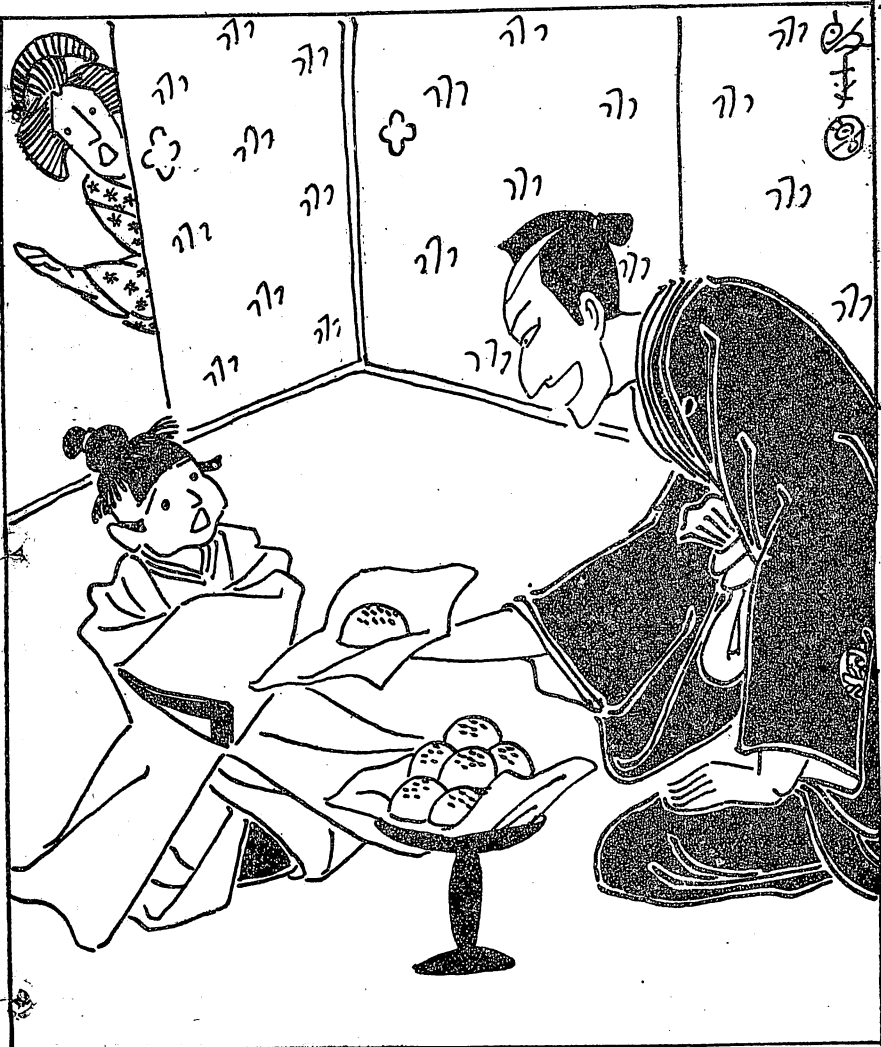
二番目は角帯になる鴈治郎  
唐棧の裾が引ずる鴈治郎  
鴈治郎台詞を變へて一ミ工夫  
町人で居て鴈治郎抜きたがり  
乗り込みに涼しい顔は鴈治郎  
花道へ出てしやんこする鴈治郎  
劇評へ眼鼻をかゝぬ鴈治郎  
しよんぼりこ出して鴈治郎惚れられる  
鴈治郎作者へ世辭を二ツ三ツ  
握手する度鴈治郎寫される  
まだつけて居るのを氣づく鴈治郎  
鴈治郎立つた浮名はよそにする  
鴈治郎お膳の前の一ミ思案  
◇稽古場の鴈治郎  
駄目を出す聲聞きされぬ鴈治郎  
鴈治郎貸本屋程ひろげてる

漫畫狂言二題

吉岡鳥平

一、伊賀越

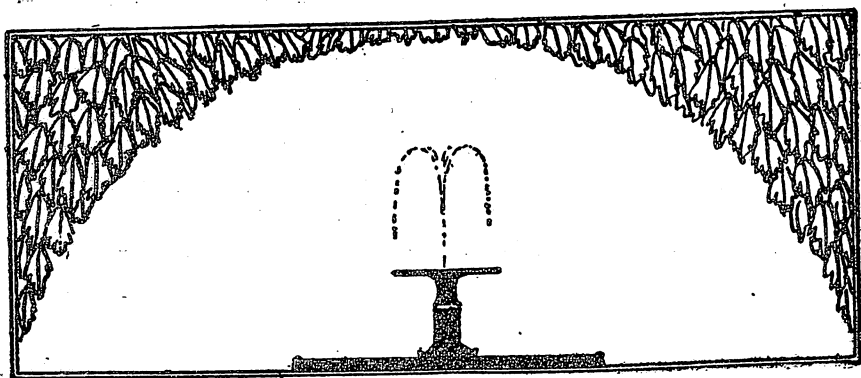
唐木政右衛門『五斗兵衛も赤垣源藏も酒故悲劇を捲き起した、如何様酒は狂ひ水。拙者も禁酒同盟會の會員でござる。人生の大事たる結婚式に酒を用うるは餘り三申せば不心得千萬、依つて拙者は後世に範を残す爲め、後妻との結婚式には饅頭を用ゐてござる。是なれば酔つ拂う憂ひは決してござらん。なんぞ大正の紳士淑女の方々御貴殿の結婚式にも三々九度の盃の代りに饅頭を半分づゝを上られては如何でござる。古來饅頭故に身を誤つた者は一人もござらんで』



二、碗屋久兵衛

碗屋久兵衛「色男金ミ力は無かりけりなごこ川柳點では侮辱して居ますが、さうです、私の手を御覽下さい。厚げつけた位では粉々になる筈はありません、二つに割れる位が關の山です。それを、なんご御覽下さい、私が投げると粉微塵に酔けて狂舞うでせう。久兵衛それは素焼でないかご仰有る方もありますが私も歴つきミ壺屋久兵衛、決して素焼を彩つて赤繪だなごこ偽りは申しませぬ。私の腕力五十人力の強さが有ればこそです」





# 將門の子 (三幕)

大阪中座十一月上演脚本

笹山吟葉作

## 時 所 人

### 物

永延二年の秋  
播磨備前の國境

相馬太郎良門	中村福助
瀧夜叉姫	中村魁三
堀江次郎當春(實は大宅太郎光國)	嵐吉三郎
伊賀壽太郎忠國	市川市藏
平太	市川緞十郎
庄太	中村扇雀
常陸の荒猪丸	中村政治郎
侍女唐衣	市川新竹
長狭八郎保時	市川右左治
鷺澤太郎光忠	市川蓮平
伊北十郎宗茂	市川市昇
辛島三郎春友	市川齋五郎
治兵衛	河原崎權三郎
小金次郎	尾上卯多市
其他侍女數名	嵐冠之助

第一幕

國境の山

本舞台中央に大きな紅葉の立木、その前は伽藍の趾を覺しく、整の間に礎石が点在してゐる、上手奥の方に小高くなつた塔の跡があり、その後には木立を透して朽ち果てた僧房の一部が見ゆ、下手には倒壊した經藏や、苔にむされた石佛などがある、正面は坂路の体で、その向ふに重疊たる山の頂さ、秋晴れの空が見えてゐる、備前播磨の國境の山中にある廢寺の体。

永延二年の秋の末、夕近き一日。

(下手よき所に石を疊みて籠を築き、柴を折焚いて、平太が湯を沸かしてゐる。

傍には一箇の唐櫃が置いてある。

渡り鳥の聲。

やがて下手から水桶を提げて庄六が出て来る。

庄六。湯は沸いたかな。

平太。もう何時お着きになつてもよい、大分沸いて來た。

庄六。用意にこれだけ水を汲んで置いたらよいであらう。

平太。よからうとも、姫上がお着きになつたら、庄六、お前

は何より先にこの白湯を差上るのぢやぞ。きつこ喉を渴かしておいでになるに違ひない。

庄六。よし心得た、なア平太、姫上は三石での噂のやうに、

本統にお美しいお方であらうか。

平太。それはお美しいとも……云つても俺は平親王様の御代盛りに、御幼少のお顔を見たばかりで、姫上は上總に、我々は良門様のお供をして、この備前へご別れくにもう二十年の餘にもなるから、今の姫上が、ごんな御様子か知らうやうもないが、あのおちいさい時の御容貌が、お歳と共に萌たけて、一層お美しくおなり遊ばしたに違ひない。

庄六。私などは三石で生れたので、上總には如藏尼に申上げる殿の姉君の尼法師がおゐるでなざるに聞いたばかり、瀧夜叉様といふ名さへ、今度始めて知つた。

平太。それは無理もない、姫上が選俗遊ばして、昔のお名にお歸りなされたさいふ事は、俺なごも今度が初耳ぢや。

庄六。姫上はお幾歳ぢやな。

平太。當歳でこの三石へお供した良門様が今は二十三歳におなり遊ばすから、姫上は丁度二十五歳でゐらせられる。

庄六。男ならば血氣盛りのお年輩ぢやな。

平太。いや、女儀ながら、父上様のお氣性を受け繼がれて、なかく男勝りでゐらせられるさ、先着の堀江の當春が

お話であつた。

庄六。先着云へば、殿はさう遊ばしたであらう。

平太。もう程なくおいでであらう、明日は國境まで姉上のお出迎ひをするのぢやご、昨夜から、まるで子供のやうに楽しんでおゐで遊ばした、それも御無理ではない、睦月のうちにお別れなされた良門様には、姉君様のお顔さへ御存じないのぢやから。

(上手の僧房から法師姿に扮した、伊賀壽太郎が出る)

壽太郎。無躰ながらその湯を一碗、振舞ふては下さらぬか。

平太。易い事ではあるが、もそつご後でなふては差上られませぬ。

壽太郎。はふ、後でなふては……

平太。主人の爲めに沸した湯ぢやによつて、初穂を取つた後なら差上げませう。

庄六。御坊はあの寺に住んでおいでなされるのか。(怪訝顔)

壽太郎。いや、諸國行脚の旅僧でござる、昨日行き暮て、あの坊を、一夜の宿願ふたが、住む人もなく、荒れ朽た中に、彌勒菩薩の唯御一體おはしますによつて、今まで懇に勤經を致して居たのぢや、して、お身の御主人さへ、は、は、ア狩鞍にでも參られたのか。

庄六。いや、遠い旅から御來着になる姉姫様をお出迎ひにな

るのでござる。……

壽太郎。ふう、姉君をお出迎ひに、身分高い方々に見ゆるな。

(庄六が答へやうとするのを平太、止める。)

壽太郎は悠々、礎石に腰をおろす)

あゝ、秋たけて何ごいふ静寂な眺めであらう、そこなお人、爰から三石ご申す所はぎの方角にあたりまするな。

平太。三石は向ふに見ゆるあの山の麓がさうでござります。

庄六。お坊は三石へわせられまするのか……

壽太郎。さア、播州路の宿りに承はつたには、國境程近い三石ごいふ山間の一村落は、由緒ある東國の武士達が移り住んで既に二十有餘年、不毛を開き、荒蕪を耕し、眞に天人相和した一仙境、然も人は皆勇悍にして、義を重んじ、惡を憎む事蛇蝎の如く、一度弓馬を動かせば百萬の敵をも恐れぬご。

平太。ハ、ハ、お坊は何を聞かれたやら、天人相和した仙境ごまでは噂に違はないけれど、一度び弓馬を動かせばなごは、あられもない、左様な噂を必ず他國でして下さりまするな。

庄六。三石は決して武人の棲む所ではござらぬ、自耕自牧、偏に天命を樂しむ農民の部落で、鳥を追ひ、獸を狩るよ

り外に、弓馬を動かす術はかいふり知らぬのでございませす。……

壽太郎。さてはお身方も三石の御人でおはしたのか、己に今陳べられた處が決して常人の言葉ではない、なにさま一村の様も偶ばれて、奥床しうござる。

平太。したが御坊、白湯の御所望なら、今申す通りぢやによつて、一度あれへ戻られて。

壽太郎。いや、愚僧はこれに控わて、白湯の供養を待つと致す。

平太。程なく御主人御姉弟が御着きになるので、それにおいであつてはち迷惑にござるによつて。

壽太郎。異な仰ぢやの、領主國たらばいざ知らず、さもない人々が舟坂峠の一勝地を我が物顔にあつかい、猥りに人を追のけふなごゝは。

庄六。はて、意地くねの悪いお坊……、お峠に蹄の音の聞ゆる、殿のお着きに相違ない。

(二人は正面から下を見おろす)

平太。お殿様ぢや、庄六お席をしつかへろ。

庄六。心得た。

(唐櫃の傍にある圓座を取つて、礎石の上に置く。)

相馬太郎良門、次兵太、一大郎等を随へ、馬を乗り捨てた体で正面の坂路から出る。

良門。平太、姉上からの先觸れは参らぬか。

平太。まだ何のお便りもござりません、つい、あの峠路に小金次を見張らせ、お姿の見ね次第御注進申上げる手筈になつて居ります。

良門。左様か、ではこれで憩みながら、待つと致さう、お山紅葉が美しい眺めぢやの。

(四方を見廻し、法師が眼に入る。)

あの御坊は……

庄六。昨夜あの荒寺へ宿られた廻國行脚の御坊ぢやら、白湯の所望にわせられたのでござりまするが……

良門。ほう、白湯の御所望に。

平太。まだ姫上にも殿にも差上げぬ先でござりまするので、後程ご申しまして。

良門。御所望なら差上げるがよいではないか。

平太。は……ではござりまするが、せめて殿が御初穂を……

良門。はて我々は三石郷の一士民、そのやうに尊大ぶることはない、早々差し上げい。

平太。承知致しました。



(平太の酌む湯を、庄六が受取つて、壽太郎に侷める。)

庄六。御坊、御所望の湯を進ぜます、

壽太郎。それは千萬忝ない。

(こゝ、受取る。)

良門。よろしくば、幾椀なりと御所望下さりませ。

壽太郎。殊勝なお心掛を忝なう頂戴す。(飲んで椀を庄六に返す)

(堀江次郎當春、實は太閤光國が正面から出る。)

當春。馴れぬ山路に馬足を痛めて、お供に遅れ、申し譯がござりませぬ。

良門。何の徒歩にしては思ひの外早かつた、嘸勞れたであらう。白湯なご參れ。

當春。忝のふござりまする、(偶々壽太郎と顔見合せて)おうお身は、

壽太郎。(ソツと眼で制して)おゝ思わぬ所で、重ねてお目にかゝりましたな。

良門。尙春、お身はあの御坊を存じてゐるのか。

當春。は、いや、唯旅の宿に泊り合せましただけでござりまする。

壽太郎。あれは、攝津の芥川でござつたな、旅の宿に燈火を

字

かゝげて夜すがら世のさまを語り徹したが、その折多田の源氏一統が武邊の批判、分けて當地を受領する治部權少輔源頼信殿を暗愚な弱輩者ご嘲つたお身の言葉は、今も尙小氣味よくこの所に残つて居りまするぞ、はゝゝ。

良門。お身は領主をきのやうに批判したのぢや。

當春。(當惑しながら)唯、その場の座興でお耳に入れまするやうなこゝではござりませぬ。

壽太郎。いや、なか／＼正鵠を得た批判でござつたわい、先づ頼信殿が、政道に疎く、徒らに我が力を恃んで傲慢に流れ、領民に對しては、苛領誅求を行ふことなき、一々至極さうなづかれることばかりでござつた、卒爾ながらお身様も三石の御住人になら、領主たる頼信殿の政道に就て御意見もあらう、いや更に進んで日本の政道に就て御意見もあらう、如何がでござりまするな。

良門。士民の我等に政道を論する力はござらん、唯、然しながら、王士の民草として、一日たりとも朝恩の忝なき

を忘却いたしましたこゝはござらぬ。

壽太郎。ふう、朝恩を……………王士の民草として……………ソツと

良門の顔色を窺ふ)

(正面から小金次が出る。)

小金次。姫上様の御一行が唯今峠におかゝりになりました。ござりまする。

平太。おゝ、では程なく御來宿ぢや、殿。……

良門。庄六、平太、小金次皆も道までお出迎ひせい。

庄六。畏まつてござりまする。

(皆正面から去る。)

壽太郎。白湯の所望に參つていかふお障げを致した、これ愚僧も發足の用意なご致さうか。

(一禮して上手へ出る。)

良門は見送る。)

當春。殿には唯今王土の民草として、一日も朝恩の忝なさを忘却したことはない。仰せられましたな、

良門。如何にも、叛逆人の子に生れた相馬の太郎良門が、かく安穩に世を送るごき、ひこへに廣大無邊の朝恩でなふ

て何であらふぞ。

當春。然し、平親王將門公の御無念も……

良門。いや、無念なきは以ての外、父は一族の争ひから一步を踏みあやまつて朝敵ならせられた、その罪九族にも及ぶべきを思へば、子に生れたものは、憤んで懺悔の

生涯を送らねばならぬ、本来なれば佛門にも入るべき良門が、かく入らしう世にあるは、一門郎黨二千に餘る三石の農民が行末を思ふ爲ぢや。

當春。殿、私は上總から先發して、この地に參り、初めて仁心を知りました。何卒そのお心を以て今來着する上總の人々をおしへ導かれんごきを、當春ひたすらお願ひ申し上げまする。

良門。初め姉上から、それがしへ上總へ參るやうにこの仰せであつたを辭退し却つてこの地へ姉上のお出でを願ふたは、我が信ずる所に從ふて一同を長く泰平の民たらしめん心に外ならぬ、その間に立つて事を今日に運ばせくれたはお身であつた、良門厚く禮を申すぞ。

當春。恐れ入つたお言葉、この上にも殿のお心を我が心にして相馬一黨の爲めに盡したう存じまする。

(庄が正面から出る。)

庄六。姫上の御着きにござりまする。

(晝夜又、常陸の荒猪丸、長狭八郎保時、鷲沼太郎光忠、伊北十郎宗茂、辛島三郎友春、侍女唐衣、松ヶ枝、梅の井、白菊、竹川、女の童千鳥、小萩、平太、次兵太、一太郎等正面から出る。)  
坂の下には今真いた大勢の人馬の雜が音聞へる。)

良門。姉上でござりまするか、良門でござりまする。

瀧夜叉。太郎か。

(二人は感慨無量の体。)

良門。遙々を御無事の御着、祝着に存じまする。

瀧夜叉。亡き父上に再びまみゆる心地がします、太郎殿、妾

は夢に幾度びかお身を見ました、今も夢ではないかと思ふばかり、よふも天晴な殿振に成人して下されたなふ。

良門。二十餘年振の再會ぞ申すより、今初めての見参ぞ申す

方が誠でござりませう。當歳でお別れした良門は、姉上の面影も存せず、夢に通ふすべもござりませなんだ。

瀧夜叉。お、太郎殿。

良門。姉上。

(ト、手を取交して泣く。やがて涙を拂ふて。)

先づ、あれへ、

(瀧夜叉を、圓座に着させる。)

瀧夜叉。お、當春、そなたも迎へてたもつたのかや。

當春。御安着をお祝し申上まする。

瀧夜叉。長の道中をそなたがゐるやらいで、このやふに淋しか

つたことか、折にふれて思ひ浮んだ数々の歌も皆悲しみの心の籠つたものばかり、妾はしみく涙しいふものを

知りました、やがて歌日記を見せうほごに、なふ當春。

當春。はつ、三石御着の上ゆるく、拜見仕りまする。

(庄六は瀧夜叉に湯を侷める。)

良門。皆姉上にお目見のせいで。

平太。はつ、姫上所詮お見忘れでござりませう、猿島のお館

に仕へました平太にござりまする。

庄六。私は庄五信忠の悴庄六に申まする。

次兵太。次兵太でござりまする。

一太郎。一太郎に申しまする。

良門。皆譜代の家の子、お覺の置き遣はされませ。

長狹。申遅れて居りました、私は長狹八郎保時にござりまする。

鷺沼。鷺沼太郎光忠でござりまする。

伊北。伊北十郎宗茂。

辛島。辛島三郎春友。

荒猪。常陸の荒猪丸でござりまする。

瀧夜叉。下に控わった者ごもや、後から着た者は改めて三石で

見参に入れませうぞ。

良門。いづれも姉上を補佐しく、段、忝なふ思ひ申すぞ

遠路の勞れもあらう、女子共も皆ゆるく、三休懇致すが

よし。

當春。殿のおゆるしぢや、皆下へ參つて懲まれるがよい。

長狭。では暫く御免を蒙りませう。

(皆一禮して立ちかける。)

瀧夜叉。待ちや、荒猪丸。

荒猪。はッ。

瀧夜叉。そこな唐衣を縛し上い。

荒猪。はッ、唐衣殿、御誑ぢや。

(立か掛る。)

唐衣。私に何んの不重寶がござりまして、

瀧夜叉。道中と思ふてわざと今まで素知らぬ體にしてゐた、

近江路を宇治へ越ゆ、山城の川を攝津に下つた頃のそな

たの振舞は怪しいことばかり、分けて攝津の渡邊にて、

人知れず恐びの者らしい男に何事か喋し台せたことを妾

はよふ知つてゐる。

唐衣。それはあられもないお疑ひでござりまする。

瀧夜叉。云やんな、そなたは都の間者であらう。

當春。姫上、唐衣が間者なごは以ての外のことでござりま

する、彼は武藏の兒玉黨の娘は疾くより御承知の筈、

既にその血縁によつて都生れの私までかく人がましう召

置かれるのではござりませぬか。

瀧夜叉。當春、そなたは唐衣のひるきをしやるのか。

當春。いや決して左様では。

瀧夜叉。たごへ兒玉黨の娘にもせよ、怪しい振舞ひあるから

は、糺さにやならぬ、荒猪丸、縛し上げい。

唐衣。當春様、さうぞ姫上のお心の解けますやう、あなた

からお詫びをなされて下さりませ、私は決して怪しい振

舞なご致した覺のはござりませぬ。

當春。姫上、唐衣が身のあかりは當春刀にかけて屹立ます

る、この詮議の役を私に仰せつけ下さりませ……

瀧夜叉。刀にかけてご云やるのか、それほごにそなたは唐衣

を……(嫉妬の表情)

(上手から旅装をさのへた伊賀壽太郎が出る。)

壽太郎。末節よりも大局に眼をお放ちなされ。

瀧夜叉。お、伊賀……

(憚る体。)

壽太郎。尙春は唐衣を、皆も下へ。

(皆正面から下る。)

庄六も平太は殘らうとする。

真門に命じられて湯筒を持つて正面から去る。

殿、先刻わざと名乗りも仕らなんだ御無禮の段平にお

ゆるし下され、それがしは伊賀壽太郎忠國でござる。

良門。なに、伊賀壽太郎……

瀧夜叉。定めし噂も聞いておるやらう、天慶の戦ひに伊豫の純友殿が軍師と知られた壽太郎忠國、今は妾、力さたのむ唯一の味方ぢや。

壽太郎。一行に先立つて上總を發足し、伊賀和泉播磨の同志を訪ねて昨日からこの山中に御來着を待ち受て居りました。

瀧夜叉。して、三石はごのあたりぢや。

良門。姉上、先づこれへ来て御覽なされませ。

先に立つて塔の跡の高みに導き一方を指して、

あの山の麓に一條の川に貫かれた村落が姉上を迎へ参らする三石でござりまする。

瀧夜叉。三方を山に包まれて、稻の波が寄せては返すあの佗びしげな里が三石か。

良門。二十餘年の勞役の賜物としてあの稔らけく豊かな村が今更に二千の住民五百餘の籠を賑はして居りまする、人は天の恵みご地の幸に包まれて、争はず憎まず、心に不斷の春をたゞへて悠然として天壽を楽しんで居ります、

瀧夜叉。して要害は天險は……

良門。要害も天險も争はぬものには何の用もござりませぬ、

姉上。良門はこの樂土に眞の幸福を俱にせん爲強て姉上の御移を願ふたのでござりまする。

瀧夜叉。妾、牛馬に等しい生涯を送る爲めに敵のこの地へ来たのではござらぬ、瀧夜叉には望みがある、素願があるそれを遂げふ爲にこの中國へは移つて來ましたのぢや。

良門。姉上……

小金次が正面から出る。

小金次。唯今百人あまりの同勢が峠の路へ差かゝつてござりまする。

壽太郎は一方を見下ろし、

壽太郎。おゝ、早くも二の手がつかまするわ。

瀧夜叉。太郎殿、あれをお見やれ、あの同勢は皆妾、味方ぢや、人目を憚つて船路を参るものもあり、五人十人散りくゞに來着するものは今後數日に亘るであらう。

壽太郎。播磨に法華山の袈裟太郎、備前に射越、原、今木皆既にお味方を盟ふでござる。

夕陽が赤々と舞台を照らす。

紅葉が頻りに散る。

瀧夜叉。お見やれ、あの夕榮の美しい、血の様な色を、

良門。姉上……

瀧夜叉は快氣に微笑みながらむかふの山を指す。  
微かに人馬の聲

幕

## 第二幕

### 良門の邸

平舞台、中央下手寄りに大きな門、兩袖が遠景になつてゐて、狩獵用の弓矢などが置いてある、門の左右は草葺の土塀にその上、粗糲の櫓が取設けてある。上手は中川ミ綱代垣、下手は厩舎と井戸、門の向ふに山裾の田野と川が見ゆる、平舞台の中央上手寄りに大きな楠の立木が枝を擴げ、厩舎の傍には山櫻が咲いてゐる、永延三年の春。

(侍女の松ケ枝が花筐に井戸の水を汲み、白菊が桶の床几にかけてゐる。)

松ケ枝。(水を汲み終つて)白菊殿、何をしてお居やる、あゝまた故郷の事を思ひ出して居るのであらう。

白菊。こなたは故郷の事を思ひ出さぬ云やるのか。

松ケ枝。思ひ出しても歸れるではなし、私はもう諦めてゐるしたが、何がよふて姫上始め皆様はこの三石へお歸りなされたのであらう、上總は違ふて海は見ゆず明けても

暮ても同じ畑と同じ山ばかり飽きくするではないか。

白菊。私達もやがて土地の女子達のやうに見すばらしい衣を着せられ、野や畑に出て働かせられるのではあるまいか上總は淋しい國でも、此の三石のやうな佗しい暮しではなかつた、男は武術の稽古や狩鞍に日を暮し、女子は歌合せや朗詠や、あゝ、私は上總が戀しい。

(塀の前に賑やかな笑ひ聲が聞え、小金次を取圍むやうにして草籠を肩にした村の娘等が門から出る。)

小金次は尙笑ひ續ける。)

娘の一。それからさうしたのぢやね、ね、小金次ぢの。

小金次。思ひ出しても可笑うて腹が痛ふなる、それからな、

私はひそく語らうてゐる二人の後へそつ忍びよつて持つてゐた釣針を藤左の烏帽子に引つかけて魚を釣り上げるやうに、ぐつと棒を引いてやつた。や、男も女も驚くまいここか、鯉ほぎに跳上つて逸散に逃だした……おかげで俺は釣り針をなふしてしまふた。

(娘達はどつと笑ふ。)

いやそれから後がまだく面白、したが今はお使ひの戻りぢやから夕餉が済んだら、初音子の所へ行く。

娘の二。小金次殿、吃さかぬ、

小金次。親爺は欺しても女子に嘘を云ふ小金次ではない。

娘の一。では待つてゐるぞへ。

娘の三。晩にん。

小金次。お、晩にぢや。

(娘達は門から去る。)

小金次は下手から去る。)

松ヶ枝。何があのやうに面白いのか、

白菊。浅猿しい草刈業も苦にせず、樂さうに笑ひさどめいて

私達もあのやうな心持になる時が来るのであらふか。

松ヶ枝。あゝ、いやゝのゝ。

(門から荒猪丸が出る、弓矢を持ち射落した山鳥と兎を腰につけてゐる。)

白菊。お、荒猪丸殿、狩に行かせられましたのか。

荒猪。退屈晴しに山へ行つたが、鹿狼にも出會はず、漸う

山鳥と兎を射て来た、いつになつたら此の弓勢で敵の胸

板を射貫く事が出来るのか、三石の暮しにはもう飽き飽

きぢや。

松ヶ枝。私達も今それを歎いてゐた所でござります。いつそ

唐衣殿のやうに端下に追落された方が氣が紛れてよいか

も知れませんか。

荒猪。唐衣ミ云へばあの女子、よくく姫上の御機嫌を損

たものぢやな。

白菊。そこには又そこがござります。

荒猪。そこがあるとは……………

松ヶ枝。所詮あなたにはお分りにならぬ事ではござります。

荒猪。ふゝ、さうかな。

(二人は笑ふ。)

下手から唐衣が水桶をさげて出る。

荒猪丸は上手へ、二人は下手へ去る。

唐衣は水を汲み、ちつこなる。門から當春が出る。

唐衣。おゝ光國様。

當春は眼で制す。

唐衣は忍音に泣く。)

當春。唐衣、ゆるしてくれ、そなたが今の苦しみは皆某が

させたのぢや。

唐衣。いぬく、たミへ端下女に追落され、このやうな浅猿

しい業を致しませうとも決して厭ひは致しませぬ。

當春。渡邊の瀧で綱殿が家の子に人知れず傳言致すやうに頼

まなんだから今日の此難はなかつた筈、唐衣、折を見て必

ずお姫上のお心を和げやう、今暫らく耐わてくれ。

唐衣。當春様、私は姫上のお傍に侍してさまざまの事を見聞

き致すより、いつそ遠ざけられて何も見ず、何も聞ぬ

今の嬌淫の方が結句心が隠かて仕合せぢやと諦めて居ります。

當春。従兄妹同志の間柄、某にてそなたの心を酌まぬでは

ない、したが今の身は……

唐衣。いね、今のお心は……

當春。それ……

(人の氣勢に驚いて唐衣は下手へ去る。)

上手の中門から瀧夜叉が二人の女の童を随けて出る。)

瀧夜叉。當春、今戻りやつたのか。

當春。存外手間取り只今になりました。

瀧夜叉。餘り待久しさにそなたの歸りを見に来ました、當春

そなたはもう此の三石に飽きやつたであらうな、いや三

石ばかりではない、妾にも飽果てゝゐるのであらう。

當春。以外な事を仰せられます、何で私が姫上に。

瀧夜叉。でも此頃そなたは鬱陶しい顔色ばかりして居やる。

定めし都が戀しうなりやつたのであらう。

當春。何を仰せられますやら、若し私が鬱陶らしうして居

りましたとすれば、それは姫上の事を思ひ我身の上を案

じてゐた時でござりませう。

瀧夜叉。それ見やれ、そなたは我身の上を案じて居やるので

はないか、蜘蛛の園にかゝつた胡蝶のやうに、そなたは妾の手から逃れやうとて悶々悩んでゐるのではないかと。

當春。逃れやうなら悶々は致しませぬ、遁れまい離れまい

と思へばこそ、惱みもあり苦しきものであるでござりま

す、姫君にも定めしお心づきでござりませう、相馬黨の

面々には激しい嫉妬と憎しみの眼をもつてこの當春を見

据わて居るのでござります。

瀧夜叉。あの面々がさうあらう、皆父平親王様が恩顧のも

の、今は妾、郎黨ぢや、家來ぢや。

當春。皆はこの當春が姫上を誑らかして還俗をお勧めしたか

のやうに思ひなして居ります。

瀧夜叉。……當春、若し妾の還俗がそなたの爲であつたらさ

うおしやる。

當春。私の爲に……

瀧夜叉。戀のために……慕はしさの爲めに……

當春。姫上、仰有つて下さりますな、私は苦しうござり

ます。

瀧夜叉。その苦しういふ悶々を妾はよう知つてゐます、

そなたはいつか一度必ず妾を離れて去らねばならぬ身の



上なのであらう。

當春。ぬゝ……決して……

瀧夜叉。いね隠しやるな、それを知り乍ら妾の心は………よ

當春。

當春。私ミても姫上……當春は姫上の前には智恵も力も失

ふた、盲目同然の男でござりまする。

(互に手を取り交さうとして女の童の居るのに心づく。

瀧夜叉は凜とした態度に變る。)

瀧夜叉。妾の選俗はそなたの爲めではない相馬黨の若者輩の

爲めでもない、亡き父君のお志を受繼がう爲めの選

俗ぢや、そなたは何時くまでも妾の味方ぢやミ誓やつ

たの。

當春。はッ……

瀧夜叉。その志を變へぬ内は、そなたはいつまでも……

いね、妾はいつまでなりミも機會を待つて必ず大望を成

就させずには置きませぬ。

當春。然し互の仕合せの爲めには無事泰平が望ましようござり

ます、姫上は飽までも某の心をお酌取りは下さらぬの

でござりまするか。

(門から良門が沈んだ体で出る。)

殿、領主からの使者は何事でござりました。

良門。租税のこご………なに然し乍ら案じることではない。

瀧夜叉。この程も頼信から二度まで使者を送り、今日も亦重

ねてこは穩かならね事ではないか。

良門。姉上、相馬黨の輩は狩鞍に稱して實は武を練る事への

み日を暮して居りまする、何卒姉上よりお差し止め下さ

りませ。

瀧夜叉。それを領主から咎めて參つたのか。

良門。左様ではござりませぬが、三石の里には、全く應はし

からぬ振舞でござりまするによつて、

瀧夜叉。お身は平親王將門公の嫡子ミ云ふこごを忘りやつ

たのか。

良門。忘れねばこそ斯くの如く、身を慎んで居りまする。

瀧夜叉。父上の御無念は……

良門。御無念があるミすれば、それは年がらを誤られた……

瀧夜叉。云やんな、何もあれ親の志を受繼ぐは子の道ぢや

良門。天の道、人の道には背かれませぬ。

瀧夜叉。あゝ、父君の御高靈がなせ弟の心には宿らせ給は

ぬのか

當春、姫上………

瀧夜叉。妾は父上の御尊靈に祈らねばならぬ、不肖の弟のお託を……

(瀧夜叉は上手へ去る。  
女の童も随つて去る。)

良門。たこへ不肖の子、不孝の子に罵られやうとも……。

當春。いや天は誠を照し給ふはいで何ぞ致しませう、したが差しかゝつて氣遣かはれるは領主からの使者でござりまする。

良門。領主は他國者の我等を憎んでか、負擔に堪わざる苛税を申し附けた。

當春。では、これまででも、重税を承はつてその上に。

良門。のみならず、即刻運上を獻ぜねば三石の郷に退去を命じるこ。

當春。わ、退去を……

(門から喘きながら平太が出る。)

平太。殿大事でござりまする。

良門。なに、大事とは、

平太。領主の無法な、お達しに、村民舉つて怨みの聲を上げた所へ相馬黨の方々が、立まじられました。

良門。はやし立たか。

平太。火に油をそゝぐ體たらく、捨置いては容易ならぬ騒動となりませう。

尙春。殿、一刻も早く鎮撫なさらないではかありませんまいぞ。

良門。うん、お來やれ。

(三人は門から去る。)

上手から伊賀壽太郎が出る。  
それを追ふて瀧夜叉が出る。)

瀧夜叉。待ちや、何のためにそなたらは當春を討たうといふのち、妾は許さぬ、向ふてはなりませんぬぞ。

壽太郎。都の間者を何故、庇護はせられる。

瀧夜叉。わ、

壽太郎。堀江次郎尙春は假名、誠は頼光が家の子、大宅の太郎光國は御存じないか。

瀧夜叉。はゝゝゝ、それを妾は知らいでか、知つてけふまで傍近く召置いたは、却つて彼から都の機密知らうため、

光國が心は疾うに妾が、手のうちに捕はてある。何の今更、殺すに及ぼうか、斷じて許しませぬぞ。

壽太郎。恐るべきは戀。

瀧夜叉。わ……。

壽太郎。女性三志を共にせんじした自らの愚や、笑ふべし。夢は醒た。おさらばでござる。(行きかける)

瀧夜叉。待ちや、女子三蔵ざり、そちは妾を辱むるのぢやな。

壽太郎。姫、戀に事よせ、男の心を釣らうとして、却つて男の力に引据わられた。何人が、父將門公の名をかかつて、

戀のために還俗し、大事を前にして、戀のために間者を庇護ふ、戀のためには父を賣り、同胞を賣り、味方を賣る、淺猿しいこは思召し召さぬか、見限つた忠國があまりか。

瀧夜叉。あゝ、伊賀、そなたは絶ず心で願ふてゐた。妾の惱みを皆知つてゐやつた。戀さいふ妖魔は、何してこの胸に集くうたか。(悶え泣く)

壽太郎。心で戦ふもよし、問わるもよし、西海四國の浪士をかたらひ、旗を中國の空になびかせん爲、爰へ移住をすゝめた我謀計も仇となり、相馬黨の運命の末も見わた。

三石は終に忠國の棲む所ではござらぬわ。

(壽太郎は門から去る。

上手から鹿猪丸が弓を持って出、櫓に上ぼらうとする。) 荒猪丸。姫上を、さみする憎ツくい奴め。

瀧夜叉。待ちや。

荒猪丸。相馬黨に背いた伊賀の壽太郎、たんだ一矢に射倒してくれる。

瀧夜叉。去るものは追ひやるな。そなたら初め相馬黨の人々こそ、妾のたのむ眞の味方ぢや。

門から長狹八郎、鷲沼太郎、辛島三郎が出る。

長狹。姫上、領主の苛税誅求めのために、村には椿事が出来致しました。頼信自ら手勢を侍して、村繼に押し寄せて居るこの風聲にござりまする。御油断はなりませぬぞ。

瀧夜叉。頼光の弟、あの頼信が、自ら向かうこと、鷲沼。我々の耳には入りませなんだが、この程から再三無法な。運上を命じて居つたのぢやさうにござりまする。

長狹。この危急の時に、伊賀殿は何して三石を去られたの、で、ござりまする。

鷲沼。途中で行あふた所、去るこばかりで、仔細も告げずに行かれました。

瀧夜叉。伊賀は去つたのではない。仔細あつて四國に遣はしたのぢや。

辛島。それにしても、當春が唯一騎、馬を飛ばしたは何であらうな。

驚沼。川を越えて、眞直に、福石の方角へ駈させたぞ。

瀧夜叉。馬を飛ばして三石を去つて、それはほんの事かや、

辛島。遠眼ながら、確に當春殿でござりました。

(良門と平太が門から出る。)

長狭。お、領主の軍勢が寄せるは眞でござりまするか。

瀧夜叉。尙春は馬を驅つて、されへ行きやつたのぢや。

良門。領主の心を有め、不當の租税を免ぜしむるやう、當春は自ら進んで頼信殿の側へ参つてござる。

瀧夜叉。わッ、自ら進んで頼信の側へ……、あ、當春は、

當春は、妾を捨て、

平太。殿のため、姫上のために、必ず領主を従ひて立歸るこ

堅ふ誓ふて行かれましたぞ。

瀧夜叉。何の歸らう。敵の間者、大宅の太郎光國が、今こな

つて何で歸らう。

平太。わ、敵の間者。

瀧夜叉。妾のたのむ、心盡しもあだこなつたか。

(微かに喊聲が擧がる、)

荒猪丸が櫓に駆け上つて見る。

擧越しに煙りの立舞ふるの見える。)

荒猪丸。や、村々火の手があがつた。お、二ヶ所、三ヶ所

から、一時に火の手が、

長狭。敵の仕業か、味方がかけた火か。

驚沼。姫上まで、いよく大事でござりまするぞ。

(庄六が喘きながら門から出る。)

庄六。殿、領主の先手が三石へ乗り込んだため、村民の怒りは抑へてやらうなく、二十餘年の辛苦を、むさき奪はれ

んより、

良門。さては自ら火をかけたか。

庄六。三石は早、修羅の巷でござりまする。

侍。姫上、甲冑を運びました。如何がなされまする。

瀧夜叉。ム、附けよ、爰へ持ちや。

(ト着かける。)

荒猪丸。あ、又もしげム、火の手が上がるは。

(次平太、其他、數名の村民が門から出る。)

同時に上手下手から、小金次、一太郎、松ヶ枝、梅の井、白菊、竹川らが出る。

松ヶ枝らは瀧夜叉に装させる。)

次平太。殿、三石二千の住民は、土地を奪はんこする無法な

領主と戦ふ覚悟がござりまする。早々お打ち立下さりませ。

平太。忍従も歸従も、もうこれまでとござりまする。平親王

將門公の、御嫡男平良門公にして、華々しい御一戦な  
ふては、かないますまいぞ。

庄六。二十餘年の辛勞の賜物を、無慚至極な源氏のために奪  
ひ去られても尙忍べしは、お訓へなされますまい。殿、  
殿。

一太郎。三石が滅んでは、殿のお訓へも亡びます。われら  
は、無法な領主に取られやうにて、永の年月膏汗を絞つ  
て、此山や野を耕したのではござりませぬぞ。

小金次。鋤蹴こそこれ、我々には先祖傳來の武士の血が傳は  
つております。手を委ねて耻を受けやうより、花々敷  
く戦つて死ぬ方がましでござります。

次平太。三石の村民は、手から家を焼いて最後の決心をいた  
しました。

一太郎。殿の御出馬を待つて、積に勢揃ひする手筈まで定め  
て居ります。

庄六。まだお覺悟が付きませぬか。

平太。時をあやまればお名にかゝります。三石一郷が天  
下の物笑ひになります。勇ましく劍をふるつて、お起  
ちなされませ。

良門。いや、良門は戦はぬ。永年村民に向つて説き來つた、

我信念は覆はれぬ。

皆々驚く。

瀧夜叉。良門殿は戦はずとも、この瀧夜叉は、父君のために  
一家の子のために、自らのために、戦うぞや。妾は生涯  
の爲めに残されたものは、目醒しい合戦に、華々しい最  
後ばかりぢや。

(伊北十郎が唐衣を引つ立て、下手から出でる。)

伊北。姫上のお居間に忍び入り、密書を奪ふて逃去らうとす

る唐衣、引つ捕らてござります。

(突き放す。)

瀧夜叉。當春の願ひなくば、疾うに命のない唐衣。覺悟せう  
ぞ。

唐衣。この期になつて、命は惜まぬ。當春様が、瀧夜叉とい  
ふ妖魔の手から離れて、源氏方へお歸りなされたが、何

よりの嬉こび、妾の呪ひは成就した。はゝゝゝ。

瀧夜叉。わゝ、おのれ門出の血祭ぢや。

(懐剣で刺し殺す。)

良門。おゝ姉上……。

荒猪丸。や、または二ヶ所から火の手が上つた。村民も相馬  
黨も、兇器をからやかして、積に駆け集まるわ。

瀧夜叉。女ながら、平親王將門公が遺兒、一期の手並を源氏の奴ばらに見せてくれやう。皆續かうぞ。

(瀧夜叉其の他門から去る。  
平太と庄六は残る。)

平太。殿、この陣になつても、尙、おためらひ遊ばしまするか。御卑怯でござりまするぞ。

庄六。殿、殿……

平太。わゝ、もうこれまでぢや、庄六後れな。

(二人も門ざから走せ去る)

良門。骨肉も家の子も、皆良門を捨て去つた。戦ふは勇者か、戦はざるものは卑怯者か、釋迦無二世尊は、我が故郷が敵國に犯され、既に滅亡に迫つた時しも、猶且つ、自ら説き給ふた。三世因果の御教へのために、騎兵に赴かんとする、御弟子達をいましめ、終に故國の滅亡を眼前に見ながら、斷じて劍を取らせ給はなんだ。その大慈悲の勇猛心あつてこそ、三千世界は救はれた。さは云へ三石の滅亡、骨肉の生死……あゝ、南無世尊、かよわき凡夫の良門に、御力を授けさせ給はん。

(天を拜す。)

賊聲近づく。

門から尙春が出る。

當春。おゝ、殿。

良門。當春か。

當春。頼信公の心を宥め、漸く御沙汰を止むる御説を得て、歸つて見ればあのていたらく。村を焼き、劍を握つて立つに至つては、村民の罪はまぬがれませぬぞ。して姫上は、瀧夜叉様は。

良門。姉上はたつた今、合戦のために……。

當春。向はせられたか。御逆心を思ひ止ませやうと心を碎いたかひもなく、

良門。大宅の太郎光國殿。

當春。や、

良門。相馬の太郎良門を、さりこして頼信殿の側へ、引つ立られい。

當春。何ぞ。

良門。良門はこの上もなき武門の耻辱たる、虜になつて、三石の民を救ふために凡ての罪を身に受くる。お身もまた姉上のためには、良門はおろか、何ものをも犠牲になし得る戀の力を持たるゝであらう。

當春。姫を救はんすれば、あたら仁者を犠牲に……

良門。矢叫びの聲、あの相逢の燼を見てくれい。心の目安を

失ふた人々は、切りつ、切られつ、阿鼻焦熱の地獄に喘ぐ。躊躇の一時は、幾百千の人の命ぢや。

(庄六が門から出る。)

庄六。殿、お許し下さいませ。一時でも御諒へに背いて戦はうございましたは、庄六が一生の誤り、殺し合ふては決して入の途ではござりませなんだ。

良門。うい奴、この良門は戦はずして、人々を救はうために虜になつて敵陣へ参るのぢや。

庄六。敵陣へ……。殿の行かせられる所なら、奈落の底までもお供を仕ります。

良門。繩を持って。

庄六。ハツ。

(井戸の傍に落ちた菊繩を拾ふ。)

これは餘りに……。

良門。いや、軍門に身をへりくだるも、捕はれ人のための菊繩ぢや。さ。光國殿。

當春。民のために、姫のために、良門さんの許さしてくれい

(繩を取る。)

流れ矢が扉を越えて飛び來たる。)

庄六。おゝ、流れ矢が危うござります。

當春。大事の御身、早く避けられい。

(庄六に尙春は良門の身を庇護ふ。)

良門。念彼觀音力刀刃斷々壞、如何なる弓勢も、良門が救世の大發願、大勇猛心を傷つくることは、出來まいぞ。

(笑ふて地上に坐し。)

後ろへ手を廻はす。)

幕

### ◆ 投稿を募る ◆

◆ 別に規定は設けません、四百字詰原稿紙五枚以内であれば結構です。

(勿論内容は劇に關したるもの)

◆ 一幕物脚本、正味四十五分間位の時間で上演し得るもの、時代は現代、時代何れにても差支へありません。

◆ 報酬、掲載又は上演の分には相當の原稿料を差上げます。

# 編輯後記

△朝夕の寒さも身に沁む様になりました諸兄には益々御多幸の事と思ひます。

△手前味噌の様ではありますが、創刊號は全部賣切の盛況を見ました。勿論之は愛讀者諸兄の御聲援の賜に深く感銘する次第で、今後は層一層の努力を以て、内容外觀共に充實に最善の努力を盡す覺悟です。今後共御聲援下さいませ様お願ひいたします。

△も一つ手順がうまく行かないと、出來得る限りの原稿を集めたいといふ慾張りから、豫定の發行が後れませんが、來月號からは、規則正しく發行する考です。御寛恕を願ひます。(鳥江生)

△發行が後れた事は鳥江さんの言の如く慾張りからですが、來月號からは、豫定通り發行する考です。最も發行を正しくする爲に、この慾張りを忘れるといふ事

はありませぬ。

△本號執筆者の變つた顔觸としては、京都の澤瀉博士、東京の大村嘉代子氏の原稿を頂戴しました。大村氏は目下製作の方が御多忙で、長文は頂戴出来なかつたが、來月號には、是非お願ひする筈であります。

△常月中座上演脚本として笹山吟葉氏の「將門の子」及吉川觀方畫伯の鷹次郎似顏繪を頂いた事も收獲の一つで共に御愛讀御觀賞を希ひます。

△序でありますが投稿、演劇に關した問合せ、講讀方法等の事に就ての御返信は全部差上げてゐますが、今後本誌に關した此種の御問合せに就ては必ず返信料を御添付下さい。これはしみつたれからではなく事務の煩雜を防ぎたい爲からです。御承領下さい。

△來月號は別項豫告通り顔見せ號とし加ふるに、卒直な興行戰の縱横談を併載する筈です。御刮目を希ひます(佐々木生)

定價	送料
一部 參拾錢	五厘
三ヶ月 九拾壹錢	送料共
半ヶ年 壹圓八拾錢	送料共
一年 參圓六拾錢	送料共

毎月一回發行

▽諸代はずべて前金の事△  
▽郵券代用は一割増の事△  
大正十四年十月廿五日印刷  
大正十四年十一月一日發行

編輯者 鳥江 鐵也  
大阪市南區久左衛門町八番地

印刷人 成山 桂三  
大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 劇壇縱橫社  
(松竹合名社内)  
電話南(一)二四〇番  
六六八五番

大阪市東區島町二丁目  
印刷所 植田印刷所



神 戸 名 物

# てつちり

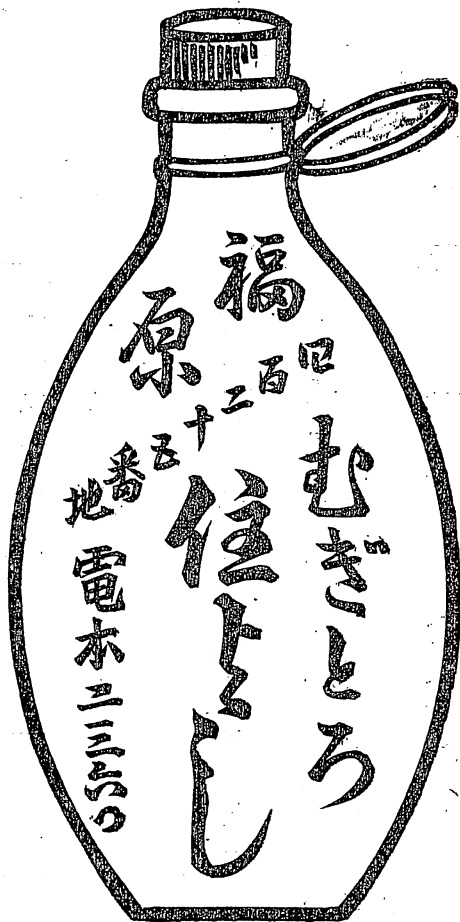
海川魚  
會席料理

自慢の廣島直送りの

かき料理を一度召しあがって御覽

# かき

神戸市新開地(やつこ裏溝の側)中町六丁目



福原

二百五十番地

電本三三三〇

むぎとろし

# 芝居 マ マ

## 月刊大畫報

演劇界の最高權威誌  
映畫界の最高權威誌

◇「芝居とキネマ」は日本に於ける最高級印刷術の最大能力を發揮した月刊大畫報で、名實ともに日本一の大雜誌です。

◇材料の豊富、編輯の妙、色版網目銅版グラヴェニア印刷等の美しさは、全く類誌を壓倒し、本誌の一大特色たる松方幸次郎氏秘藏の芝居版畫は國寶的逸品揃ひで、大好評を博して居ります。

發行所  
大 阪 市 堂 島  
振 替 大 阪 四 五 〇 番  
大 阪 毎 日 新 聞 社  
東 京 市 丸 の内  
振 替 東 京 二 八 〇 〇  
東 京 日 日 新 聞 社

◇各地書店、雜誌店並に新聞取次店にて販賣。品切の節は本社へ申込を乞ふ◇

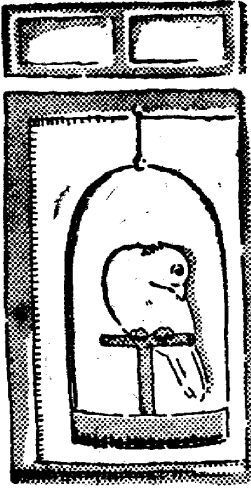
◇三三判大型  
◇定價一部八十錢

(送料三錢)

▼半年分前金四円八十錢

▼一年分前金九円六十錢

(郵務不要、海外税一部廿錢)



ハナコ

鸚鵡ガエシ

- (父) オ早ウサシ.  
オ=オハヨウサシ.
- (父) 宣 徳.  
セ ン ト ク.
- (父) 火 鉢.  
ヒバ=ヒ ハ 子.

サムク ナツテ マイリマシタ  
オドロクホド ヨク ウレル  
マツサカヤ ノ 宣徳火鉢

1ツイ—8インヨリ=1010

大阪日本橋

松坂屋





純國産の精華最高級  
ユートピヤー號蓄音器

元造製

丸蓄製作所

日本大阪

蓄音器は既に娛樂品の域を脱し藝術、教育、語學教授上の必需品として各家庭に缺くべからざるものとなり國産品獎勵の爲政府が外國製品に對し十割の加税を課すに至れり夫れが爲内國の製造家大に覺醒し各競て優秀品製造に努力の結果價格も廉價にて外國品を凌駕すべき優良品の產出するに至れるは大に國家の爲慶賀の至りに堪へず

新時代の要求によりて生れた

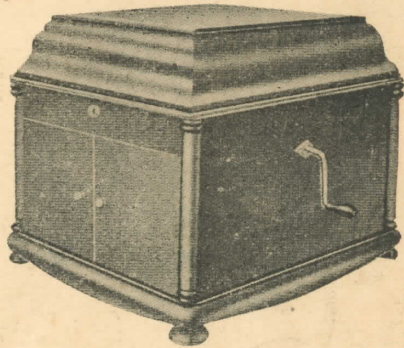
ユートピヤー號蓄音器

ユートピヤー號 蓄音器は數十年の經驗に依り最新の學理を應用し震動盤(サンドボックス)に對して非常なる苦心が拂はれて居ります

ユートピヤー號 蓄音器は外の體裁より内部機械の堅牢は他社製品の追從を免さず

ユートピヤー號 蓄音器の發聲に至りては從來蓄音器の發聲と異り純肉聲且つ強大なり

ユートピヤー號 蓄音器は全國到る所の信用ある蓄音器店にて販賣す



UTOPIA  
Graphophone

大正十四年十一月一日印刷納本(毎月一回發行)  
大正十四年十月二十七日第三種郵便物認可